
図書室へ行こう 2

大串線一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書室へ行こう2

【Nコード】

N0012J

【作者名】

大串線一

【あらすじ】

そこへ行けば俺のハーレムが待っている。それを形成する四人の美少女図書委員は、顔がいくせに性格が今ひとつで、かつては俺を求めようとすらしなかった。でも最近、なんかいい感じで——私立高校の図書室の隣の図書準備室を舞台とする学園生活の続編。※第4章麻乃編、連載中です。

第2部 プロローグ（前書き）

いよいよ始めました、続編。出来る限り迅速に更新していくつもりです。よろしくお願いします。

第2部 プロローグ

俺——相川涼が四人の少女に出逢ったこと。それは奇跡なんじゃないかと思ってる。

全世界の総人口がおよそ七十億人くらい。俺は、そのうちの四人と親密になった。それどころか、同じ学校に通ってる連中やクラスメートたちに出会えたのも十二分に奇跡だと言えるはずだ。七十億分のいくつ、ってわけで、それらはとても確率の低い話。

そして俺は、毎日のようにその奇跡を噛みしめている。

「ふうー」

何をするわけでもなく、俺は自室のパソコンを眺めている。数ヶ月前にあたる夏休み。海の日だったっけか。その日に撮った、俺と美少女四人が写っている集合写真をデジカメラからパソコンに取り込んだやつが、今のパソコンのデスクトップになっている。

何度見ても飽きないその画像を眺めていると、時間すらも忘れてしまう。

「やば、もうこんな時間」

画面の右下に表示された時間は、もう結構な時間を示していた。日付が変わってしまっている。俺は、眠い目をこすりつつも速やかにパソコンをシャットダウンさせた。

「さてと、寝るかあ」

ベッドの中に横たわった。

明日も、俺は学校へ行き、放課後になれば図書準備室で四人の美少女に会い、つまらない話とかをする未来を予期した。そしてその次の日も同じことを繰り返していくんだ。

——何かに導かれるように。

第1章 プロローグ（前書き）

今作も、前作と同様に女の子それぞれを中心に描いて各章としていきたいと思っています。

順番は、第1章から順に、春香、穂波、千里、麻乃の順で書いていこうかなと考えています。僕自身、気まぐれなのでそのようにはいかないかもです。そのときにはちゃんとお知らせいたします。

というわけで第1章は春香編です。

ー主な登場人物ー

- ・リョウ（相川涼）：風梁学院二年D組。今作の主人公。
- ・赤井麻乃：二年D組。赤いロングヘア。
- ・片岡千里：二年C組。黒髪ツインテール。
- ・佐伯穂波：一年A組。黒髪ショートヘア。
- ・川瀬春香：一年A組。茶髪ポニーテール。

※女の子四人の髪型がバラバラなのは作者自身の好みです。

第1章 プロローグ

日が沈みかけている影響か、薄暗くなりかけているこのとある場所
所で、私は中腰になりながら目の前の少女の瞳を見つめ、口を開く。

「今までそばにいた人、あるいはそばにあったものの大切さに気づくのは、それを失ってからというのはよく聞く話だ。身近にあるからといって、存在していて当然だと思い込み、軽^{かる}んじる。でも、なくして初めて、それは尊い人やものだということを知り知る。

人間というのはとても愚かで情けない生き物だ。決して取り戻せないものを、取り戻したいと強く望む。……そうだろうか？ 赤井麻乃^{まの}」

その少女は、私を睨みつけた。綺麗な目だ。

「そんなこと、知らないわよ」

汚れたコンクリートの壁にもたれかかって座っている少女——赤井麻乃の両手首と両足首は紐で縛られている。そう自由には身動きはできない。さっきまではじたばたともがいていたが、ようやく無駄だと悟ったらしく、今は穏やかにしている。

私は去年の春、誰よりも愛していたと誓える女を手放した。あのときの悲しみは、長い年月を経た今でも色褪^{いろあ}せることなく思い浮かぶ。

「そ、そんなことより、私をさっさとこっから出しなさいよ!」

「まあまあ。焦るなって、お嬢ちゃん」

私は立ち上がり、コンクリートの地面の上を歩き出す。ローファ
ーがカツカツと音を立てた。赤井麻乃は私のその動きをずっと目で
追っている。

「残念だが、しばらくは君を解放することはできそうにないな。ま
さか、私が何もせずに君をここから出すとも思っていたんじゃないな
いだろうね」

「……………」

私の言葉に、なぜか彼女は顔を真っ赤にして俯いた。長く赤い髪
により、彼女の顔の大半が見えなくなる。

「わ、私の……は、は、初めてを奪ってもいい男は一人しかない
の! 今日初めて会ったばかりのあんたなんかには……えと、そ
の……あげないんだから! いくらあんたが若くてカッコイイから
って言ったってよ!」

何だか壮大な勘違いをしていた。

「勘違いするな。そんなことはしない。だいたい、その縛られた状
態じゃできるものもできない」

「で、できるもの……」

未だに頬の紅潮から脱せないでいるらしい少女を置き去りに、私

は一方的に話すことにした。

「……今日、君をここに連れてきたのには理由があるんだ」

第1話 始動

幸せだと思ふ基準は、当然だが人それぞれ大きく異なっていると俺は思う。手に入れた大金を大胆に使ってリッチな生活をするのが幸せだと感じる人もいるし、貧乏だろうと毎日変わらない生活をするのが幸せとを感じる人もいるだろう。

かく言う俺は後者だ。俺のみならず、人間という生き物は、何だかんだ言つて、不変な毎日が一番落ち着くんじゃないかと俺は考えている。そして俺は、その不変が一番幸せだと思う。

そう考えるならば。

「今が一番幸せだね、穂波^{ほなみ}、春香^{はるか}ちゃん」

俺は、室内にいる二人の美少女にそんな声をかけた。

俺には、放課後、私立風梁学院^{ふうりょう}の図書室の隣にある部屋——図書準備室で時を過ごすという日課がある。

今も俺は図書準備室にいる。いつもは俺の他に四人の女子高生が集うのだが、現段階ではまだ美少女は二人だけである。

「……ですねー。リョウ先輩と一緒に過ごせるなんて幸せですねー」

ドアの近くの壁に寄りかかって立っている美少女——佐伯穂波が
いかにもどうでもよさそうにそう返してきた。棒読みだった。黒髪
のショートカットを揺らしながら大袈裟に何度もうなずいている。
逆に傷つくよ、穂波。

「……………」

部屋の隅に置かれた椅子に座っている美少女、川瀬春香ちゃんに
いたっては、完全なる無視だった。ケータイをいじっているだけで、
顔を上げようとすらない。茶髪のポニーテールも今日は愛らしい
くらい似合っており、文句はないんだけど、この冷たい性格をどう
にかしてほしいものだ。

「穂波いー。そんなところに立ってないで座れよ、俺の膝の上に」

「それなら私、一生立ってます」

「……………は、春香ちゃん。いつもケータイで何やってるの？ 出
会い系サイトなら、そんなの必要ないよね。だって春香ちゃん、俺
の恋人だもんね」

「あなたの妄想の中だけでは、でしょう？」

二人とも、今日はかなり不機嫌みだった。

「むうー……………」

たいへん虚しくなってきたので、俺はいじけて黙ることにした。

……。辛すぎる。なんだこの沈黙。この場所は俺の心安らぐハーレムじゃなかったのか？ 美少女四人に囲まれた幸せなひとときが過ごせる場所じゃなかったのか？

そうだ。今日はまだ、残りの二人が来ていない。あの二人がいな
いから、この一年生両名はノリが悪いのか。うん、そうに決まっ
てるさ。俺だってそうなんだから。

そんなことを考えていると、コンコンとドアがノックされる音が
聞こえた。

「はい」

その音に対して、穂波と春香ちゃんが俺を相手にするときとは比
べものにならないほど明るい声で返事をした。なんだこの反応の違
い。

その声から一拍置いて、ドアが開かれる。入室してきたのは、俺
のハーレムメンバーの一人、片岡千里かたおかちさとだった。千里は、室内に足を
踏み入れると後ろ手にドアを閉め、柔らかなひだまりのような笑顔
を浮かべて軽く会釈をよこした。

いいよなあー、千里。なんていうか、清楚って感じ？ 同級生以
上には丁寧語で話すやつだし、その話し方が余計に可愛さを引き立
たせるというか……。何てったって、この微笑を見てときめかない
男はきつといない。

つまり、千里は可愛い。

「あれ、麻乃はどうしたんですか？」

千里は入ってすぐのところにある椅子に腰を下ろし、俺を見ながら尋ねてきた。そこが千里の席だ。

「あいつなら、今日は来てたよ。『先行ってるね』って言ってたけど、見ての通りまだ来てない」

俺が今座っている椅子の斜め隣の椅子は、もう一人の美少女、赤井麻乃の指定席なのだが、まだ使われていない。窓際の席が、今日は空いていた。

「多分、急用でも入ったんじゃないですかね」

千里がさほど心配していないような口調で言った。

「だね」

俺も大したことには考えず、ケータイを開いて麻乃宛てに適当なメールを打ち、送信した。

「……さてと。何しよっか？」

と俺が口にするのは、普段俺たちがこの部屋でしていることが行き当たりばったりだからである。ときに雑談、ときにトランプ……などなどをしている。その日に何をするかなんてのは成り行きで決まってしまうから、案を求める意味はないんだけど。

「意見なし、か。うーん……………」

十秒ほど唸って、俺は考えるのを放棄した。

「今日は好き勝手してよし」

許可を下さずともそうしていた気がしたが、それだけ告げた俺は、ぼけーつとすることにした。そして物思いに耽^{ふけ}る。

「さみいー」

もう暦は十二月で、それに合わせるように寒さも本格的になってきた。もうすぐクリスマスとあってか、街は徐々にクリスマスモードになりつつあり、最近はどこどこにイルミネーションが見られるようになった。

俺はその派手な街並みを見るのが嫌いではない。むしろ好きだ。それに、女の子たちが真っ暗な夜道を歩かねばならないときに道を照らしてくれるから、不審者から守ってくれる。やっぱり明るいってのはいいことだね。

「あ」

不意に、宙を見つめていた穂波の視線と俺の目とが合った。

にこっと微笑んでみると、穂波は露骨に嫌な顔をして目をそらした。

くそっ。過去に一夜を共にしたあの日の穂波はどこに行ったんだ！？ あの夜はめっちゃめっちゃ甘い声を出して俺をおかしくしただろ（一部誇張あり）！

……いい、いいんだ別に。俺は何事にもポジティブに生きると決め

たんだ。どん底に突き落とされても、這い上がってみせる！

と俺が決意を固めていたところ、

「ケータイ、鳴ってますよ」

隅っこ大好き春香ちゃんが、自分の液晶から顔を上げた。彼女の言葉通り、マナーモードにしていた俺のケータイのバイブが振動していた。

開いて見ると、麻乃からメールを受信したらしかった。俺はすぐにその内容を確認した。

「え……………」

思わず言葉を失った。世界が、音を失った。色も失った。

何気なく見た画面。そこに書いてあった文字の羅列。

『たすけて』

たった四字。しかしそれは、俺の動揺を誘うには十分すぎた。凍りつく。このメールは冗談だと信じた気持ちになる。「嘘だぴょーん」みたいなメールがもう一通くるのを待った。だが、いつまで待っても俺の携帯電話は震えなかった。

俺の異変に気づいたのか、穂波が壁から離れて駆け寄ってきた。

千里も、春香ちゃんも、俺の椅子を取り囲み、俺の手元を覗き込む。

そしてただちに俺と同じように言葉を失った。

各々（おのおの）が黙り込んでしまったため、廊下から洩れ聞こえてくる生徒たちの話し声がやけに大きく感じる。

「助けて、ということは、赤井先輩に何らかの危険が迫っていると考えるのが妥当ですよね……」

静まり返った室内に、この状況においてもなお泰然自若を貫く春香ちゃんの声が響いた。

彼女が冷静にそう言ったことで、それが間違いないことだったという気がして、俺たちはますます不安感を募らせる。

「で、でもさ、学校にいるのに助けを求めるような事態に陥る？」

穂波がいつもと異なる小さな声で、この場にいる全員に尋ねる。

確かにそうだ。校内にいながらにしてそこまで危険な場面には遭遇はしない。じゃあ、麻乃の身に何があった？

男子生徒から立て続けにコクられて、それを断るのに疲れたか？いや。それはない。赤井麻乃という女は俺と付き合っているという噂が流れてるに違いないからだ。俺はそう信じているからその方向性は却下。

あるいは、授業中に居眠りしまくっていたせいで教師に大目玉を喰らってるのかもしれない。……いや、それも違う。麻乃は人の話をロクに聞かないから、説教なんて聞き流す。だから助けを求めるわけない。これも却下。となると……。

「もしかして」

と千里の声。俺は考えるのを中断し、千里の可愛らしい顔を見つめる。

「麻乃、校内にいないかもしれません」

千里が言い終えるのとほぼ同時に、俺のケータイがブルブルと鳴った。。メールを受信し、送り主は麻乃だった。

俺は、たった今受信したメールを開く。そこには、信じたくもない文章があった。

『先程のメールは赤井麻乃だが、今このメールを送ったのは彼女ではない。別の人間だ。赤井麻乃は今、私のもとにいる』

俺の中を、緊張が走る。千里も、穂波も、そして春香ちゃんも、みんなが深刻な顔になる。

そのメールには、まだ続きがあった。俺は、囁くような小さな声でそれを読み上げる。

「『どうしあたえさぬさう。ひれきんてろと』……………何だこれ?」

何度も突っかかりながらそれを読んだが、まったく意味不明な文章だった。俺は首を傾げる。

どう見てもテキストに文字を連ねただけにしか見えない。単語の区切り方次第で何かを意味する言葉になるわけでもなさそうだ。

「最後のはワケわかんないにしろ、少なくとも春香ちゃんの言うとおり、麻乃に何かあったと考えるのは正解みたいだな」

俺が極力落ち着いた声でそう言うと、全員が焦りを表情に出した。もちろん俺もだ。麻乃が誰だか知れないやつのもとにいる。早く助けたい。でも、どこにいるのかはこのメールじゃ定かでない。そんなもどかしい思いが、俺たちの冷静さを欠かせていた。

……否。全員、ではなかった。

部屋の隅に戻っていた春香ちゃんは、椅子に腰掛けて、そこそこな膨らみを見せている胸の前で腕を組んでいた。

しかし春香ちゃんは、思いつめているような表情ではなく、どこか遠い目をしながら一点を見つめていた。

第2話 解説

『どうしあたえさぬさう。ひれきんてろと』

しばらくワケわからんメールを見つめていると、やがて画面が暗くなった。それに合わせて俺は口を開く。

「どこにこのメールを作成したやつがいるかがわかればなあ」

適当なボタンを押すと、再び画面は明るさを取り戻した。

「もしかして、この変なのがその場所を表してんじゃない？」

穂波の予想に、俺はうなずいた。千里も「うーん……そうみたいですねえ」と唸りながら同意する。

この一見無意味な文字の行列は暗号で、これを解くことにより『私』と麻乃がいる場所、あるいは何らかの手がかりを知ることができる。そうに違いない。そうでないとするならば、わざわざこんな無駄な文字たちをメールの本文に含んだ意図が掴めない。

「春香ちゃんは思う？」

俺が部屋の隅に目を向けるものの、春香ちゃんは答えず、身動き一つしないで腕組みしていた。

室内に、暖かい空気をもたらすストーブが灯油を燃やす音だけが響く。

聞き流されてしまったのかと思っていたが、俺自身が尋ねたことを忘れたところになって、春香ちゃんは腕組みをやめ、「多分ですけど」と声を発した。外見からは少しチャラチャラした印象を受ける春香ちゃんだが、それは穏やかな声だった。

「これ、わかりますよ、私」

春香ちゃんが俺のケータイを遠慮がちに指差しながら、しかし口調はきっぱりと言った。

俺、千里、穂波は、三人とも同じ方向に目を向ける。いつも部屋の一角を陣取り、ケータイばかりいじっているが、最も頼りになる彼女の方に、だ。

「中学時代に聞いた話なので、記憶がやや不鮮明で不確かなところもあります」

春香ちゃんが語り始めるのを、俺たちは神経を尖らせて聴く。

「戦時中の日本で、これと同じような方法による暗号が使われました。当時、日本人どうしが作戦などを紙に書き、それによってやり取りをしていたんです。でも、書かれた情報が他国の何者かに洩れるおそれがあった。そこで日本人は、ある簡単なメソッドを用いて、機密な情報を知られずに済むように図りました。それは簡単でした。そうであるが故にすぐに解読されて作戦は失敗しちゃったんですけどね」

「その方法って？」

穂波が先を急かす。ところが春香ちゃんは、いたってマイペースだったようで、ストロブの前まで歩み寄り、手をこすり始めた。そして顔だけをこちらに向けて言う。

「五十音の表を思い浮かべてください。その表に準じて、一つ前、もしくは一つ後ろにずらすんですよ。その際、前後どちらにずらすかはその文章中では決まっています」

いかにも簡単そうに春香ちゃんは言うが、彼女並みに頭のいい千里はともかく、成績が中の下の俺と中の中の穂波は微妙にしか理解していなかった。

そんな二人を見てか、「つまり」と千里が補足する。

「例えば、『あ』だったら『い』または最後に戻って『ん』に、『ん』だったら『を』または最初に戻って『あ』と置き換えればいいんです。だよね？ 春香」

春香ちゃんはコクリとうなずいて、頭の堅い俺と穂波を見る。「わかりました？」と言いたげな目だ。バカにするんじゃない。

「わかったよ、俺は。『穂波が好き』っていう文章があったとしたら、『が』の前に濁音のついた文字はないから、後ろにずらして、ええー……『まにむぎせく』となるわけだ」

「それなら私もわかったよ、春香。『そあぴう、すあど』っていう文章なら、『先輩、死んで』ってなるんだね」

俺に対して穂波がひどいことを言っていた。

「穂波？ 人に気安く『死んで』なんて言っちゃダメだから」

「あら。どうしたんですか、リョウ先輩。今言ったのはタダの一例です。それを気にするなんて、あたかも自分がそう言われるようなことをしてるみたいですねえ」

「うぐ……」

反論する以前に、悲しくなった。なんだよなんだよ。みんなそうやって俺をいじめやがって！ ツンなのか？ おまえらツンなのか？ どうせ俺が死んだら死んだでめっちゃ悲しむんだろ？ 号泣するんだろ？

俺はテーブルに突っ伏し、泣き崩れた。母さん、俺、女の子からイジメ受けてます。

「じゃー、そのやり方でこの暗号を解くと……」

穂波が俺の手からケータイを奪い、俺への謝罪の言葉もなしに文字を打ち始めた。そんな悲しいこと言うなよ、穂波！

まるで俺の存在をないものとしているかのように、三人の美少女たちはストーブに手をかざす春香ちゃんの周りに身を寄せ合い、俺のケータイに何やら文字を入力している。

「うーん……これじゃすつきりしないなあ」

「じゃあ、後ろじゃなくて前？」

「片岡先輩の言う通りだと思う。前で攻めるとどう？ 穂波、入れ

てみて」

な、なんかセリフだけ抜き出して聞けば実にエロいことを話して
るように聞こえる。だが彼女たちは今、三人によるレズプレイに走
っているわけではなく、暗号を解読しているのだ。勘違いしないよ
うに。

「あ！　こっちなら通じる。でもこれ……」

解読に成功したらしい穂波だったが、どういうわけか浮かない顔
になっている。俺はすぐさま、穂波の手から携帯電話をもらって画
面を覗き込んだ。

例の意味が掴めないメールを本来の文章に直したものがそこに見
られた。

『だいさんそうこにこい。はるかをつれて』。

「だいさん……第三倉庫に来てのことか。じゃあ、それがどこに
あるかはともかく、そこに麻乃がいるには違いないけど……」

やはり後半が気になる。はるか……春香ちゃんを連れて、って、
どうしてなんだろう。理由はともかく、要するに誘拐犯は身代金で
はなく川瀬春香という人間を要求しているということになる。

「なんで春香なの？」

穂波は、俺も聞きたかった率直な疑問を口にした。春香ちゃんは、
横長の四角い箱の形をした暖房器具の電源を切る。

「理由はだいたいはわかります。ですが、今はそれよりも第三倉庫とやらを探しに行くことが最優先事項です。早く行きましょう」

春香ちゃんはそう言うと、先陣を切ってドアへと歩き出した。

残った俺たち三人も、互いに目線によるやり取りをした末にうなずき、茶色いポニーテールを追った。

第3話 搜索

日は傾き、薄暗い外界を俺たちは歩いていた。麻乃がいると思われる第三倉庫の場所はわからないが、少なくとも、図書準備室を出ねば事態は動くはずもなく、外の道を歩む他に選択肢などなかった。だから今、俺たちは商店街をほっついている。

「そもそも、この街に倉庫なんてあったっけ？」

俺は、隣を歩いている春香ちゃんに根本的な疑問を投げかけた。

「わかりません。やはりここは、聞き込みをするのが最善かと思います」

俺たちより数メートルほど前を歩く二人を見ながら、春香ちゃんが答える。聞き込み、か。なるほど。それがいい。

「千里、穂波」

呼びかけると、名を呼ばれた彼女らは、歩を止めて俺たちが追いつくのを待った。

「なんですか？」

千里がツインテールを風になびかせて尋ねた。俺と春香ちゃんは、千里と穂波同様に立ち止まる。俺は目の前の二人に提案を口にする。

「二人とも。このままぶらついてても意味ないから、通行人に聞き込みしよう。ひょっとしたら場所を知ってる人がいるかもしれない」

緊張感を醸し出すかのように二人は無言でうなずき、早速その辺を歩いてた通行人に話しかけていた。

「よし、俺たちも行こうか、春香」

「呼び捨てっていうのが引っかけられますが、そうしましょう」

「まずは……」

「先輩。さりげなく手を繋ぐのやめてくれませんか」

恋人同士のように春香ちゃんの白い手を握ったのに、俺の手は素早く払いのけられた。心なしか春香ちゃんの頬が薄く染まっているように見えた……のは気のせいだろう。

いいじゃないかよ。手くらい握らせろよ。胸揉ませろよ。キスさせろよ。エロいことしようぜ（口にすると通行人によって警察に通報されかねなかったので発言は自粛）。

「これだから先輩はダメなんですよ」

なんか後輩に絶望されていた。それになんか、上からの言葉だった。

俺ががっくりと肩を落としていたところ、「ホント!？」という穂波の叫び声が聞こえてきた。

互いに顔を見合わせ、俺と春香ちゃんはそちらへ向かう。

「このおじいちゃんがね、倉庫があると知ってるって」

穂波と千里が対峙していたのは、杖をついているおじいさんだった。穂波の言葉が信じられず、俺はその老人を見る。

「おじいさん、本当に知ってるんですか？」

「……………」

あれ、おかしいな。聞こえてないのかな。

「第三倉庫、どこにあるか知ってるんですよね？」

声量を二倍にして、白髪頭の老人に再度尋ねる。

「……………」

やっぱり、年齢を重ねると聴力が衰えてきてしまうのだろうか。

俺に代わって、春香ちゃんが確認を取る。

「あなたは、私たちが探している第三倉庫の場所をご存知なんですか？」

「ああ、知っとるよ。……………姉ちゃん、あんた若いのにえらい美人だなあ」

「聞こえてんじゃんかよ！ 俺より声の大きさは小さかったのに！
つうか春香ちゃんを口説くな！」

どうしてだろう。あ、そっか、偶然周りの音に紛れたから俺のときは聞き取れなかっただけなのかもしれない。

「で、早速尋ねますが、どこにあるんですか？」

俺が問うと、じいさんは春香ちゃんの顔を見つめたまま、「……
……」と黙した。

あれ？ おかしいな。なんか俺の言葉に対してだけ無視してる気がするんだけど……思い過ぎしだよね。うん、きっとそうだ。

「場所を教えて、おじいちゃん」

穂波が老人に話しかけると、彼は実によく笑って、「まあ、急がんでええよ」とマイペースな発言。

「にしてもおまえさん、めごい（※可愛いの意）顔しとるのー」

じいさんのくせに、次は穂波を口説き始めた。

「いやあ、気のせいですってば」

おまえはそこで照れるなよ。わかりきってんだろ、そんなこと。

「えーと、この近くですか？」

千里が質ただしたのに対し、老人は、「ちよっと遠く……だったよう

な近く……だったような……。にしてもお嬢ちゃんもめごいのお。
今日はめごいおなご（※女の意）によく出会うのう」と、今度は千里を口説き始めた。なんだこのジシイ。

「いえいえ。そんなことは……ないです」

何！？　なんでそこで赤くなるの！？　俺に言われてもこうはならないのに！

じれったい。早く答えさせよう。

「あの、急いでるんで、早く教えてくださいませんか？」

「……………」

「そして俺だけ無視！？　アウトオブ眼中的な！？　てか目すら合わせてくれないし！」

やっぱり無視されていた。俺がシャウトするのが聞こえたのか、それとも悔しさのあまりに俺が飛び跳ねているのが目についたのか、老人は俺の方を指差し、千里に質問する。

「ここに誰がいるか？」

「まずそこから！？　俺の存在すらわかってくれてないの！？　え、俺って幽霊？」

俺、一度死んだんだっけ？　いやいやいや。そんな記憶はないし、さっきまで春香ちゃんたちとも普通に話してた。ゆえに、俺が幽霊だなんてありえない！

「いるのはいるんですけど、普通の人には見えないんです」

衝撃事実発覚！ 俺、相川涼はゴーストだった！

「……って、んなわけあるか！」

ふざけんじゃない。俺はここまで主人公を張ってきた男だぞ！
こんなところで主人公が幽霊でした、なんて事実、認めたくない。話の内容変わるわ！ つうか、俺は幽霊なんざあ信じねえ！

「そんなことはさておいて、場所をお伺いしたいのですが……」

春香ちゃんが丁寧な言葉づかいをしている一方で、俺はずーんと落ち込んだ。俺、「そんなこと」の部類に入れられちゃいました。さておかれてしまいました。

「あー、場所だったか。えー、この先に八百屋がある。その近くにある脇道を道なりに進んでけば、そこに着くはずだったと記憶してるよ」

老人の道案内に、俺たち一同は感謝の言葉を告げて、すぐさま駆け出した。

するとそのとき、「おい少年」とその老人に呼び止められた。俺が立ち止まるものの、三人の美少女は構わず先に行ってしまった。いるため焦る俺に、さっきまで俺を無視し続けていたじいさんは声をかけてきたのだ。

「誰がおまえさんの恋人なんかな？」

おそらく親切であつたろう老人に言われた道をなぞつた俺たちは、五分と経たぬ間に倉庫を発見した。

第一と第二はどこにあるのか知らないが、ここが第三倉庫らしい。

周囲は田んぼしか見えず、さっきまでいた商店街のささやかな賑わいが嘘みたいに静まり返つたその場所に、それは立地していた。

これといった特徴のない倉庫は、クリーム色のシャッターが完全に閉まつており、使われているのか定かでないくらいだった。どうやら廃墟っぽい。暴力団のアジトじゃあるまいな。

「本当にここに麻乃がいるんですかね……」

千里がただでさえ細い目をさらに薄めてその建物を見た。確かに、このシャッターの向こう側に麻乃がいるなんて信じがたい。何せ物音一つしないのだ。

空に浮かぶ、雲に隠れた月が、さらに不気味さを引き立たせている。時折肌を掠^{かす}めていく冬の冷たい夜風が、俺たちに身体的、精神的にダメージをもたらしていた。

「寒いよお」

穂波がその場にしゃがみ込み、スカートから伸びる生脚を手でこ

すりながら言った。その声にはいつもの覇気が感じられず、俺までもが気が滅入る。

「とにかく、中に入ろう。こんなどこにいても時間の無駄だ」

少しでも早く麻乃に会いたくて、俺は迷うことなくシャッターのもとへと歩み寄る。千里と春香ちゃんもそれぞれ俺の両脇につく。穂波も渋々といった感じで立ち上がり、こちらに歩いてきた。やがて春香ちゃんの隣で止まる。俺はそれを確認すると、深く息を吸う。

「よし、じゃあ、開けるよ」

手動のそのシャッターが、ついに開け放たれた。

第4話 侵入

シャッターの向こう側は明かりが灯っていた。そしてそこにはダ
ンボールやら何だかよくわからないものとかが散乱していた。それ
に、かなりの期間未使用なのか、ひどくほこりっぽい。

……いや。そんなことは今はどうでもいいんだ。

そう思えるくらい、俺は『その光景』に目を奪われていた。俺は
口を開けたまま、ただただ押し黙るしかなかった。

麻乃が、束縛されていた。

麻乃が、両手と両脚を紐で縛られていた。

麻乃が、泣きそうな瞳で俺を見ていた。

「麻乃……」と、思わず声が漏れてしまう。

固そうなコンクリートの上に座った麻乃が、俺たちを希望の光で
も見るような目で見てくる。

「よくここがわかったな。あの暗号、解けたのか」

突如聞こえたその声に、俺はようやく、麻乃の近くに男が立って
いるのに気づいた。サングラスをかけたその男は、長身であり、肝

心な目は隠れているものの、おそらくはイケてる顔をしているだろう。髪は俺よりも長いくらいで、茶髪だった。しかも、青年、と呼ぶに値する若さだ。

「あんたか。あの意味不明なメールを送ってきたのは」

俺が男を睨むと、彼は、ゆっくりと俺のもとへと歩み寄ってくる。一步、また一步と彼が歩くごとに、革靴の立てる音が響く。

俺の質問にすら答えずに、無言かつ無表情でこちらに近づいてくる。何とも不気味だ。

その男はきつと、俺の目の前で立ち止まるものだと思っていた。

しかし。

無言を貫き通したままの青年は、俺のすぐ横を通り過ぎていった。

「……えっ？」

頓狂な声を上げてしまう。

なぜなら、彼が立ち止まった先、そこには、春香ちゃんが立っていたからだ。

「会いたかったよ、春香」

そして、サングラスを外したかと思っただけならそんなことを言いやがった。だが、春香ちゃんという、おもむろにポニーテールをほどこいた。そして大きく酸素を肺へと取り込み……

「ふざけんなああああー！」

普段のクールな彼女からは想像できないまでの叫び声を上げ、その男を蹴り飛ばした。まるでCG加工でもしたかのように神速で吹っ飛んでいく姿を、俺たちは冷や汗をダラダラかきながら見届けた。体の震えが止まりません。

蹴られた男は数メートルほど先の固そうな壁に追突。ドンツという鈍い音と、「うつ」という呻き声が聞こえた。

飛び蹴りをしたらしい春香ちゃんの、ポニーテールをほどかれて自由になった茶色い髪がふわりと舞った。

春香ちゃんの強大なる破壊力を前に、口をポカーンと開けたまま身動き一つできない俺たち。

「フッ。またつまらぬものを吹っ飛ばしてしまった」

恐いよ春香ちゃん。口の端をつり上げて笑ってるのがめっさ恐いよ。キヤラ違うよ。ていうか『また』って……過去にも誰かを吹っ飛ばしたのだろうか。恐ろしや。

春香ちゃんは、額に浮かぶ汗をブレザーの袖で拭い、ふうー、と一息ついた。そんな彼女に、俺は恐る恐る尋ねる。

「あの……。川瀬春香ちゃん、だよな？ 別人じゃないよね？」

体だけでなく、声まで震えていた。

「ええ、そうですよ。まったく。先輩ったら、変なこと聞きますね」

「そ、そう。ならいいんだ、うん」

さっきのとてもないやつは、俺の幻覚だったに違いない。そう信じなきゃ俺は、春香ちゃんに対して多大な苦手意識を抱いてしまいうそうだ。

気を紛らわせようと、麻乃の方を見る。おそらくは千里によって手足の紐をほどかれた麻乃は、俺と同じように萎縮していた。千里もそれは同様で、あまりに恐いのか麻乃に抱きついていて。な、なんかもものすごくそるんですけど。

「ねえ、春香？」

春香ちゃんとはクラスメートで彼女をよく知っているはずの穂波でさえ、表情に恐怖の色を浮かべていたが、勇気を振り絞って、といった感じで春香ちゃんの肩を叩く。

「あの人、誰？」

「こ、ここは、俺が自ら、答えようか……」

ふと、砂ぼこりのようなものが舞っている壁の方から声がした。ちゃんと目を開いていた。肩も上がってるし息はしてるらしい。辛うじて、ってな感じだが。

「よかった。生きてたん——」

穂波が安堵の声を洩らしたのも束の間、その声は「きゃあーっ！」

という悲鳴に変わった。その場にいた全員が目を背けてしまうほどの惨状だった。

青年の頭から、血が溢れ出ていたのだ。彼の茶髪の一部に、血の色おほと思しき色が混ざっているように見える。

「……どうも。名乗るのが遅くなりました。もとやまけいすけ 本山敬介です……」

どこの世界のゾンビかと訊きたくなるくらい、見るに堪えないものだった。彼の頭部からとめどなく流れ、地面にポタポタと落ちる、血。グロテスクにもほどがある。

あまりに恐ろしい光景だったので、俺は、制服のズボンのポケットに突っ込んであったハンカチを青年——本山へ手渡す。

「あ……すまない」

そう言っ、彼はそのハンカチを傷口であろう箇所^{箇所}に当てる。せつかくのモチそうな顔が、おそらく血の通り道となったのだろう、台無しになっていた。かわいそうな男だな、この人。

事情はともかく、今は応急処置が優先すべき行動だ。気づけば俺や本山の周りには、春香ちゃん以外の三人の美少女が集まっていた。

残る春香ちゃんという、ドタドタと大袈裟な足音を立てながら倉庫をちやうど出て行ったところだった。けど、俺はそれを止めなかった。春香ちゃんを恐怖対象としたからではない。眼前の男を治療することの方が、春香ちゃんなんかより大事だと思ったから……それもちよつと違う。

俺たちに背を向ける直前の春香ちゃんが、泣きそうな顔になっていたから、俺は彼女を止めなかったんだ。

「だ、大丈夫？」

と穂波が尋ねる。どう見ても大丈夫そうには見えないが。

「ま、まあ、ね。……いやあ……。まさか、こんなことになるなんて……」

本山が未だに状況を把握できていないような面持ちで呟く。そう呟きたいのは俺たちだって同じだ。あの春香ちゃんが突然暴力的な行為に走るだなんて、微塵みじんも思っ
てなかった。

「あのー。本山さんでしたっけ。……えと、本山さんって、春香ちゃんの知り合いなんですか？」

つい数分前の信じがたい出来事のインパクトが強すぎて忘れていたことを、千里が口にする。

「あ、俺？　一応だけど、かつて川瀬春香と付き合ってた人間だよ」

本山のその言葉に、俺たちはあんぐりと口を開いてしまう。

「春香の元カレってこと!？」

穂波が目を見開いたまま、大きな声を出した。

美少女三人に囲まれて居心地が悪いのか、本山は、同性である俺が中腰になっている場所あたりに視線を向けながらうなづく。

「付き合い始めたのがおとしの夏休み頃だったから、俺が三年……中学三年のときで、春香が中学二年だった」

てえことは、単純に考えると本山は今、高校二年で、俺と同年ということになる。

「それじゃあ、先輩と後輩という間柄で交際をなさってたんですか？」

千里が、使い慣れてるらしい敬語で尋ねる。

「まあ、そういうこと。家が近所で、春香が小さい頃は遊び相手になって。幼なじみ、みたいな関係だったんだ。で……まあ、いろいろあって付き合うようになった」

いろいろ、つてのがかなり気になるが、無理には聞き出そうとしない方がいいだろうな。しかし、幼なじみ同士の関係から恋愛の対象へ、か。よくある話だ。

「うらやましいですね。春香ちゃんと幼なじみって」

俺が心からそう言うと、本山は、「でしょ？」と小さく笑った。

さっきまでは彼の頭から勢いよく流れていた血も、今はずいぶんと少なくなっていた。

「昔から全然変わってないよ……と言いたかったけど、今日会ってみて、前よりかなり印象が変わっててびっくりしたなあ。いつから髪染めたんだろ。前までは黒かったんだよ、あいつの髪」

「な——。あれって、染めたやつだったのかっ！」

俺が驚きつつ口走ると、全員から『気づいてなかったんだ、この人』みたいな目で見られた。……あれ？ 春香ちゃんのあの茶髪が地毛だと思ってたの、俺だけ？

「ていうか、そんなことはどうでもいいの！」

と、今までほとんど話さないでいた麻乃が間に割って入った。騒がしいやつだ。

「私はね、あんたの昔話よりも、どうしてあんたがこの容姿端麗な私を拉致したのかを聞きたいのよ。結局教えてくれなかったじゃん」

忘れていた。こいつは誘拐事件の被害者だったんだっけか。春香ちゃんの蹴りによる負傷がために、被害者Ⅱ本山だと思ってたわ、俺。だって本山の方が無傷の麻乃よりもよっぽど被害者っぽいもん。

「ああ、悪い。これから話す」

苦笑いしながら、本山はあぐらをかいてコンクリート上に腰を下ろした。俺たちも各々座ることにした。

「付き合い始めたとき、俺、中学三年で高校入試を控えてたわけ。で、俺さ、サッカーやってて、サッカーで有名な県外の高校に行くつもりだったんだ。俺、サッカー好きだったし、もっとレベルの高いところでやりたかったんだ。両親からも許可下りてたしね。だから、その高校に行くことに決めた。

そのこと、春香には直前まで話さなかった。話すべきだとは思っ

た。でも、話したら、春香は必ず猛反対するだろうって考えたから、言わなかった。春香に反対されたら、俺も、そのときの感情に流されて自分で下した決断を誤ると思ったから」

大人だなんて思った。俺と年が同じだというのに、筋が通った考え方をしている。俺は、そんな先を読んだ考えを通すなんて到底できやしない。そのときの感情に流されてしまうことだって、多々あるに違いない。

「けど、さすがに最後まで黙ってるなんてできなくてさ、ギリギリになって春香に話した。当然、反対された。勝手に決めたことを何回も謝ったよ。もちろん、今まで黙ってたことも謝った。なのに春香は許してくれなくてさ。あいつ、頑固なんだ。いろいろと説教喰らったよ。彼女として。幼なじみとして」

しみりとみんなが耳を傾けている中、麻乃だけは頬を膨らませていた。多分、自分がどうして誘拐じみたことをされたのかについての説明が成されていないからだろう。

「それでも俺は、春香を押し切って自分の意志を貫いた。そして春香とは離れ離れになった。別れたのかすらわからないままね。

それきり、春香からはメールも電話も来なかった。当たり前だな。自分勝手なやり方で離れてったんだからな。俺も春香と連絡取ろうとはしなかったよ。声、聞きたかったけど、春香の声を聞いたら、自分の決断に自身が持てなくなるように思われてさ。

それから一年……いや、それ以上経った昨日、ちょっと嫌なことあってさ。安らぎを求めてってわけでもないんだが、電話しようとしたんだ、春香に。でもあいつのケータイの番号変わってたみたいで。だから、こりゃあ直接会うしかねえかと思って、この街に来た。それで、春香が中学んときから行きたい行きたいって言ってた風

梁学院ってところに侵入して、校内で一番最初にすれ違った生徒が赤い髪の子だったわけ。春香の知り合いらしくて、春香がどこにいるか訊こうとしたら、急に『不審者、不審者です!』とか言って暴れ出してうるさかったから連れてきたんだ、うん」

「なんかテキトーな理由で誘拐されたんだ、私!」

今までのいい話はどこに行ったのだろう。無差別誘拐じゃねえか。てか、やっぱり犯罪者じゃね?

さっきまでは涙を流さんばかりの様子だった千里と穂波も、今は苦笑している。

「迷惑かけて申し訳なかったッス」

テキトーな感じで謝罪した本山の表情は、しかし真剣そのものだった。一つ咳払いして、彼は全員の顔を見回した。

「……どうしても春香に会いたかった。俺、まだ、春香のことが好きなんだ」

第5話 決意

俺は、本山の目を見る。すると、まっすぐな目が、俺を見返してきた。

たった今、春香ちゃんを好きだと言ったのは決して冗談なんかではなかったのだと、その目から十分に伝わってくる。

「春香、まだそう遠くには行ってないよな」

そう言うのと、本山は軽やかに立ち上がった。

「どこ行くんだ？」

俺も立ち上がって尋ねると、彼は、先程春香ちゃんが出て行った方を見ながら、「春香さんそこ捜しに行ってくる」と、小さいながらも、しかし確かな力強さを感じさせる声で言った。そして本山は、倉庫を出て行こうとする。

「ちょっと待て」

俺は、直ちにその背中を呼び止めた。

「何だ？」

本山が怪訝そうに俺を見やる。

このまま本山を行かせてしまったら、彼が春香ちゃんを見つける可能性は高い。春香ちゃんとは幼なじみと言った本山のことだ、彼女の家の場所もわかるに違いない。さして時間を要せずに春香ちゃんを見つけ出すことは確かだろう。

一方の春香ちゃんがこの倉庫を俺たちに何も告げずに去っていったのはどうしてなのか。そんなのは、だいたいは推測できる。

一年以上も会っていなかった自分の幼なじみにして元恋人と突然再会し、さすがの春香ちゃんも気持ちの整理ができなかったんじゃないだろうか。だからあのとき、どうしようもできず、ただ本山を蹴り飛ばすしかなかった。それはそれでどうかと思う選択だが、春香ちゃんの心が揺れていたに相違ない。そんな彼女をその状態のまま本山と会わせるのは決して賢明とは言えない。

だからこそ俺は、一つの考えにたどり着いた。

「ふざけたこと抜かしてんじゃねーよ」

俺の声質の変化に、本山はちよつと驚いたような顔をした。

ふと、麻乃にブレザーの袖を掴まれた。麻乃は、「何言ってるの？ やめなよ」とでも言いたげな目だったが、俺は構わずに本山を見据える。

「さっきあんたから聞いた話、よく考えてみたんだけど。それから察するにあんた、ホントに自分勝手だな」

「……何だと？」

本山が俺を睨む。

「自分の都合で春香ちゃんから離れて、春香ちゃんを悲しませた。その上、自分に嫌なことがあったから、春香ちゃんに会いたいと願った。さっき春香ちゃんと会ったけど逃げられたから、今度は追いかけて行く。そんなやつに春香ちゃんを好きになる権利とかあるわけねえ。そんなやつ、自分勝手以外の何ものでもねえと思うんだが……俺、間違ったこと言ってるか？」

その俺の言葉に対し、本山は何か言いたそうな顔をしていたが、彼より早く、俺は続ける。

「勝手に遠くに行かれて、春香ちゃんはさぞ悲しかっただろう。一晩中泣いたりしたかもしれない。あんたは、間違いなく春香ちゃんを傷つけた。かつこよさげな自分の考えに逃げて、春香ちゃんを置いてけぼりにした。最低なんだよ。」

……どうしてさっき、春香ちゃんはおまえを蹴り飛ばしたかわかるか？ おまえを嫌いになったわけじゃない。殺意とかを抱いたからじゃない。

揺れてたんだろうよ。あんたのこと、忘れよう忘れようって思ってたかなんてわからない。少なくとも、あんたが突然自分の前に現れて、混乱しちゃったんじゃないのか？ そんな春香ちゃんに、無理に会ってどうする気だ？ 春香ちゃんの気持ちは考えてんのか？ てか、考えてないからいきなり現れたんだよな。……そんなことも考えられないなら、もう二度と春香ちゃんの前に顔を見せるな」

本山から片時も目を離さずにまくし立てた俺は、言い終わってすぐ、彼に背を向け、倉庫を出るために歩き出した。

「ねえ、どこ行くの？」

麻乃に声をかけられる。背後から誰かがついて来る気配を感じたが、俺はそちらを振り向くことなく外へと歩んだ。

すっかり真っ暗になってしまった冬空は、晴れているのか星が空一面に広がっていた。どこに目を向けても白く輝く星たちが見える。

俺と、俺の後ろを歩いてきていた三人のメンバーは、倉庫を出てすぐのところで立ち止まって空を見上げていた。

倉庫の前の道路の脇にある、あってもなくなっても大して変わらなような頼りない街灯が、その下で座っている春香ちゃんの背中をかすかながらも照らしていた。後ろ姿を視界に捉えているにもかかわらず、俺たちは、身動きもできず声をかけることもできずに突っ立っているだけだった。

「なんだ、ここにいたんだ」

穂波が呟く。あんまり大きな声ではなかったが、今まで一人で地べたに体育座りしていた春香ちゃんが体ごとこちらを振り向いた。特に驚いた様子もなく、ゆっくりと。

「あ、春香ちゃん。あのさ……」

「私、」

唐突に、春香ちゃんが俺の言葉を遮る。

「自分にとって嫌な出来事になってしまったわけだし、少しでも早く忘れ去りたいと願っていました」

いつもと何ら変わらない、落ち着いた声。おそらくそれは本山と
のことを言っているのだろう。

春香ちゃんは、これまたゆっくりと立ち上がり、俺を熟視する。

「でも、違うんじゃないかって思ったんです。逃げてばかりじゃ、
絶対前には進めないんだって。だから、ちゃんと区切りをつけよう
って」

彼女の声や表情、そして目には、堅固^{けんこ}な決意の色が浮かんでいた。

何を決意したんだろうと俺が考えていると、春香ちゃんはどうい
うわけか倉庫の方へ歩き始めた。中にはまだ本山がいる。

「あいつと、少し話してきます。皆さんは、先に帰っていてくださ
い」

それだけ言い残して、春香ちゃんは倉庫の内部へと消えていった。

第6話 前進

私が倉庫に入ると、中にいた敬介は意外そうな顔をした。

「春香」

久しく聞くことのなかった声が、私の名を呼ぶ。

「春香……」

そして、違う声のトーンでもう一度呼ばれた。

そこで初めて、私は敬介の顔を見る。一年ちよつと会わなかっただけなのに、敬介からは、前と比べて全体的にずいぶんと大人びたようなイメージを受けた。髪型だって変わっているし、身長もさらに伸びたみたいだ。目つきの悪さは相変わらずだけど。

「俺、おまえの男の友達に説教されちゃったよ。『自分勝手』だの、『春香ちゃんの気持ちは考えてんのか』だの言われた」

変わってないなと思う。

「それはお気の毒ですねえ、本山先輩」

「……なんか、春香に丁寧な話し方されると気に障るんだが。てか、先輩とか呼ぶな、腹立つから」

「いや、でも、彼の意見は核心をついていると思いますよ。何せ、昔から本山先輩の唯一無二にして最大の欠点が『自己中心的』であるということでしたからね。ふむ……いつになれば直るんでしょうか。多分一生直らないと思いますが」

「……ムカつくな、こいつ」

敬介が私を軽く睨んでため息をついたところで、私は彼をからかうのをやめた。以前なら、敬介が嫌そうな顔や仕草を見せたっていつまでもふざけるのを続行して、敬介の見せる困った顔に優越感を見いだしていたのだが、今の私はすんなりと黙った。これが私と敬介との間に一年余りの空白の時間があつたことを示している。

「で？」 私は訊くことにした。「今日は何しに来たの？」

そう尋ねると、敬介はすぐに口を開いた。しかし、声を発する前にまた閉ざしてしまう。彼は、少なからず困ったような表情で嘆息して、

「いや……もういいんだ、ホントに。春香がさっきの人たちと仲良くやってるってわかって、それで十分だっと思った。俺は邪魔しない方がいい。別に俺がいなくなたって、春香は楽しく過ごしてるんだもん」

敬介のその言葉に、私は、昔の自分を思い出す。

中学に通っていた頃の私は、とにかく誰かと一緒にいるのが嫌だった。誰かと一緒にできない、そんな子どもみたいな人間ばかりが集まっているような学校が好きになれなかった。私にだ

って、よく話す友人も結構いた。でも私は、彼女らと過ごすより、一人でいる方を遥かに好んでいたように思う。

「何それ。変なの」

本当はそんな理由で来たわけではないことくらい私にだってわかるが、そう言っておいた。

私は、敬介がいなかった期間に、何か変わったのだろうか。昔の孤独な自分から、どこか成長しただろうか。敬介がいなくても強くなれただろうか。

いや、自問するまでもない。私は、変わった。成長した。そして……。

「敬介。私ね、あんたがいない間に、弱くなったよ」

「は？」

私が胸を張ってそう言ったからか、敬介は口を半開きにしながら私を見た。

「ちょっと意味わかんないんだけど。理解不能なことばかりほざく口は健在か？」

苦笑いを向けてくる彼に、私は笑顔を返した。

「私、弱くなったんだ。高校に入ってから、一人じゃ寂しくなって、他の誰かと一緒じゃなきゃダメになったの。今だってそうだよ」

「笑顔で言うことか？ それ」

「え、そうかな」

——弱くなった。

それは、負の意味の言葉ではない。むしろプラスの意味だ。

高校に入学してひと月も経たぬうちに、私は穂波と出会い、麻乃先輩と、千里先輩と、そしてリョウ先輩と出会った。そのことが私のすべてを変えたように思う。

私は、リョウ先輩たちに出会ってから、よく笑えるようになったし、クラスメートの穂波とは常に一緒に行動するようになった。穂波だけではなく、他の生徒たちとも親しくなった。そして放課後になれば、私を楽しませてくれる場所がある。今の私は、誰かと一緒にいる時間を、心から楽しんでいる。

「そう。よかったじゃんか」

敬介は、安堵なのか知れない笑みを称えると、自分の左腕にはめられた腕時計をちらっと見て、「やばっ」と声を洩らした。

「俺さ、明日の朝までには寮に戻らなきゃなんねえんだ。電車の間も近いし、そろそろ行くな」

私が『どうして』と尋ねるとでも思ったのだろうか、敬介はこちらを見て口を開きかけたが、私はそれを遮る。

「どうせ、無断で寮から抜け出して来たりしたんでしょ？ でも、

あんたがいないことに気づく人を最小限にするために、明日の朝の起床時間までに寝室に戻れば、何事もなかったかのようにできると考えた。違う？」

推理じみたことを述べた私に、敬介は小さな拍手をしてよこした。

「さすが春香。何でもお見通しってわけか」

「そんな単純な思考、すべて予想がつくに決まってるよ。それに何より、幼なじみですから」

敬介は、「こういうときばっかだな」と口を尖らせて言い、しばらく互いに笑い合った後、「じゃっ、そろそろ行くわ」と告げた。私に背を向けて脚を動かし始めた敬介を見ていたら、得体の知れない感情が胸に湧き上がってくるのを感じた。

「待って」

自然と、口が動いていた。

「電車で来たんなら、駅まで一緒に行かない？」

第三倉庫から最寄りの駅までの約十分の道のりを、敬介と私は二人並んで歩いた。しかし、私たちの間には一切の会話も存在していなかった。話したいことは限りなく積み上がっているはずなのに、話しかけることができなかった。

そして、何か少しでもいいから話そうと思っっているうちに、駅に到着してしまった。時間の関係もあるのだろう、毎朝通学や通勤をする人たちで少しばかり賑わうはずの小さな駅の構内には、数えられる程度しか人がいない。彼らは皆、長椅子に座って俯き、疲れたような顔をしているように見えた。

黙ったまま、私は、長椅子の空いている所に腰を下ろした。敬介はというと、近くにある販売機から切符を買っていた。彼が鼻をすする音が聞こえる。泣いてる——そんなはずはない。私は今まで、敬介が泣いているのを見たことがないのだ。寒いとしょっちゅう鼻水が出るものだから、きっと今の彼もそうなのだろう。

敬介が切符を手にして戻ってくるのを見計らったように、電車が自身のライトで暗闇を照らしながらやってくるのを、遠くに見た。それはしだいに近づき、照らす範囲を広げていく。周りの利用客がホームへと出て行く中、敬介はいつまでも動かず、座ったままの私のそばにいた。

「……じゃ、またな」

消え入ってしまいそうな声が聞こえた。でも私は、顔を上げないで、「じゃあね。もう来なくていいよ」と小さく返した。ふっと、敬介が笑う。やがて彼はホームに出ていったが、彼を見送ることなく、それどころかそちらに一瞥もやらずに、私は立ち上がる。

今度は、別れを告げることができて、よかった。

電車の音がしだいに大きくなる。そして停車する気配がする。それでも私は、そちらに背を向けたまま、ホームとは反対方向への一

歩目を踏み出した。一歩ずつ、私は離れていく。

小さな駅のくせに、外にはイルミネーションが灯っている。駅を出てすぐの所にある比較的高い木に、たくさんの豆電球のついたコードみたいな線が巻かれており、それがピカピカと光を放っていた。そのため、明るい。遠くから見れば何かの形を呈しているのかもしれないが、その近くにいた私にはそれを確かめる術はない。

電車が走り出す気配がする。そして電車の音がしだいに小さくなる。振り返れば電車の窓越しに敬介が見えるような気がしたが、そうしなかった。

私は、振り返るべきではない。電車を。そして、過去を。

過去を振り返らなければならぬときもあるだろうけれど、私は前だけ向いて歩きたい。大好きだった敬介と離れ離れになってしまっただけでいた私は、リョウ先輩たちと出会ってからそんな誓いを立てた。

この現実としっかり向き合っていきたい。目を逸らしたくなくとも、座り込みたくなろうとも、私は今を歩いていく。歩き疲れて立てなくなっても、そのときには肩を貸してくれる友人たちがいるのだから、彼らの優しさに身を預ければいい。恐れる必要などないんだ。

私は、冷たい夜風を全身に浴びながら、自宅に帰るため、暗い道の上を歩いた。夜空では、雲に隠れたおぼろな月が、今まさに明瞭な姿を現そうとしているところだった。

第7話 幸福

翌朝。通学路を歩く俺の足取りは重かった。足だけならまだしも、頭も重かった。なぜなのかなんて、考えなくともわかっている。春香ちゃんのことだ。

昨日のあの後、春香ちゃんが一体どんな決断を下したのかなんて定かでない。本山とやり直そうと決めたのかもしれないし、それも、一年以上も前のことをやはり許すことができずに、本山を突き放したのかもしれない。

俺にしてみれば後者の方が明らかに望ましいが、春香ちゃんの決意がどちらに傾いたのか、俺にはわからない。

メールを入れてみようかとも思ったのだが、他人の色恋に第三者が首を突っ込むべきではないと考え、やめた。

と、そこに……。

「よーっす」

別に願ったわけでもないのに、街を荒らす怪獣を制止するために現れるヒーローのごとく颯爽と、クラスメートの吉永が俺の横に並んできた。

「相変わらずさえない顔してんなー」

おまえに言われたくない。そう言いたかったが、俺は思うだけで口に出しはしなかった。

「でさでさ、千里ちゃん、元気？」

「ああ」

「可愛い？」

「ああ」

俺が適当に返すと、千里大好き吉永少年は、ニヤニヤと質の悪い笑顔を浮かべた。気持ち悪い。吐き気がする。

「そっかぁー。よかったよかった。千里ちゃんが普通に暮らしてるだけ、ただそれだけで、俺は幸せなんだぜ」

なんとまあ幸せの基準が安直なこと。こいつは毎日幸福なんだな。

もしその単純な頭脳を誰もが持っているとしたならば、脳内がお花畑のような人間ばかりが集まってさぞ和気藹々（わきあいあい）とした世界が形成されているんだろうなとか考えつつ、俺は千里のことばかりを喋りまくっている吉永の話を聞き流して歩き続けた。

結局は、いつか述べたように、幸せってものの基準なんてないわけだ。感じ方次第で、それが幸せとも受け取れれば、逆に不幸せだとも受け取れる。やっぱり人それぞれ。

春香ちゃんにとっての幸福はどっちなんだろう？ 本山との関係

を再建していくのが幸せなのだろうか。あるいは、そうしないことが幸せにあたるのだろうか。

考えれば考えるほどわからなくなってくる。俺は、吉永の相変わらぬアホ面を眺めながら、一人鬱々としていった。

吉永とともに二年D組教室まで歩いていったとき、教室の前の廊下に立っている一つの人影が見えた。スカートを着用したその女子生徒は、廊下の窓越しに中庭を眺めていた。

俺はそれをさして気に止めなかった。どうせ他のクラスの名前も知らないようなやつだと思ってた。だから俺は、その生徒を注意深く観察することなしに、今日の授業はどこをやるんだっけかなんつー、どうでもいい会話を吉永と交わしながら教室に入ろうとしていた。

だから、その生徒に「リョウ先輩」と聞いたことのあるような声をかけられたとき、俺は無意識のうちに「は？」と声を洩らしてしまった。

そんな動揺する俺を知ってか知らずか、吉永はさっさと教室に入ってしまった。あっさり自分の席に着いてしまった。その場に一人取り残される俺。

ため息を一つついて、その少女をじっくり見る。そうしたことによって、俺はそれが春香ちゃんだったことによく気がついた。

「あ、春香ちゃん？」

なぜ疑問形になってしまったのかというと、今日の前にいる春香ちゃんはいつもの彼女と少し違っていたからだ。可愛いのはいつものことだけど、いつもなら後頭部の中央らへんで結ってポニーテールにしているところを、今日の春香ちゃんは、テールを右側に垂らしたサイドポニーにしていた。だいぶ雰囲気が変わったような感じがする。

「おはようございます。なんか待ち伏せみたいな形で申し訳ないですけど、ただ、謝りたくて……」

そう言って、春香ちゃんが頭を下げかけようとしたのを、俺は、「いいっていいって」と遮った。

「謝らなくていいよ。謝らずとも、春香ちゃんなら可愛いから何したって許してあげるよ。体も許してあげるよ」

「あ、そうですか……」

何だか呆れた目で見られてるんだが、なぜだろう。

「あ、いえ、でも、いろいろと迷惑をかけてしまったのは元をたどれば私が原因ですから……」

止める間もなく、春香ちゃんは深々と頭を下げてしまっていた。俺に向けられている、廊下を通りかかる生徒たちの視線が痛い。

「すみませんでした。……そして、ありがとうございました」

それだけ言った彼女は、頭を上げたかと思うと、逃げるように走り去っていった。

——ありがとうございます。

なぜそう言われたのか、よくわからなかった。

「ったく。昨日はとんだ目に合ったわ。結局家に帰ったの八時近くだったのよ。いつもなら六時半には着いてるってのにさ。寝たのなんか日付が変わった二時だったんだからね」

放課後。まだ一年生二人がやって来ていない図書準備室で、麻乃は窓際の自席に座り、自らの肩を叩きながら一人嘆いていた。

俺は、麻乃の斜め向かいの椅子に腰を落ち着かてそれを聞きながら、就寝がそんな時間になったのは自分のせいじゃないのかと心の内で呟いていた。

麻乃の正面の席に座ってる千里も、微笑してはいるが胸中ではそう思っているに違いない。

「あー、超ダルい。リョウくん、肩揉んでくれる？」

麻乃から仰せを授かったので、俺は椅子から立ち上がり、麻乃の背後に回った。そして、言われたように肩を揉む。指先や手のひら、

たまに手の甲を駆使して麻乃の肩をマッサージしているうちに、麻乃は「快樂う」という声を上げた。意外と俺、マッサージのセンスあるかもしれない。

「うまいじゃあーん」

麻乃が喜んでくれるならば、俺はこんな雑用も厭^{いと}わない。

「ああ、いいよお」

なんて幸せなんだ！ 他人の喜びを自分の喜びとして受け取れる。俺は、幸せだ！ ハッピーだ！

「もつとお。もつと強くしてえっ」

うん。ハッピーなんだけど、何だろう、これ。何というかちよつと………いや、何でもない。俺は肩揉みに専念する。

「えへへえ……もうちよつと下あ」

麻乃の口調がおかしなまでに乱れてきたが、俺はどうにか理性を総動員して作業を続ける。

「はいはい、もうちよつと下ね」

指示通り、もつと下の部分に手を動かす。肩甲骨辺りを指先で押すも、「いだだだ……。あ、もうちよい下っ」と次なる指示。

「まったくもー。ワガママな麻乃ちゃんだなっ♪」

さっきからこちらを見ている千里の呆れたような視線を感じつつ、俺は、麻乃の肩甲骨よりもさらに下の部分へと手を移していく。

——と。俺の手が、何だか知れぬものの手ざわりを感じとった。
……何だこれ。出っ張り？　むむ……？　女の子、背中、出っ張り
とくれば……。ままつ、まさかつ！

俺は確信した。おそらくこれは、男にとってのトレジャーだ！
ブラという名の宝だ！

一瞬にしてテンションが最高潮に達した俺は、マッサージなんつー疲れる作業をやめ、手を麻乃の体の前に回していき……。

「ああつ、さいこお………つて、何で胸揉んでんのよ！」

麻乃に思い切り肘を喰らってしまった。あまりの威力に、床にしりもちをついてしまう俺。や、柔らかかったぜ……。

「いつかはこういうことやるだろうと思ってたわ。そりゃあ、リョウくんは肩揉みさせるなんていう自殺行為に及んだ私も悪いけど。でもね……リョウくんがそこまで墮落してるだなんて、リョウくんには失望したよ！」

「え……」

俺はショックのあまり、動けなくなる。

怒りのあまりか、顔を真っ赤にして叫ぶ麻乃の目は、決して俺をマトモに見ることはなかった。一瞬視線が合ったと思ったら、気まぐすそうにすぐに逸らされてしまい、俺は余計にダメージを受けた。

麻乃は途端に、脚をもじもじとさせ始めた。かなり不快に思ったんだろうな……。

「大丈夫ですか？」

俺がこんな情けない状態でも最悪ことをしてしまった後でも、そんなふうに声をかけてくれる人がいる。正直嬉しかった。嬉しさの余りに泣きそうになってきた俺は、ツインテールのエンジェル、千里に目を向ける。

すると、見るからに心配げに俺を覗き込んでいる黒い瞳があった。そして千里は、弾けるくらいの笑顔を浮かべた。

それを合図としたように、ドアが勢いよく開く。

ちわーっ、と軽い挨拶をした穂波と、それとは対照的に、こんにちは、と丁寧な挨拶したサイドポニーバージョンの春香ちゃんが入室してきた。俺は、お世辞にも綺麗とは言えない——むしろ汚い床から立ち上がり、制服のズボンについたホコリを落としたながら、美少女一年生兩名を見る。

うっすらと小麦色に染まった肌の穂波と、白い肌の春香ちゃん。その二つ体を舐め回すように観察していると、春香ちゃんが部屋の隅の椅子に着いたのを見計らったように、麻乃が、「ねえ、春香ちゃん？」と声をかけた。一方の春香ちゃんは、続く言葉を紡がれるより早くに頭を下げた。

「昨日は迷惑をかけてすみませんでした」

今朝、俺が言われたのと同じ言葉。

「別に謝らなくてもいいよ。ほら、頭上げて」

麻乃が慌ててそう言うと、春香ちゃんはややためらった様子で頭を上げる。

「昨日、敬介とは大したことは話してないです。再会したからって特別なことはありませんでしたよ。あ後は、敬介が電車で来たって言っていたから、駅までついて行っただけです」

春香ちゃんはそれだけ言うと、もうすべてを語り尽くしたとばかりに、居住まいを正していつものようにケータイを広げてしまった。

「私も春香に訊いたんですけど、何回訊いてもこんな返答でした」

と穂波が小声で補足説明する。もっと納得のいく答えを望んでいたらしい麻乃は、頬を膨らませ、ぶつぶつと何かを呟きながら実に不満そうな顔をしていた。千里も穂波も似たような表情だった。

本人がこれ以上話す気がないのならば、俺たちからこれ以上深く突っ込む必要はないだろう。てか、深く聞き出そうとしてはいけない。詳細については、春香ちゃんの気が向いたときに話してもらえばいい。そうさ、そうに決まってる。

「じゃっ、明日は休みだし、トランプでもやって一週間の締めくくりとしますか！」

突然にして、麻乃は椅子から勢いよく立ち上がり、そう宣言した。どうやら麻乃は、昨日の件については結果を知ったのでどうでもよくなったみたいだ。単純すぎる。

俺は、ここはランプ研究会か何かと甚だ疑問に思いつつ、すべてのゲームで麻乃が大敗する近未来を予期し、果たしてそれは見事に的中した。

その夜、風呂から上がって自室に戻った俺の耳に、携帯電話の着信音が聞こえてきた。毎日のように送られてくるメルマガかと思っただが、今度の予想は外れることになった。春香ちゃんからのメールだった。

「え、マジで？」

思わず呟いてしまう。春香ちゃんが俺にメールしてくるなんて、他の三人の美少女と比べて極めて珍しかったからだ。

『明日の朝、時間があつたら私と一緒に出かけませんか。十時に学校（風梁学院です）の近くの公園で待ってます』

それはデートの誘いと受け取っても不思議ではないような内容だった。

第8話 恒久

せっかくの休日の朝だというのに、空には雲ばかりが顔を出していた。これから雷雲がやってくるんじゃないかと疑いたくなるくらい薄暗い。その上、かなり寒い。

そんな空の下、俺は公園のベンチに座りながら、待ち人がいつ来るのかと目線をあちこちに向けていた。まだ約束の十時まで三十分以上もある。来なくても不思議ではない。

気づけば俺は、鼻歌を口ずさんでいた。暇だからというのものもあるが、どちらかというとテンションが異常に高いせいだ。これから春香ちゃんとデート。テンションが上がらないはずがない。

この公園にはよく立ち寄る。休日、ゲームに疲れた日とかに目を休めたり気分転換したりするために来ることが多い。学校の近くであると同時に、俺の家からも歩いてさほど時間を要さない場所にあるので、気軽に訪れることができる。

周りには、俺と同じくベンチに腰かけて新聞を広げているおじさんや、若い女の子二人組が雑談しているのが目に入る。平和だなと、つくづく思った。

「にしても……」

この天気、どうにかならないものか。天気予報では、降水確率は

午前午後ともに四十パーセントという中途半端な数字だった。しかし、春香ちゃんを抱きしめるときにはできるだけ手ぶらの方がいいと決断した俺は、傘を持ち合わせていない。一種のギャンブルってやつか。まあ、降ったら降ったで、髪の毛が濡れてよりいっそう色っぽくなった春香ちゃんを拝めるんだ、よしとしよう。

てなことをひたすらに考えていたら、周囲からいい意味で浮き立ったポニーテール少女が公園に入ってきた。かなりの美少女というのは、それなりの雰囲気まじを纏うものなのかもしれない。

春香ちゃんは、俺を見つけると一旦立ち止まって軽く会釈をし、頭を上げるとまた歩き始めた。春香ちゃんの肩に引っかけられている鞆の脇から、彼女が歩くに合わせてクマのキーホルダーらしきものが見え隠れする。

春香ちゃんはドット模様が入っている黒地のプリーツスカートをなまあし穿いていた。そこから伸びているのは生脚ではなく、防寒のためか、黒いストッキングを着用した脚だった。それはそれでエロさがあるし、そそるね。ただ、春香ちゃんが上に着ている灰色のパーカーが地味だったのが気になった。スカートには不釣り合いだし。もっと別なチョイスがあっただろうに。ま、着ている本人が可愛いから構わない。

俺は、ベンチの中央から横の方へと場所を移動し、もう一人が余裕で座れるスペースを空けて彼女を迎えた。

「ごめんなさい。待たせちゃったみたいで。早めに家を出てきたつもりだったんですけど……」

来て早々、春香ちゃんは謝った。

「まったく待ってないよ。んなこと気にしないでいいから。俺が早く来すぎただけ。全然オツケーだよ」

「すみません」

俺は頭を掻きながら、小さくため息をつく。

最近の春香ちゃん、謝ってばかりだな。そんなことを考える。昨日の朝だって俺にだけだが謝ったし、図書準備室に来てからはみんなに頭を下げた。先輩後輩の仲だとはいえ、そこまで謝られても気分はいいもんじゃない。

「春香ちゃんなら何したって許せるからね、俺」

まだ若干の幼さが残る顔に、うっすらと大人っぽい笑みが浮んだ。そして俺の隣に腰を下ろすと、不気味な空を見上げ、ふう、と可愛らしい息を洩らした。それから手を膝について脚をぶらぶらさせ始めた。抱きつきたくなってくるほど可愛い。

俺はてっきり、春香ちゃんは何らかの目的があって俺を呼んだものであり、その内容をいつ告げるのか悩んでいるものだとばかり思っていた。しかし、春香ちゃんはいつまで経っても話を切り出さずにいた。彼女はただ、目の前に立ち並んでいる木々たちを眺めて何かを考えているようだった。

肌を刺すような冷たい風が吹く。顔に痛みを覚えた。

「あー」

寒さのあまりに手を擦り合わせていた俺に、春香ちゃんが控えめな声で話しかけた。ようやく俺に愛の告白をするための心の準備が整ったのかと思い、あえて視線は彼方かなたの風景に固定させたまま、続く言葉を待った。

「映画館、行きませんか？」

否。彼女の言葉は、定番すぎる提案だった。

田舎のこの街にも、一応だが映画館は存在している。俺も小学生だった頃、しばしばその映画館に映画——主にアニメの——を観に行った記憶がある。

めったに自分の希望を述べない春香ちゃんの要望だ。おそらく観たい映画でも放映するんじゃないだろうか。

いつまでもここに居座っていてもじゃあないので、俺は春香ちゃんと並んで公園を退出することにした。

本日上映予定の映画は、俺も読んだことのある人気小説を映画化したやつらしい。どうやら春香ちゃんはこれが観たかったみたいで、迷うことなく二人分のチケットを購入していた。俺の分の代金を出そうと財布を開きかけたら、「私から誘ったんです、これくらい私が二人分払って当然ですよ」と言われた。

最近はめっきり映画なんてものを観なくなった。どうせ一、二年

くらい待ってればテレビで放送されるわけだし、わざわざ金払ってまで観るもんじゃないだろうと考えるようになったからだ。だから映画館に足を運ぶのは数年ぶりだった。

中には結構な人がいた。家族やらカップルやら。俺たちはスクリーンの正面に位置する後ろの方の席を確保した。上映まで時間があるとあってまだ館内は明るく、騒がしい。春香ちゃんは、どこか知らない場所に目をやりながら、

「まだですかね」

待ちきれないとばかりにそう言った——ようには聞こえなかった。気のせいだろうか。平坦気味の声に聞こえた。弾んでいないし、楽しみだといった印象をまったく受けない。湧き上がってくる違和感。

「あと十分ちょっとはあるね」

しかし俺は、ケータイの時刻表示を見て、普通に返す。

そうだ。気のせいだったんだ。そうに決まってる。考え過ぎだろ。普段の春香ちゃんもそんなに自分の感情を表には出さないんだ。気にかけることはない。

そうやって自分に言い聞かせることで、俺は違和感を無理に打ち消した。

やがて映画は始まったわけだが、上映開始から三十分あたりの現在、俺の瞼はすでに限界まで重くなっていた。昨日の夜、春香ちゃんとデートできるからってはいやぎすぎて全然寝つけなかったからかな。

俺はしだいに、睡魔に身を委ゆだねていった。

肩に何かに触れたのを感じた。右側からだ。そちらを横目で見る。リョウ先輩が、私の肩に自分の頭を預けてきたのだ。すやすやと可愛らしい寝息を立てている。眠ってしまったようだ。いや、ひよつとするとこれは演技で、私に接近したいがために先輩はこうやって……。

どうやらそれはなさそうだった。気持ちよさそうなこの寝顔が、決して寝たふりなどではないことを証明している。可愛いなんて思う自分がいた。

彼は気づいているだろうか。私は、今スクリーンに映って動いている映画なんて観たくはないということに。そして、今日この日に先輩を誘ったことに大きな理由なんてないということに。

ただ私は、リョウ先輩に会いたかっただけ。その気持ちに理由などはないけれど、好きなのかなんて自分でもわからないけれど、でも、会いたかった。

敬介ともう一回やり直そうとしなかったのは、今の私にはもっと

大切な人がいるから。一番大切な人は、ためらわずにこの人だと言えると思ったから。

私は、リヨウ先輩を拒絶せずに、彼の頭を自分の肩に受け続けた。

映画が終わり、スタッフロールが流れ出した。お客さんはほとんどが席を立て帰っていく。その頃になってようやく、私は、リヨウ先輩を起こすことにした。ずっと彼の頭が載せられていた肩が凝っていた。

「先輩。起きてください。もう終わりましたよ」

しかし、先輩は起きない。

「むにゃむにゃ……。はるかぁ、好きだよぉ……。……恥ずかしがらないで早く脱げてばぁ」

鈍器を用意してそれを振りかざそうかとも思ったが、やめた。この人を見ていると、心が安らぐ。しばらくこのままにしておいてあげよう。

「……本当に、好きなんだって」

何だろう。バカみたいな夢を見ている彼の寝言なのに、胸が高鳴る。

「好きだよ……………おまえのカラダが。…………じゅるり……………いただきます——」

前言撤回。鈍器ではなく鞆で顔を強打させてあげることにした。

「ぐはっ……………いだだだだ……………」

これにはさすがに起きずにはいられなかったみたいで、顔を痛そうにさすりながら、先輩は目を開けた。

「あ、起きましたか」

「うん。おはよう、春香ちゃん。昨日はいい夜だったね。いつもの淫らな春香ちゃんをありがとう」

まだ半分夢の中らしいので、完全なる覚醒を強要するため、もう一度、彼の顔面めがけて鞆を叩きつけた。

「いてえー！ 何すんだよ！ ……って、あれ？ 俺、寝ちゃったのか？」

どうやら現実に戻ったと見て間違いないだろう。

「ええ。ぐっすりと」

「なんか……………ごめん」

申し訳なさそうに縮こまる先輩に向けて、私は、自分のできる最良の笑顔で、こう言った。

「全然オツケーです」

映画館の次に、私とリョウ先輩は、近くにあった食堂に行き、昼食を取りながら、客入りが悪く暇そうにしていたその店のおじさんとお婆さんと一緒に世間話をした。それから、いつか行った覚えのあるデパートに入ってぶらぶらしたり、試食コーナーで食べすぎて店員さんを困らせた。後者はリョウ先輩の仕業だしわざが、要するに、私たちは今日一日カップルみたいなことをして過ごした。

ウィンドウショッピングにも飽きたところで、どちらからともなくデパートを出た。二時間近く歩き回ったにもかかわらず、結局何も買わなかった。

外に出てまず目に入ったのは、夕日によってオレンジ色に染められた遠くの空だった。もうすでに夕方になっていた。朝方とは打って変わって明るく、綺麗だ。

時間が経つので、こんなに早かったつけ。

「今日は休みなのに、私なんかのために時間を裂いてくれてありがとうございました」

「いいよ。楽しかったし。こっちこそありがとね」

笑顔でそう返されて、ふと、何か言いたいような感情が生じた。こんな気持ち、今まで感じたことはなかった。

「キスとかしてこないの？ やっぱさ、デートの別れ際ってよくやるもんじゃね？」

「しません」

「まったく、冷たいなあ、春香ちゃんは」

「冷たくないです。先輩の考えがおかしなだけだと思います」

「はいはい。わかったよ。じゃあね、また明日……じゃなくてあさって、学校で」

「はい。さようならー」

リョウ先輩は私に背中を向けて歩き始めた。数歩だけ進むと、こちらを振り返って手を振ってきた。私も小さく振り返す。そしてまた、彼は前を向く。徐々に、彼の背中が遠ざかっていく。

そこでようやく、私はなぜこの人を誘ったのかわかった気がした。

人は、大切な人がいると、その人に近づきたいと思う。少しでも長くそばにいたい、と。

私は、ずっとずっと、リョウ先輩のそばにいたい。そんなことを、夕焼け空に強く願った。

第8話 恒久（後書き）

次はエピソードとなります。

第1章 エピローグ（前書き）

春香編のエピローグです。

第1章 エピローグ

休みもあつという間に明けた月曜日の正午過ぎ。学校での大しておもしろくもない午前の授業を四つ受け終わり、早くも心身ともに疲れを感じていた私は、購買でパンを買った帰りにリョウ先輩に会った。

私と対峙するリョウ先輩は、満面の笑顔だった。私も図書準備室以外でリョウ先輩に会えてとても嬉しかったので、意識せずとも微笑むことができた。

「あれ、春香ちゃん、一人？ 穂波は？」

「穂波……ですか？ 穂波でしたら、教室でお弁当食べてますよ。あの子、いつも弁当なんで」

クラスメートに遊ばれながら昼食を取っているとは決して言わなかった。まあ、間違ったことは言っていないはずだ。

「そっか。じゃあ、放課後図書準備室でまた会おうね」

「はいっ」

放課後が楽しみなのは、リョウ先輩だけじゃない。

私が髪を染めたのは、中学三年に進級してからだった。敬介との別れを未だに受け入れることができずにいた私は、とても荒れていた。幸せそうに笑っている連中に溢れた中学校に嫌悪感を抱いていた。髪を茶色くした以外にもピアスやら化粧やらをして、教師を困らせていた。煙草を吸ったりしたことも幾度かあった。

一方で、そのようなことをしていた自分がよくわからなかったし、よくわからなかったからこそ、自分が嫌いだった。そのときの私は、心の寄りどころがなかった。だからその頃の私は本当の自分を見失っていたのだと思う。

でも、今の私には、リョウ先輩たちがいる。毎日私を安らがせてくれる人たちが、確かにいる。

連綿と続いていく時間の中で、周りの環境などといったものは移りゆく。そこには不変なものなんて存在していない。出会いがあれば、必ず別れもある。喜びを感じることもあれば、悲しいことである。そして、それらすべてを経ない限り、私たちはやはり、前には進めない。

出会った人とは必ず別れなくてはならない。そうわかっているはずなのに、人は、誰かと出会い、親しくなり、惹かれあう。知らず知らずのうちに、離愁^{りしゅう}を味わう覚悟を決めながら、出会う。

私は、敬介のことをさほど大切だとは思っていなかった。いつだって近くにいろし、嫌でも毎日顔を合わせるんだからと軽んじていた。しかし、敬介と離れ離れになって初めて、私は彼の大切さに気が

づいた。自分の愚かさに、今ならはつきりと気づける。

私は、今一番そばにいる人たちを、これ以上なくらい大切にしていこうと思う。リョウ先輩、赤井先輩、片岡先輩、穂波の四人とは、いつか別れる日が来ても、笑って別れたいから。涙なんて流したくないから。だからそれまでに、両手では抱えきれないほどの思い出を彼らと築いていきたい。

リョウ先輩たちに出会えたこと。それは、一期一会なのだから。

第1章 エピローグ（後書き）

次は穂波編になります。その前に番外編が入るかもしれません。

第2章 プロローグ（前書き）

穂波編のプロローグです。

第2章 プロローグ

「穂波。いきなりで悪いんだけど、あんたのこと、好きで好きでしようがないんだ」

春香が、購買に行くという理由で教室から出ていった昼休み、私は突然の告白を受けた。

「な、何言ってるの？ そんなこと言われても困るってば」

他にも多くの生徒たちがいる教室内でそんなことを言われても困るという話だし、——しかもそれが同性である女子生徒からの告白ならばなおさらだ。

「穂波のことを考えるだけで、私、毎晩ムラムラしてくるの」

くつつけられた四つの机のうち、私のはす向かいの席に座って弁当を食べていた女子生徒——高岸莉子たかぎしりこが、ゲホゲホとむせた。そして、苦しそうに身体を揺らしながら胸の辺りを叩き始めた。黒と茶色がミックスした長髪もそれに合わせて揺れる。

「ちよちよっ、ちよっすずねと鈴音。本当に何言ってるの？ いつも以上にヤバイよ?。」

高校生には見えない幼い顔に薄く化粧を施している莉子が言う、
鈴音と呼ばれた少女——駒木鈴音は、口の端をつり上げて笑う。

「ごめんね。莉子には興味がないの、私」

私の隣の机に弁当を広げている鈴音は、男と見間違えてしまうくらいに短い黒髪を撫でながら、視線を私に移してきた。かなりイヤラシイその目つきで、椅子に座って卵焼きを咀嚼そしゃくしている私の頭のとっぺんからつま先までを舐め回すように見て、最後は私の顔で止まった。

「……そそるわ」

今度は私がむせた。お茶の入ったペットボトルのキャップを開け、中の液体を流し込む。完全に卵焼きを飲み込んでから、私は叫んだ。

「そ、そそらなくていいよ！」

昼間から変な発言をした張本人は、私の叫びなど耳に入っていないようで、完全に自分の世界に旅立って何かを呟いていた。「裸」やら「束縛」やらの単語が聞こえたのは空耳だと信じたい。

そんなふうに鈴音が怪しげな呟きを発していると、教室のドアが開いて春香が入ってきた。私と莉子が困った表情をしていることから察したのか、むっとした顔になってこちらに歩いてくる。

春香は、私の向かい側の席に腰を下ろすと、私と違って結構な膨らみを見せている胸の前で腕を組み、鈴音を睨みつける。

「あんた、穂波に何した？」

キツイ言い方だった。並々ならぬ威圧感を含んでいた。

「別に。私はただ、穂波とコミュニケーションを取っていただけよ」

何をそんなにムキになってんの、と言わんばかりに平然と弁当をつつく鈴音だったが、「どうせ変なことを話してたんでしょ」という春香の声に、箸を持つ手を止めてその佳麗かれいな顔を上げ、春香を睨み返した。

「うるさいわね。……まあ、挑発的な女ほど、ベッドの上では乱れるものよね」

「はあ？ 何言ってるのこのバカ。てか、何で勝手に机くつつけるのよ？」

「可愛い可愛い穂波を鑑賞するために決まってるんじゃないの。あんと莉子は、可愛いのは可愛いんだけど、何かが足りないのよね、私を惚れさせる何かが」

「そっかー、あーあ残念だなあー」と春香が恐いくらいの無表情のまま棒読みで言う。莉子はただただ苦笑していた。

「前から何回も言ってるけどさ、どっか行ってくれない？ あんたがいると穂波が汚れていくから。もともとは私と莉子と穂波で食べたの。なのになにからかあんたが邪魔してきた」

「私はね、穂波の近くにいないと禁断症状が出てしまうの。だから致し方ないことなのよ。だから毎晩毎晩、真っ赤な顔した穂波の写真を鑑賞してからじゃないと寝れなくて……」

「ふざけるのもいい加減にしろよ、鈴音。禁断症状？ あんたなんか過度の禁断症状で死んじゃいなよ。あんたのせいで穂波は確実におかしい方向に進んでるわけ。今すぐ穂波から離れて」

「聞き捨てならないわね。穂波は確実に理想的な方向に進んでるわ」

「それはあんたの理想でしょ！」

「そこまで嫉妬するなら春香と遊んであげてもいいけど？ あんた、やっぱり淫乱そうよね、その茶髪とか容姿とかからして」

「根拠もなくほざくな！」

「ふん、私にはわかるのよ。たとえば——」

……この二人は相変わらず犬猿の仲なんだなと思った。

未だに続いている春香と鈴音の言い合いを聞くのを放棄した私は、同じく呆れた様子の莉子と目を合わせる。そして、彼女と同時に大きなため息を洩らし、再び弁当を食べ始めた。

第9話 それはすべてを照らす笑顔

光陰こういんの流れは、めくるめく心地がするほどに早い。新年明けましておめでとうございます、なんて言ってたかと思ったら、今年も残すところ三週間を切っていた。一日が二十四時間あるっていう常識的事実が若干疑わしくなり、「時間が経つのはあっという間だ」などという使い古された言葉を用いずにはいられない。

師走しわすの半ばにさしかかったところで、この東北の地には今シーズン初の降雪があった。本格的な冬の到来を実感する。昨日の夜から降り出した雪は、道路にちよつとばかり積もっており、それに影響されてか、道を走る自動車のスピードがやや落ちていたような気がした。

「雪、ついに降ってきちゃったね」

放課後。いつもの図書準備室にて、部屋の片隅のストープに手をかざしながらしみじみと言う。

「ですね。今日の夜から明日にかけて、大雪が降るみたいなんです、もっと積もりますよ。気温もマイナスになるみたいです」

千里が正しい姿勢で着席しながら返事をよこしてくれた。それが普段の表情なのかと言いたくなるくらい純粹な笑顔を浮かべて。千里の笑顔を見ると、心が透き通っていくのを感じるね。

今日はまだ一年生の二人が来ていない。千里と麻乃、それで俺の三人だけ。

相も変わらず笑顔をたたえている千里とは対照的に、麻乃はとうと、自分の家から持ってきたらしい黄色の毛布を足かけにしながら椅子に座り、長机に突っ伏していた。寒いなら、千里みたいにストッキング穿きやいいだろ。そんなことを言ってみたのだが、「別に寒くない」と言いやがった。そして顔だけ上げて頬を膨らませる。

「私は冬が大っ嫌いな。失望してるのよ、冬に。雪は冷たいし、髪とか濡らすし。しかも今朝なんて道路凍っててさ、三回も転んで、痛かったし恥ずかしかったし」

「最後のはおまえの不注意だろ」

麻乃に対してそう言い返しながら、俺は、麻乃が路上で転倒する風景を想像した。校則など関係なしとばかりに、下着が見えるか見えないかぐらいスカートを短くしている麻乃が転ぶ。そうすりゃおそらくパンツが見えるわけで、それを周りを通りかかった連中に見せまいと頬を赤らませながら隠す麻乃。実に可愛いじゃないか。

「麻乃。やっぱり今後も不注意なまま転びまくっていいからな。冬靴なんて履かなくていいぞ。いやー、冬はサイコーだな、うん」

「……………」

呆れた視線が突き刺さる。しかし俺は、それに気づいていないように装った。

ってな具合で俺にとって不都合な空気が俺自身のせいで形成され

たのだが、それを計ったかのように、

「遅くなりました、すみません」

そんな声とともにドアが開かれ、一年生コンビが顔を見せた。よかった。これで若干空気は変わりそうだ。

そう思いながら、二人を観察しようかなとか考えていた俺は、春香ちゃんに支えられている穂波の異変に気づいた。

「おい、穂波、大丈夫か？」

訊くまでもなく、穂波が大丈夫ではないということは分明にわかった。頬は紅潮していて、こんなに寒い冬だというのに、額には汗ひたひたがうっすらと浮かんでいた。加えて、唇を薄く開いて口を通して呼吸しているようで、ストーブの音に紛れてその音が聞こえてくる。いつも爽やかなはずの表情が、今日は非常に苦しそうだった。

「大丈夫……です」

やっとのことで穂波が答えた。少しも大丈夫とは思えない。

「穂波、見ての通り熱がひどくて……。早退するように言っても聞く耳を持たなかったんです」

春香ちゃんが小さな声で報告した。春香ちゃんを含めた俺たち四人は、心配になって穂波に目を向ける。

しかし穂波は、それらの視線を感じてか、春香ちゃんに掴まれていた腕を振り払って歩き出した。俺の席の向かい側に置かれた椅子

に向かっているのだろうが、彼女は疑いようもなくふらついていた。しかも、歩む足に力を感じない。

「無理しなくていいからね、ホント。かなり危なそうじゃん。インフルエンザじゃない？」

突っ伏すのをやめて麻乃が言うも、穂波はまたもやそれを否定する。

「だーかーらあ。私はぜんっぜん平気なんです。この程度で私がダウンするとしても――」

と、そこまで穂波が言いかけたところで、彼女は話すのをやめた。なぜなら、千里が穂波の右手を握っていたからだ。

「千里先輩、痛いです……」

痛みのせいなのか、穂波は顔をしかめた。しかし千里は、そんな穂波の顔を怒ったような形相（それでも大して恐くないが）で睨みつけ、なおその手を握り続ける。

「痛い、離して」

穂波は、右腕ごとぶんと揺らして千里の小さな手から逃れようとするが、千里の力は意外にも強かったようで、なかなか離れない。

「早く帰りなさい」

千里にしては鋭い目と声だった。だだをこねて止まない子どもに

対する保護者の接し方みたいに感じた。

しかし、よほどここにいたらしく、穂波はなかなか答えようとはしなかった。が、かといって答えなければいつまでも千里からは解放されないと察したのか、穂波は、口を尖らせて渋々といった感じで、

「……わかりました。帰ればいいんでしょ、帰れば」

大げさなため息をついた。

「ふふ、よろしい」

途端、千里が満面の笑みを浮かべた。それはすべてのものを明るく照らすかのごとき笑顔だった。

「……でさあ。これ……おかしくね？」

数分後、俺は、雪のちらつく冬空の下を歩いていた。背中に確かな重みを感じながら。

「おかしくはないですよ」

俺に背負われている本人ではなく、俺のすぐ横についてきている春香ちゃんが答えた。

「さっき言った通り、穂波の家には誰もいないんです。それに、この状態じゃ、穂波は自力で歩けそうにもないと思いますし……。だからリョウ先輩に来てもらったんですよ」

「そりゃわかってるけど……」

「私、人間に性別があるのって、男女が互いに助け合うためでもあるんじゃないかなって思うんです」

「そう？」

「だって、男の人の方が体つきに関して言えばがちりしてるじゃないですか。運動神経だって男性は女性よりも長けてます。やっぱり、力仕事は男の人が向いてますよね」

「まあね」

「なので、男性の魅力を生かすために穂波を背負ってるんですよ、先輩は」

「あーそー」

何じゃそりゃ。……まあ、確かに女性陣に穂波をおんぶさせるのもアレだしな。よしとしよう。

俺は、嘆息した後には首だけ回して背中の方を見る。左肩に顔がのっかっている。それは一学年におけるトップクラスの美少女、佐伯穂波の寝顔であったが、彼女はとても苦しげに眠っていた。わずかに開いた口から、時折喘ぎ声が洩れる。歩を進めるたび、背中に柔らかな感触がある。その声と感触の両方を、俺は味わっていた。…

…最高っ！

「……ついてきてよかった」

春香ちゃんが呟くのが聞こえた。いつの間にやら、自分の頬が緩んでいるのに気づき、俺は、我ながらわざとらしく咳払いをし、真面目に歩くことにした。

今頃、麻乃と千里はトランプでもしているに違いない。冬嫌いの麻乃はしばらくは図書準備室で暖まっていたと言って残り、千里はそんな麻乃を一人にしておきたくないからと言って残った。にしても、あの部屋に女二人きりでトランプ。虚しいよな、やっぱ。

最近日は日が暮れるのがめっきり早くなった。今だって、まだ五時にすらなっていないのに薄暗い。灰色の空から降りてきた雪片せつぺんが顔に当たる。冷たい。加えて、めちゃ寒い。何せ俺は、ブレザーを脱いでいるのだ。それは背中に載っている穂波が羽織ってて、したがって、今の俺の上着はワイシャツ。寒いっただらないが、穂波の病状を悪化させるよかマシだ。

しばらく歩くと、T字路突き当たった。そこをを左に折れるとすぐ、見覚えのある家が見えた。数ヶ月前にも訪れた、穂波の家だった。

第10話 それは冷ややかな風

「ふう」

佐伯家にお邪魔した俺は、今まで背負っていた穂波をリビングのソファの上に横たえ、一息つく。ようやく穂波を横にしてあげることができてほっとした一方で、穂波を手放して寂しいような気がする。

俺はただ、穂波がインフルじゃなければいいと願っていた。

医者インフルエンザだと診断された場合、長くて一週間は出席停止になってしまう。その間、穂波は学校には来ないわけで、そうになると、図書準備室で穂波に会うことができなくなる。一日の俺の楽しみを形成する要素が四分の一だけ削られてしまうことになる。それはちよつとどころではなく困る。

未だに息を荒げている穂波を、俺は何をするでもなく見つめていた。別にイヤラシイ目で見てるわけじゃないぜ。そこらのエロい男と一緒にしてほしくないね。俺は理性に溢れた男であるからして、まさか俺が穂波に手を出したりなんてするはず……、

「……何してんですか」

俺の背中に突き刺さる、氷のように冷たい声。

「何って、見ての通り何も……」

と、そこまで言いかけて、自分の手が今まさにスカートから伸びる穂波の脚に触れようとしていることに気づく。俺はすばやく手を引っ込める。無意識下でこんなことをするほど、俺は性欲が溜まっているのだろうか。

「か、勘違いしないでよねっ！ 別に変な考えがあつてのことじゃないからねっ！」

「……はいはい」

ツンデレ気味に否定してごまかそうとしたが、余計に冷めた目が向けられる。さらには「ちよつと穂波から離れてもらえませんか？」と言われる始末。そんなに危険人物かな、俺。

見れば、春香ちゃんの両手がふさがっていた。氷枕とタオルを持ってきたようだ。どうやらこれらのものを穂波に与えるらしく、春香ちゃんは穂波の傍らに座り込み、

「穂波、大丈夫？ 明日は学校休んで、医者に連れてってもらいなよ」

と眠っている穂波に声をかけると、春香ちゃんは、氷枕をショートカットの頭の下に敷いてやり、濡れているであろう白いタオルを穂波のおでこに載せた。とても慣れた手つきに見えた。

穂波によれば、穂波の両親は年末とあつてか忙しいようで、帰りは遅くなるらしい。両者とも、どうしても早めに帰ってくることはできないとのこと。仕事が忙しいのはわかる。でも、娘がこんな状

態なんだから無理にでも早く帰ってくるようにしてほしいのだが。心配じゃないのだろうか。

「今日は私、ここに泊まりますね。穂波を一人になんてできないんで」

そう言った春香ちゃんの声と背中中は、ひどく寂しかった。

俺は、小さくため息をつき、何もすることがないので辺りを見渡す。

相変わらず、最低限しか物がない。この間この居間に来たときと違うことといったら、電気ストーブとこたつが出されていることくらいだった。片づいているけど、寂しいな。俺の部屋の方が賑わってていいや。

散らかりまくってる自分の部屋の掃除を怠ってもいいかもなと考える始めていた頃、「先輩は」と春香ちゃんの声が聞こえた。瞳を閉じている穂波を見下ろしたまま、彼女はしばらく何も話さなかった。

壁にかかったどこにでもあるような丸い時計が軽快なメロディーを奏で、その後にボーンという音が六回だけ鳴り響く。

「最近の穂波、変に見えませんか？」

長すぎるくらいの間を置いて春香ちゃんが尋ねてきたが、いきなり何を言うんだと思った。最近の穂波が変だなんて一秒も考えたことない。

「全然。そうは見えないけど？」

「そう、ですよ。あ、すみません。気にしないでください。忘れてもらって結構ですから。大したことじゃないんです」

言った後、春香ちゃんは落ち着きを失ったようにもぞもぞと動いた。その慌て具合からして大したことじゃないわけないだろ。なので、俺は尋ねた。

「何かあった？」

「え？」

俺を振り返ってまで動揺を露わにした。どうやって俺の気を逸らそうかと考えたが、結局、今更隠そうが無駄だと思い至ったらしく、春香ちゃんは再び穂波に目を遣ると、そのまま話し始めた。

「ここ最近、穂波が私と帰ってくれないんです。今まではほぼ毎日一緒に帰ってたんですけど、今月に入ってからかな、一緒に帰ろうって誘っても決まって『先帰ってて』って。誰かを待ってるみたいなんです。もしかして先輩と一緒に帰ってる……わけないですよ」

おいコラ。なんで決めつけるんだよ。……まあ、実際そうなんだけどさ。下校は大抵一人なんだけどさ。闇の中石ころ蹴りながら帰路をたどってるんだけどさ。

「もしかして私、穂波に嫌われてるのかな……」

不安そうに春香ちゃんが呟く。

「そんなことないよ」と俺は即座に否定した。

「だ、だといいですけど」

「そうだよ、きっと」

人間は、他人から嫌われることを嫌う。他人を嫌うことは多々あるくせに、自分が嫌われることを恐れる。だから人は、自分を偽ったり、あるいは嘘をついたりしてまで好かれたがる。

そんなことを脳内で考えていたら、ぐうぐう、という、あまりに定番の音が聞こえてきた。俺の腹の音ではない。とすると……。

俺が春香ちゃんへ視線を転ずると、彼女は頬をかつてないくらい赤く染めて、

「な、なに。穂波ったら、こんな状況で、おなか空いたみたいです。ね。私、えっと、おかゆとかいろんな作りますんで、二人ともちょっと待っててくださいね。も、もうっ、熱もある上に食欲もあるんだなあ、穂波は」

「……………」

うまくごまかせたみたいにはっと息をつく可愛い春香ちゃんだっただが、むしろそれが逆効果。春香ちゃんの腹が鳴ったことは、疑いようもない事実だった。

春香ちゃん、すさまじく可愛かった。

……ちなみに、春香ちゃんの作った料理の味がとんでもなく微妙だったことも書き添えておく。

翌朝、自室で目が覚めて。まず最初に、強く窓を叩きつける風の音が聞こえた。実に寒そうな朝だった。布団の中でも震えるくらいだから、初雪が降った昨日よりも冷え込んでいるかもしれない。

枕もとの時計を寝ぼけた目で覗き込むと、もうすでに七時を回っていた。俺は、しばらく布団にもぐったままぐにやぐにやした挙げ句、仕方なしに起きることにした。麻乃たちに会えると考えたからその踏ん切りがついたものの、今日は穂波が学校に来ない。熱があり、親と共に医者に診てもらおうからだ。寂しい。

穂波がインフルエンザではなくてただの風邪で、明日には学校に行けますよ、みたいなメールが来たらどんなに嬉しいだろう。

階下に向かう階段を下りながらそんなことを考え、洗面所で顔を洗いながら穂波の顔を思い出し、制服に着替えながら幾度となくため息をついた。

制服に着替えた俺は、朝飯を食べずに外を出た。穂波が心配で仕方ない俺は、極めてのろのろと通学路を歩く。

首に巻いた、部屋のタンスから引っ張り出してきたマフラーに顎をうずめる。

雪がわずかではあるが降っていた。それらの白い粒は、風の影響で横殴りに降っていて冷たい。というより痛い。風は相変わらず強

く、俺の顔にぶつかっては碎けていった。

教室に入った瞬間、生き返るような感じがした。室内は外とは比べものにならないくらい暖かさがあったからだ。ストーブという暖房器具を考えついた人に感謝したい。

「リョウくん、おはよー」

マフラーを解きつつ席に着こうとしていたところ、麻乃が俺の席まで近づいてきた。

先日、席替えをした。俺と麻乃はまさに正反対の位置になった。俺が窓際の列の一番後ろの席で、麻乃は廊下側の列の一番前の席。席替えする前までは至近距離にいただけに、ここまで離れるとかなり悲しい。ちなみに吉永は教卓の真ん前の席を獲得した。いいザマだね。

「おはよ、麻乃」

最近、麻乃が遅刻しなくなった。前までは一週間に複数回は遅刻し、遅刻しないときでも遅刻寸前くらいの時間に来ていたのに、近頃は俺より早い時間に教室に来ていることが多い。しかも麻乃はこのところ、ホームルーム前にはほぼ毎日のように俺の席のもとへとやって来る。単に俺の席の近くにあるストーブが恋しいだけなのかもしれない。あるいは俺が恋しいのかもしれない。

「穂波、どうだった？」と麻乃。

「いいとは言えない状態だったけど、徐々によくなってると思うよ。昨日は春香ちゃんが穂波の家に泊まって看病してくれたみたいだから」

「あ、そうなんだ」

そのような相づちをよこした麻乃は、安堵の表情を浮かべたかと思ったら、齒をガチガチと震えさせ、両手をブレザーのポケットの中に入れて、

「うう、寒い。私の席さあ、寒いつたらないんだよ？ 誰かが入ってくるたびに廊下の冷気が私を襲うの。一種の拷問だね。……つたく。前のドアを開かずの扉にしようかな」

と前方のドアを憎らしげに見やって麻乃は言う。冗談だと信じたかったが、麻乃のことだ、実行に移しそうで恐い。

麻乃は、ストーブの上に腰掛けた。しばらく話しかけてこなかったので怪訝に思い、彼女に目を向けると、麻乃は、脚をぶらぶらさせながらどこか知れない宙の一点をぼんやりと見ていた。

「ここにいと、あったかいな」

麻乃がそう呟いた。嬉しそうに笑っているのは、ストーブから発せられる暖かな風に触れられたからか。

「ストーブを生み出した人を崇めるんだな^{あが}」

彼女は、「それもあるけどね」と小さく言い、なぜか俺を見つめてにこにここと笑む。俺はしばらく、そんな麻乃から目を逸らすことができなかった。

放課後。いつもならばスキップせんばかりのルンルン気分で図書準備室へと向かう俺だが、今日ばかりは例外だった。足取り重く廊下を歩いている。なぜなら、今日は美少女四人のうち誰一人として図書準備室に来ないと確定しているからだ。

穂波は言うまでもないが、春香ちゃんは昨日に引き続き穂波の看病をするからって帰ってしまった。優しい子だ。ご苦労様である。麻乃と千里は、二人で今日発売のとあるアーティストのアルバムをかうためにと帰ってしまった。こちらは遺憾に思う。けしからん二人である。俺と図書準備室での放課後のひとときを過ごしたくないのか、まったく。

そんなわけで今日は俺一人。別に図書準備室に行く必要性はないのだが、どうしても準備室に向かっていいのかというと、麻乃から使命を授かっているからだ。

「昨日さ、図書準備室に筆箱忘れてきたみたいだから、放課後になったら取りに行ってくる？　で、明日の朝にそれをちょうだいね」

と、ホームルーム前のあのにこにこ笑顔の後に言われた。まったく、自分で取りに行けっつての。

麻乃に対する不満をぶつぶつ呟きながら歩いていたら、早くも図書準備室の前まで来ていた。この部屋の鍵を片手にしていた俺は、慣れた手つきで鍵を開けようと――

「リョウ先輩」

――したら、背後で名前を呼ばれた。

振り返って見ると、いつだったか話をした覚えのある、高岸莉子ちゃんがそこに立っていた。

第11話 それは極度の沈黙

「久しぶりですね、リョウ先輩」と眼前の少女は話しかけてきた。

「確か、莉子ちゃん、だったよね」

可愛い女の子の顔と名前ならば永久的に覚えていられる自信がある俺がそう言っていると、彼女は、

「名前を覚えていてくれたなんて、あたし、嬉しいです」

と実に嬉しそうに微笑んだ。そして何やらを呟きだす。見間違いかもしれんが、なぜか莉子ちゃんは頬を赤らめていた。それから彼女は、しきりに、甘あーい目で俺を見たり魅惑的な笑みを浮かべたりした。可愛いじゃねえか。

「……で、ここで待ってたからには何か用があるんだよね。何？
話はずでしよっか」

莉子ちゃんはその声に我に返ったのか、可愛らしくこほんと咳払いした。「わかりました」

告白かもしれないと意味もなく予期しつつ、落ち着き払った挙動を作り出して図書準備室の鍵を開けた。白い引き戸を開けると、俺より早くに莉子ちゃんの小さな身体はその隙間から室内に入っていた。

「初めてです、この部屋に入ったの」

その言葉に対して適当な相槌を打ちながら戸を閉める。彼女は部屋の中をぐるりと見渡し、部屋の奥にあるストーブのスイッチをつけると、やがてドアに最近の椅子に腰を下ろした。本来なら千里が座っている席だ。

あの四人以外の人間がここにいることに對し、俺は一抹の違和感を覚えていた。

何気なくテーブルを見やると、そこには白い筆箱が置かれていた。チャックのところにイヌだかネコだかクマだか見分けがつかない小さなぬいぐるみがついていた。その筆箱を手に取り、明日麻乃に持つてやってやらないとな、なんて考えていたら、莉子ちゃんが座りながら椅子ごと振り返り、上目遣いで俺を見、こう言った。

「担任から知らされたんですが、穂波はインフルじゃなくて、ただの風邪だったっばいですよ」

安堵のために頬が大層弛緩していくのが自分でもわかった。穂波がインフルエンザじゃないとなれば、もう数日も経てば登校して来れる。元気な穂波に会える。

「ホント？　よかったー」

俺は手放しで喜んだ。

「まだ熱は高いらしいんですけど、じきに平熱まで下がるだろうってという話です」

そんな俺とは対照的に、莉子ちゃんは心なしか不機嫌そうだった。堅い表情がそれを物語っている。機嫌を損なう要素がどこにあったのだろうか。

疑問に思い、莉子ちゃんの幼い顔を見ると、彼女は目を細めてうつとりとした目つきで俺を見てきた。……な、何なんだ、この子は。

このまま莉子ちゃんを見続けようもんなら、こちらの気が変になりそうに思われたので、俺は彼女から目を逸らした。

「さて、余談はここまでにしといて、本論を話すしますか」

じゃあ今までののは何だったのだろうか。その本論ってのがやはり告白なのか？

俺は大きく深呼吸していつもの席に座る。莉子ちゃんは椅子の向きを戻した。

「穂波、最近一馬と付き合い始めたらしいです」

俺の予想に反し、ニコニコ顔でそうおっしゃった。ストーブがようやく暖かな風を放出し始めた。

「穂波が……何だって？」

耳を疑った。麻乃の筆箱が手から長机へと滑り落ちる。

「だからあ、穂波と一馬、付き合ってるみたいなんです。いつからだったかはわかんないですけど、二人して帰ってるところを何回も

目撃しました、あたし。あたしだけじゃなくて、クラスの子たちもそれを見たって言ってました」

俺は、しばらくの間、黙せずにはいらなかった。莉子ちゃんの言った、一馬——須堂一馬という男の顔が浮かばなかったからではもちろんない。浮かぶ。穂波がその須堂一馬と付き合っているという事実が信じられない。信じたくない。

「……どうして」と、思っていたことが口に出た。「なんで？ なぜに？ どういう理由で？」と何度も換言して同じ質問をした。

「だってあの二人、お似合いじゃないですか。だから、付き合ったとしたって何ら不思議じゃないです。それに……あたしにとっては好都合？ みたいなの？」

「え……」

どうして。

どうしてだよ。

嘘だと信じたかった。穂波が須堂と付き合うなんて、信じたくない。どなかった。でも、昨日、春香ちゃんからも同じような話を聞いたのを思い出し、嘘に思えなくなってきた。

その後、莉子ちゃんは何かを話しているようだったが、俺は聞く耳を一切持たなかった。

下校時刻が近づいた頃になって、莉子ちゃんは先に帰っていった。去り際の彼女は満面の笑みを浮かべていたのか、それとも俺に対する同情を顔に出していたのか、俺はそんなことを観察する精神的余裕さえ欠いていた。

椅子から立ち上がり、図書準備室を出る。廊下の窓から外を眺めると、暗闇の中に浮かび上がる雪の白さがあった。朝はさほど降っていないかった雪だが、今では数多くの白い粒が舞い落ちていた。地面に対してほぼ垂直に降っているところを見ると、風はほとんど吹いていないようだ。

図書準備室に鍵を掛け、廊下を歩き出そうとしたとき、図書室のドアがキーン、と高く小さい音を立てて開いた。何気なくそちらに目を転ずる。図書室から、須堂一馬が出てきたところだった。

「あ」

声を洩らし、久しく会っていなかったイケメン少年は、その場で立ち止まった。

「よっ」と軽く手を上げてみせる。そしてどちらともなく、近くにある長椅子に二人して腰を下ろした。

「久しぶりですね」

そんなありきたりな挨拶に付き合ってる場合じゃなかった。俺は考える。どうやって切り出せばいいだろうか。

考えても無駄だった。俺は、深く考えて動くような人間じゃない。だから、単刀直入に尋ねた。

「……噂で聞いたんだが、おまえ、穂波と付き合い始めたらしいな」

「えっ？　そ、そんなこと……」

いきなりそんなことを問われて、須堂は狼狽ろうばいしたようで、しばらくの間、驚きを含有了した目で俺を見つめた。それは事実を言われて驚いたのか、ありもしない虚実を語られて驚いたのか、理解しかねた。

外で降っている雪は、雨みたいに音を上げて降るものではない。廊下の電気は、静かに俺たちを照らしている。下校時刻が迫っているのに、昇降口の方からは誰の声も聞こえない。そして俺と須堂の間には言葉がない。

——沈黙が漂っていた。

誰もいない自分の家に帰ったときの、あの静けさに似ている。耳の奥あたりでごく小さな音がする、あの気持ち悪いぐらいの静寂だ。

「この間——確か、今月初めぐらいの朝、登校中に佐伯さんと落ち合ったことがあったんです」

沈黙を破ったのは須堂だった。先程と比べると、幾分落ちついた目をしている。ていうか、俺の質問に答えてない。

「そのときの佐伯さん、何だかいつもより元気だった。足取りも軽やかで、よく喋って、よく笑って。でも、明らかに空元からげんき気だってわ

かりました。理由なんてなく、なんとなく。

案の定、佐伯さんはすぐに喋らなくなって、寂しそうな顔になった」

そこで須堂は言葉を切った。彼は、押し黙ったまま、光線を送り届けている蛍光灯を見上げた。俺も同じように白い光を見上げた。

電気がジーっというかすかな音を上げた。それを合図としたように、須堂は言った。

「あなたは、佐伯さんのこと、ちゃんとわかってますか？」

いや、わかってない。俺は穂波のことなんて何一つわかってないんだ。どんなに親しくしているつもりでも、相手のことなんて実はいささかもわかつちやいない。事実、俺は以前、穂波の身体が弱いことを知らなかったのだ。

昇降口から生徒の声が小さく響いてきた。俺がしばらく黙しているのをどう受け取ったのか、須堂は立ち上がった。彼は俺を見て、何か言いかけたが、口を開けただけで何も言わなかった。そのくせ、彼の目は俺に何かを訴えているような色をしている。

外で降っている雪がいつの間にか雨に変わっていて、それらが地面に当たる音がしていた。

俺はふいに、図書準備室の中に麻乃の筆箱を置き忘れていたことに気づいたが、この至近距離にいるにもかかわらず、取りに戻ろうという気は起きなかった。

第12話 それは意味深き嘘

二学期の終わりと冬休みを目前に控え、学校内にはウィンターバケーション歓迎ムードが目に見えて漂っていた。二年D組教室の黒板の隅には、誰が書き始めたのか、今年の残り日数が白チョークで小さいながらも書かれており、それが黄色チョークで四角く囲まれて強調されている。

朝から雪が降っていた。冬休みを待ちわびる生徒たちにとっては、それすらもがテンション上昇の材料には十分なようで、雪なら毎年見てるくせに、キラキラした目で窓の外を眺めてる連中が目についた。

しかし、そんな中、俺の心は、霜雪そうせつが降りたかのように冷え冷えとしていた。穂波が須堂一馬と付き合ってる、などという噂が立ってること。穂波について俺が知らない何か。それらが俺の冷えた心を形成してしまっていた。

今日も穂波は休むらしい。メールがあった。まだ体調が万全ではなく、大事をとって欠席するそうだ。

自分の席に着き、腕と脚を組み、俯いて目を閉じる、というクールな男子生徒を演じていると、いつの間にかそばに来ていたらしい麻乃の声が話しかけてきた。

「ねえ、リョウくん？」

「何だ？」

目を開き、顔を上げて声のした方を見ると、麻乃は赤い髪を掻き上げて、不機嫌そうに「さて問題です」と言った。

「今、私はイライラしています。なぜでしょう？」

「雪が降ったからか？」

「違う」と冷たい声で麻乃。

「え？　ちゃうの？　……うーんと……月経前症候群か？　あ、ちなみに、月経前症候群ってのは——」

「説明しないでいいし違うわよ！　答えは、筆箱がないからっ！」

麻乃は、叫び終わると頬を目一杯に膨らませて怒りをアピールし、その表情を維持したままストーブに腰掛けた。

「あれ、どうした麻乃、筆箱ないのか？」

俺が尋ねると、麻乃の頬は一瞬にして萎しぼんだ。そして「さて問題です。なぜ私の筆箱はないんでしょう」と再び問題提起。

「まさか、『私は文房具をも筆箱という閉ざされた空間に閉じこめたくないタチなの』なんて言うんじゃない？」

「殺すよ♪」

「はい、申し訳ございませんでした。俺が昨日、おまえの筆箱を図書準備室から持ってくるのを忘れたんです」

麻乃は呆れたようにため息をついた。「わかってるならいいんだけどね」と言い、俺と同じように腕を組んだ。

「てか、今から取りに行けばいいじゃん、図書準備室に」

「やだ」と麻乃が即答し、「なぜ」と俺が即座に尋ねる。

「うるさいな、もう。面倒なだけよ。面倒が嫌いなもの。世界には面倒事が嫌いな人なんて大勢いるだろうけどね、彼ら彼女らの比じゃないくらい面倒なことは受けつけない性格なの、私は。面倒嫌いに関して言えば世界トップクラスなの、私は。だから、いつも通り放課後になるまであそこに行く気はないわけ」

「面倒面倒とやかましいな。何回言った？ カウントすること自体が――」

面倒だ、と続けようとしたが、「あんれー、また二人して喋ってるうー」というめっちゃダルそうな声が被さってきたため、俺はそれを飲み込んだ。今回の席替えで俺の隣になった野上のがみだった。麻乃が腕組みを解く。

「話してちゃ、悪いの？」

絶対零度にまで達したみたいで冷たい目と冷たい声をその細い身一つで受けた野上は、頬を強ばらせて、

「いえいえっ！ 滅相もないでございますですよーっ！」

背筋をぴんと伸ばして敬礼した。数秒間そうしていた彼女は、へつらうような笑みを麻乃に向けながら、自分の机に鞆を置いた。

「え、えへへー」

明らかにそれとわかる引きつった笑顔で俺たちをちらっと見た野上は、鞆から教科書やノート、そして筆箱を取り出して机に置き、鞆を机の脇に掛けた。

「さってとー。予習をしなくっちゃねー」

言わんでもいいことを口に出して言う。どうやら勉強を始めてしまえば麻乃から逃れることができるだけでも考えたのだろう。が、今の麻乃には逆効果だった。

「のーぞーみちゃあーん」

案の定であった。

ノートを広げ、シャーペンをカチカチやっていた野上は、麻乃の声に動きを止めた。その仕草が、ドングリを食べようとしていたのを邪魔されたリスのようで、かなり可愛く見えた。

「な、何？」

静止状態のまま、顔も向けずに野上が言う。声が震えていた。一方の麻乃はというと、ストروبから立ち上がり、気持ち悪いくらいニッコニコと笑って野上の視界に無理矢理入り込んだ。

「む、無駄にいい笑顔だね……」

「希ちゃんったら、いい筆箱持ってるわあ」

「ただのカンペンだけど」

「かっこいいなあ、イケてるなあ、最高だなあ、ヤバいなあ、この筆箱」

「何の装飾も変哲もない、ただのカンペンだけど」

「というわけで、今日一日貸してねっ」

麻乃は、野上の子承も得ないうちに神速でその銀色のカンペンを奪い取ると、神風のように自分の席へと戻っていった。

野上はしばらく呆然としていたが、やがて俺を見た。涙目だった。

「どういうわけかなあー？」

「さあ」

「なんでカンペンごと借りるのかなあー？」

「さあ」

今日は、野上にシャーペンとかを貸してあげようと強く思った。大方は俺の責任だしさ。

放課後。麻乃と一緒に図書準備室に行くと、すでに鍵は開いていて、千里と春香ちゃんが指定席に座っていた。千里は文庫本を、春香ちゃんはケータイとにらめっこしていた。

「こんにちは」

律儀にも挨拶したのは千里で、春香ちゃんは、俺たちを一瞥して軽く会釈しただけだった。すぐに目はケータイへ向く。

「そう言えばこの筆箱、麻乃のですよネ？」

一目散にストーブの真ん前へと駆け寄った麻乃に、千里が尋ねる。彼女が指差すテーブルの上には、俺が昨日、ここに置いたままにしていた筆箱があった。

「ああっ」さもたった今気づいたように麻乃が言った。「そうだとは思ってたけどやっぱりここにあったんだー」棒読み、ご苦労様です。

「まったく、リョウくんったら。私のリスちゃんをこんなところでお泊まりさせるとはいいい度胸じゃない」

筆箱につけられていたぬいぐるみは、イヌでもネコでもクマでもなく、リスだったと判明した。どことなく野上に似てるような……。

「可愛いですよネ、そのリスちゃん」と千里が文庫本を鞆にしまいながらにこやかに発言。

「でしょ？」麻乃はなぜか得意げな笑み。

「……………」春香ちゃんは相変わらずケータイのトリコ。

俺は椅子に腰を下ろし、

「はぁーあ」

麻乃が本物よりもさらに小さなリスを撫でているのを見ながら、密かに嘆息する。

穂波がいなくても、時間はこうして等速度で進んでいる。俺の心に隙間が空いていようとも、時計の針は休まない。

「これね、この他にもダックスフンドとかトラネコとかアライグマのやつもあるんだよ」

「へえ、そうなんですか」

「でね、このリスちゃんがね、『買ってちょうだい』って私に訴えてるように感じたんだ。だからこれに決めたの」

「あ、わかります、それ——」

麻乃と千里が自分たちの話を始めてしまったので、俺は、部屋の片隅で携帯電話を見つめている春香ちゃんを振り返った。

「春香ちゃん」俺に名前を呼ばれた美少女は、無表情のまま顔を上げた。「あのさ、穂波から、メール来た？」

「学校休むっていう今朝のメールが最後です。少し前——授業終わってすぐくらいに、私、穂波にメール送ってみたんですけど、まだ返ってこないんです。寝てるだけだといいいんですが……」

「親御さんはいるの？」

今日こそはどちらかが休んだらうと思いつながら尋ねたのだが、春香ちゃんは答えにくそうな表情をして、無言で首を動かした。――左右に。

「は？」

声が洩れた。冗談だろ。インフルエンザじゃなかったにしろ、自分らの娘が熱出したんだぞ。なのに仕事を優先したのかよ。

「二人ともそれぞれ数日前から出張らしくて、二人ともしばらくは今週末まで帰れないみたいなんです。昨日、穂波から聞きました」

「そ、そっか」

出張か。仕方ないと言ってしまえばそうなるってしまうが、さすがに病人を一人きりにするのはマズくないか？

数日前から出張だったってことは、昨日も穂波は一人だったわけか。昨日春香ちゃんが看病しに行ったのもそのためで……。

いや。ちょっと待て。何かが引つかかる。腑に落ちない。そうだ。思い出せ、相川涼。記憶の引き出しを片っ端から開けて思い出せ。

……そうだ。矛盾してる。異議ありだ、穂波さんや！

おととい、穂波の体調の異変が現れた日、穂波に教えられたことがあった。『両親は二人とも忙しいから帰りが遅くなるって言っていました』って。

一方、穂波の両親は数日前から出張だったとのこと。ってこたあ、『少なくとも二、三日前から出張だった』と言い換え可能だ。仮に『二日前から出張だった』とすると、昨日から二日前、つまり今日から三日前。最低でも穂波がダウンした日より前の日からの出張になる。

背理法的に考えて、おかしくないか？ 今週末まで帰れない出張中なのに、『帰りが遅くなる』のか？ 遅くはなっても帰って来るのか？ 発言したときの穂波が、熱のせいで頭が回りにくい状態にあったとことを踏まえてもおかしい。

穂波は、嘘をついているに違いない。

「ふっ。私の完全無欠なる勝訴だっ！」俺は立ち上がり、春香ちゃんの近くで思わず叫んでいた。

「突然耳元で騒がないでください！」

「図書室が隣にあるの知ってる！？」

「優れた精神科医を紹介した方が良くかもですね」

三人がごちゃごちゃ言っていた。怒らせたっぽいので、軽く謝り、再び椅子に座る。

俺はすっかり、さっきまでの勢いを失っていた。怒られたからではない。一つの疑問にぶち当たったからだ。

穂波が嘘をついたんだという結論は出た。では、理由は？ 穂波が嘘をついたのは、なぜだ？

しばし思考した果て、俺はある仮説にたどり着いた。

「なあ、三人とも」

口がここまで重く感じたのは初めてだ。

「穂波の親、見たことあるか？」

彼女たちは、互いに顔を見合わせた。

そして、三人は、同じタイミングで、首を動かした。

——やはり、左右に。

第13話 それは消えゆく灯火

県立病院の中は、病院特有の匂いがしていた。消毒液や患者さんの匂いが混じり合ったものだろう。私はこの匂いが好きではないし、嫌いでもない。

「おっ、穂波ちゃん」

ロビーの長椅子から立ち上がった入院着姿の中年男性が、私に声をかけてきた。

「こんにちは、佐藤さん」

私が挨拶を返すと、彼は、満面の笑顔になって、「今日もお父さんのお見舞いかあ。偉いね」と言った。

私がこの病院に来るたびに、どういうわけか必ず佐藤さんに会う。だから、いつの間にか親しくなった。

「あれ、マスクなんかしちゃって、風邪？」

「あ、はい。でも大分よくなってるんで、大丈夫です」

「そう。よかったよかった」

「……それじゃあ、私、行きますね」

私がそう言って歩き出そうとすると、佐藤さんは先程より低い声で私を呼び止めた。「穂波ちゃん」

私は脚を止め、振り返る。

「お父さんのこと、大切にしなよ。穂波ちゃんの親は、もうお父さんだけなんだから」

そんなこと、わかってる。大切にしようと思っている。だが、そう思うのが、あまりに遅すぎた。

私のお父さんは、男手ひとつで私を育ててくれた。

私のお母さんは、私を産んだのと引き換えに命を落とした。分娩時の大量出血が原因だったらしい。だから、私の記憶にはお母さんは存在しない。私とお母さんが一緒に写ってる写真だってない。どんな笑い方をする人だったのか、どんなぬくもりを持つ人だったのか、私はまったくわからない。

私にとっての親はお父さんだけで、お父さんにとっての家族は私だけだった。

「どうしてほなみにはママがいないの？」

小学校に入っただけの私は、お父さんにそんなことを訊いた。

「入学式にね、みんなのパパとママは来てたんだよ。ほなみのママはいいいの？」

その質問に対するお父さんの答えを、私は一言一句違わずに思い出せる。

——穂波のママはね、旅行するのが大好きで、まだ旅行から帰って来ないんだよ。そう言って、声高らかに笑っていた。

どこへ旅行に行ったのか、私は尋ねなかった。いや、尋ねられなかった。お父さんは、笑いながら、涙を流していた。

その日を境に、私はお母さんについての話題は一切出さなかったし、お父さんも話さなかった。また、その日を境に、お父さんは、私の前だろうと頻繁に遠い目をしたり泣き出したりするようになった。タバコを吸い始めたのもこの頃からだった。

タバコの煙を吸うと、肺活量が減少する。中学時代、陸上部に所属して長距離を走っていた私は、お父さんが吐き出す煙が大嫌いで、毎日のようにお父さんと揉めた。

——迷惑なんだけど、煙。

——じゃあ自分の部屋にでも行つてろ。

——自分が行けば。

——文句言うならこの家を出てけ。誰のおかげで生きていられると思ってるんだ。

私が嫌っているとわかっていても尚、お父さんは、タバコを止めようとはしなかった。それがさらに腹立たしくて、私はお父さんと

は口を聞かなくなっていった。ご飯を食べる時間もずらして、極力話さないようにした。顔を見るのだって嫌だった。死んでほしいとさえ思った。あんたがいなくなたって、私は一人でも生きていけると。

そしてお父さんは現在、入院している。それも、集中治療室で。

一日に相当の本数のタバコを吸うようになったお父さんは、やはり肺ガンを患った。咳や痰がひどいと私に聞こえるほどの声で独り言を言っていたので強引にこの病院で検査させてみたら、肺ガンだと宣告された。半年前——今年の夏休み直前のことだった。もう半年も前になる。

抗がん剤による副作用をひどく嫌っていたお父さんは、それを断固として用いようとしなかった。果たして、ガンはたちまちお父さんの全身に転移した。お父さんは目に見えて衰弱していった。かつては大きな声で笑っていたのに、今ではもう、大きな声どころか、笑うことすらなくなってしまった。声すらも、出さない。

私は、お父さんを大切にしようと思った。けど、お父さんはもう、二度と私と会話することができないかもしれない状態にある。

集中治療室は、この世界の絶望だけが敷きつめられたかのような場所だった。

まず最初に目に入ってきたのは人工呼吸器やチューブをつけられ

た私のお父さんだった。目を閉じたお父さんの枕元は、機械たちで賑わっている。私は痛々しく感じて、思わずそれから目を背けてしまった。

「あら、穂波ちゃん」

まさに死んだように眠っているお父さんのそばに、親戚の叔母おばさんが立っていた。彼女はお父さんの三つ年下の妹だ。もし私のお母さんが生きていたのなら、叔母さんとお母さんは同じ年だった。でも、お母さんの年は二十四歳で止まったままで、年をとることはない。

「こんにちは。いつもいつもすみません」

「穂波ちゃん、学校は行ってきたの？」

と叔母さんが尋ねた。いつもなら、学校帰りにここに寄るから私の服装は毎回制服だ。なのに、今日に限って私が私服だと気づいたのだろう。

「いえ。おとといに熱出しちゃって。今もまだ風邪気味なんです」

「無理して来なくてもよかったんだよ？」

「いえいえ。私、お父さんの娘なんで、来て当たり前ですよ」

それだけが理由じゃない。

何となく、本当に何となく、胸騒ぎがしていたのだ。

ちょうど一週間前、お父さんは危篤に陥った。お父さんは普通の病室からこの集中治療室に移された。それ以来、叔母さんがお父さんのそばにいてあげると言ってくれた。実際、彼女は、ここ一週間でこの病院に泊まって過ごしている。もし何かあったら連絡するかね、とも叔母さんは言った。『何か』なんて、起きてほしくないけれど。

危篤に陥ってから一週間経つのに、お父さんは、か弱いながらも呼吸をしている。担当医も少し驚いた様子だった。

でも私は、早く、お父さんに楽になってもらいたい。

『穂波。早く、俺を殺してくれ』

お父さんは入院してから一ヶ月も経っていないある日、そう言った。肺ガンが全身を侵していく。それは恐ろしいことだ。日に日に死へと近づく。私だって、そんな死を待つだけのような日々なんて送りたいくない。

「私、ちょっとトイレに行ってくるわね」

「あ。はい」

叔母さんが一旦、席を外した。

お父さんの他に、私だけが取り残される。私はこの時間が一番辛い。今までウザいとは思ってこなかった相手と二人きり。まるで私に反省を強いているよう。反省したところで、蝕まれる前のお父さんの身体は戻ってこない。

いつだったか、お父さんは、お見舞いに來た私に言ったことがある。

「穂波、おまえ、彼氏は、まだできないのか？」

そのときはまだ、お父さんはゆっくりとだが話せていたし、笑顔を作れていた。

「まだいないよ」

「好きな人くらい、いるだろう？」

「そ、そんなことどうだっていいでしょ？」

私が思わず声を大きくすると、お父さんは、「まあ、そりゃそうだな」と笑んだ。すると突然真面目な顔になって言った。

「お父さんはまだ、お母さんのことが好きだよ」

お父さんは、久しぶりに『お母さん』と言ったし、私は、久しぶりその単語を聞いた。

「何言っちゃってんの」

「人間、愛がなきゃ生きていけないんだぞ。愛し、愛されるんだ」

「……くっさいセリフ。聞いてるこっちが恥ずかしくなるじゃない」

「……自覚してる」とお父さんはまた笑った。にこにこ笑った。

人は愛がなければ生きていけない、とお父さんは言った。でも今、私にお母さんはいない。お父さんは死にかけている。今の私には、愛を注いでくれる相手はいるのだろうか。そう思ってしまうと急に、孤独や不安や悲しみが私の胸に広がっていく。

心の瞼を閉じてしまえばどんなに楽だろう。こんな苦しい思いもしなくていい。涙なんかとは無縁でいられる。なのに、私の両目から溢れ出る涙がある。

私は、手を差しのべてくれる誰かを求めていた。私の負の感情を分かち合ってくれる誰かを。そして、私を愛してくれる誰かを。

人の気配を感じ、目元を拭って振り返ると、トイレから帰ってきた叔母さんと目が合った。

「大丈夫？」

叔母さんが私の目を覗き込んでくる。泣いていたのが知れたらしい。

「……穂波ちゃんも、大変よね」もらい泣きでもしたのか、叔母さんは目を潤ませた。「もしお兄ちゃん……じゃなくて、お父さんが

死んじゃったら、穂波ちゃん、あの家に一人でしょう。どうする？
私の家に来て、暮らす？ あそこなら、転校する必要もないよ」

涙が、また、溢れてくる。

「すみません。私……急にお腹痛くなってきたんで、私も、
トイレ行ってきます」

叔母さんの反応すら確認せずに、私は集中治療室を後にした。

最寄りのトイレの個室に駆け込む。壁に寄りかかり、ポケットに入っていたケータイの電源を入れる。

不在着信が五件あった。そのすべてが、リョウ先輩からだった。
私は直ちに電話をかけた。

「もしもし。リョウ先輩？ 今、どこ？ ……………。そう。今から
行くから、待ってて」

リョウ先輩の声を聞いた途端、不安や悲しみは、不思議と薄らい
でいた。

第14話 それは優しい手のひら

麻乃も千里も春香ちゃんも、穂波の両親に一度も会ったことがない。そのことを知った俺は、麻乃たちより一足先に図書準備室を後にした。

俺は今、穂波の家の前に立ち尽くしている。しかし、どうしても玄関のドアのノブに触れる勇気が出ない。

まだ確定したわけではないが、おそらく、穂波には両親がいない。両親の出張の件における嘘は、多分、両親がいないことを俺たちに知られたくなかったがため。そう考えてしまった後では、穂波と顔を合わせにくく感じた。

でも、穂波に会わずに帰ったのでは、俺がここに来た意味がなくなる。俺は穂波に、真実を話してもらいたいんだ。たとえ穂波に両親がいないとも、その悲しみや不安や苦しみや辛さは、同じく両親がいない俺が分かち合える。そのことを伝えたい。

引き返すのは嫌だった。俺は、一歩足を踏み出して、ドアのノブに右手を伸ばす。

と、そのとき、制服のポケットの中で携帯電話が鳴った。

「何だよ、こんなときに。キスする直前に邪魔が入るラブコメじゃねーんだから」

とかほざきつつ、伸ばしていた右手をブレザーのポケットに突っ込んで携帯電話を取り出し、開く。

穂波からだった。

あいつは俺の目の前にあるドアの向こう側にいるはずだから、別に電話でなく中に入って生の声与会話すれはよかったのだが、今の俺にはそれができなかった。

様々な疑問が脳裏をよぎったが、それらを吹っ切り、通話ボタンを押す。

「穂波か。どした？　俺が恋しくて我慢できなくなったか？」

こんなときにでも明るい声を出せる自分が、自分でも誇らしかった。けど……大嫌い。

『もしもし、リョウ先輩？』

変だ。その小さな声を聴いただけで気づけた。

俺が知ってる穂波は、こんな悲しそうな声をしていたっけか。

『今、どこ？』

今あなたの家の前にいるの、と都市伝説のメリーさん風に言ってみようかという気には、なれるはずがなかった。真面目な声で言うことにした。

「おまえの家の前」

驚くかと思ったが、穂波は、俺のその答えを予期していたように淡々と、『そう。今から行くから、待ってて』と話した。それを最後に、電話は一方的に切られた。

ケータイの時刻表示は四時過ぎを示している。まだ明るいが、だんだん、暗くなっていく。

穂波が家の中にいると信じて疑わなかったが、十分ほど待っても穂波は麗しき姿を現さなかった。着替えでもしているんだろうか。……え？ 着替え？ お着替え中？

俺は実に勝手に、穂波が家の中で一人でコスプレ大会でも開いたのかなと、ありもしないことを考えた。メイド服を着て恥じらっている穂波を妄想すると、自然とニヤニヤしてきた。その妄想は、俺に時間を忘れさせた。

それからさらに五分ほどして、穂波は俺の背後から登場した。

「リョウ先輩……」

まさか後ろから来るとは思っていなかった俺は、大仰に振り向いた。そこにはコートを着込み、口にマスクをした穂波がいたが、やっぱり、いつもの穂波らしくなかった。

俺を呼んだ声が震えていた。瞳が揺らいでいた。今にも泣き出しそうだった。

そんな顔、見たくねえ。俺の知ってる穂波は明るくて、もっと笑って、猫みたいな可愛い顔に笑顔が浮かぶと可愛さが上乘せされてこれまた可愛くて……。

でも、俺の前にいる穂波は、可愛いが、精神的には何もかもが弱い穂波だ。そんな穂波、見たいワケない。

「おい。何してんだよ。なんで風邪気味なのに散歩してんだ」

風が吹く。穂波の首に巻かれたバーバリーマフラーと彼女の黒髪が揺れた。

「もう、風邪、治ったから」

「でも、ぶり返したらどうすんだ」

「ごめん」

……やめろ。

「どこ行ってたの？」

「……ちよつと、そこまで」

「そこまで、か」

「ごめん」

……やめてくれ。

悲しみは、心の奥底に、まるで雨が水たまりを作るように溜まっていた。俺は、穂波の心にあるその水を取り除きたかった。その水が、あまりの寒さに凍てついてしまう前に。

「心配かけて、ごめんね」

もう、聞いていらなかった。

俺は、穂波の背中に手を回し、身体を引き寄せた。だが穂波は、すぐに俺の手から逃れた。そして、俺に背を向けてしまう。

「……やめてよ」

俯きながら言ったその声から、穂波が泣いているとわかった。

抱きしめる相手を失った手を、静かに下ろす。顔を見る相手を失った目を、つぶる。俺は、穂波のために何をしてあげられるだろう。俺は、どうすればいい？

「中、入ろう」

俺がそう言うと、穂波は潤んだ瞳をこちらに向けてうなずいた。

玄関のドアを開く直前に仰ぎ見た空は、薄暗くなりつつあるものの、見事なまでに晴れ渡っていた。午前中に降っていた雪は止んでいて、雲がない。晴天は、いいことの前兆だとよくいう。それは今のこの状況でも当てはまるのだろうか。

自分の部屋で寝てていいから、という俺の言葉に、穂波は遠慮したのか、首を横に振り、俺と共にリビングに入った。

電気ストーブとこたつのスイッチを入れ、こたつの中に脚を突っ込んだ穂波は、俺にもこたつに入るよう促した。お言葉に甘え、向かい合って座ることにする。

「……………」

秋にも一度、穂波が体調を崩したときに、この家のこのリビングで穂波と二人きりになったことがあった。あのときはさほど気にならなかったが、遺影も仏壇も見当たらない。別の部屋にでもあるんだろうか。

俺が考えを巡らせている間にも、穂波はずっと黙ったまま座っていた。こたつの上に乗せられたテーブルを見つめている。

時計の針の音が相変わらずウザくて、耳を塞ごうかと思っていたら、

「私…………どうすればいい？」

呟くがごとく穂波が言った。

何のことを言っているのか、わからなかった。わからなかったが、

穂波の胸中には、悲しみの涙でできた水たまりがあるんだということとは、わかった。

穂波は続ける。

「私、お母さんがいないの。私が産まれてすぐに、死んじゃったの。でも、お父さんは生きてる。でも、今は入院してる。死にそうなんだ。だから、さっきまで病院に行ってた。……ねえ、私は、誰に愛されればいいの？ 誰を愛せばいいの？」

それきり、穂波は何も喋らなかった。あまりに悲しそうで、あまりに寂しそうな穂波を見てられなくて、テーブルを見続けた。俺がもつといい男であれば、穂波を、強く強く、愛おしく、抱きしめるのに。

先程泣いていたために穂波の目元にぐくうすらとできた、涙の経路。本当によく見なけりゃわからないそれを、俺は注視した。雪道は、先を歩いた人が多ければ多いほど、歩きやすくなる。けれども、涙はそうであってほしくはない。嬉し涙ならともかく、悲しい涙は、もういらぬ。

俺はこたつから脚を抜き、向かい側に座していた穂波の唇を自分の唇で塞いだ。悲しい言葉に耳を塞ぐより、その悲哀に満ちた言葉を吐き出す口を塞げばいい。そう考えたからなのかは、正直、定かではない。どうせ俺は、後先考えない人間だ。

俺は、唇を離し、穂波を押し倒し、抱きしめる。離れないように強く、かつ、壊れてしまわないような強さで。

それからの俺と穂波に、言葉はなかった。抱き合ったまま、何も

喋らなかつた。ただただ、互いの呼吸の音を聞き合っていた。

『誰に愛されればいいの？』

俺がおまえを愛すし、俺だけじゃなくて、麻乃や千里や春香ちゃんだって、おまえを愛す。

『誰を愛せばいいの？』

俺を愛せばいい。麻乃を、千里を、春香ちゃんを愛せばいい。

俺には、両親がいない。図書準備室に四人の美少女を集めたのは、俺自身が愛されていなかった上、誰かを愛するなんてしていなかったからだ。誰かを愛し、愛されたかったからだ。

手のひらを穂波の頭に置き、撫でる。えへ、と穂波が小さく声を洩らした。

ようやく、穂波が笑ってくれた。

第15話 それはささやかな想い（前書き）

途中から穂波視点になります。

第15話 それはささやかな想い

その週の残り二日も、穂波は学校には来なかった。俺と穂波が抱き合った日の深夜、穂波の親父さんが亡くなられて、それによる忌^き引だと穂波本人からメールがあった。

穂波の忌引の二日目にあたる金曜日の放課後、図書準備室には、穂波以外の全員が来ていた。その場で俺が前述の話をしたとき、

「なんか不満。私たちには何も言わなかったじゃん」

「私、穂波のお父さんが入院していたことも、穂波のお母さんが亡くなられていたことも、全然聞いてませんでした。なのに、リヨウくんは知っていた。むむう……」

「親友の私に話さないのに、なんで先輩だけに言うかな」

三人は皆、穂波や俺に不満を言っていた。しかもどういうわけか、俺を見る六つの瞳は恐かった。

あえてそれらを見ないようにしながら、俺は言う。

「でさ、これからの穂波のことなんだけど。あいつ、両親がこれで二人ともいなくなっちゃっただろ？ だから、俺、あいつと同棲生活でも送ろうかと思うんだ。もちろん、愛の営みも毎晩するさ」

「……千里、トランプしよつか。今日は勝てそうな気がするわ」

「はい、喜んで。春香ちゃんもやろう?」

「ですね。やりまーす」

……ひでーよ、こいつら。チラチラとこっちを見てくるのが余計ムカつく。どうせ俺がふざけて言ってると思ってるんだろうが、俺の予想だと、穂波は俺と寝れば、俺をただひたすら求め続け、甘い声を上げまくるに違いないんだかな。

事実、俺は本気だった。穂波を今の家に独りきりにするのは、不安でならない。普通の人たちと比べて、あまり愛されてこなかったあいつに、少しでも長く寄り添ってあげたい。これでもかというほど、愛したい。

穂波の柔らかな唇の感触も、抱きしめた穂波の身体の感触も、俺の身体は未だに覚えている。

「……リョウくんもやります?」

俺がどんな顔をしていたのか、千里が怪訝そうに俺の顔を覗き込んできた。黙ったまま手でやらないと伝えると、三人の美少女は長机の周辺に椅子ごと集まり、春香ちゃんがトランプを配り始めた。暇人どもめ。

「今日はババ抜きをやるわよ!」

相変わらず威勢のいい麻乃のやかましい声を聞きながら、俺は思う。こんなじゃない、と。

俺がいて、麻乃がいて、千里がいて、春香ちゃんがいる。そして、穂波がいて。それが普通だし、それが当然なんだ。

でも、当たり前が当たり前じゃなくなり、穂波が欠けている今、俺は、麻乃みたいに元気ではいられないし、千里みたいに微笑んではいけないし、春香ちゃんみたいに落ち着いて座ってもいられない。

だから俺は、立ち上がった。椅子がひっくり返るくらいの勢いで、鞆を肩に引っかけて、ドアの方へ脚を踏み出す。

「ちょっとリョウくん、どこ行くの？」

麻乃の声を無視して、俺は図書準備室を出た。

声が聴きたかった。逢いたかった。それ以外、理由なんてなかった。

私は、ランニングを日課としている。今日も、私は走っている。

午前中にお葬式が行われて、お父さんの火葬もした。時々だけど微笑んでくれたお父さんが骨と化したのを見て、泣きたくなった。でも私は、目に涙を溜めただけで、流しはしなかった。

暗くなりつつある空の下を、走る。走り慣れた道。見慣れた風景。

感じ慣れた風。それらすべてがいつもとは違うように思えた。

未だに瞳には涙が浮かんでいる。そのくせ、流れもしない。消えない。

お父さんは、危篤に陥ってから死ぬまでの間、医者が驚くほど頑張った。そのおかげか、私は、お父さんが旅立つ瞬間を目にできた。ありがとうって、伝えられた。

誰も住んでいないと前から思っていた一軒の家が、壊されて跡形もなくなっているのに気づいた。形あるものは、いつかはなくなってしまう。親にせがんで買ってもらったオモチャも、お小遣いを頑張って貯めてまでして買ったスパイクも、使えば壊れてしまう。

本当に大事なものは、形のない、目には見えないものなんだ。

私がランニングコースの折り返し地点と決めているのは、小高い丘の上だ。いつだったか、お父さんにここに連れてきてもらった覚えがある。近くには私が通っていた幼稚園があるから、おそらくその幼稚園からの帰りに寄ったのかもしれない。

冬の風が、私を包む。それは強くて冷たい。雪が、ちらつき出した。それは風に吹かれて私に当たる。

「穂波」

風に紛れて、声が聞こえた——一番聴きたかった声が。

「やっとみつけた」

鞆を肩にかけたりリョウ先輩は、膝に手をついてぜえぜえと息を荒げながらも、私を見て微笑した。

「今日、葬式、あったんだってな」

「……うん」

葬式が今日行われることは、メールで伝えておいた。リョウ先輩、基本的にわかりきったことは訊かない人なのに。

「来週からは、学校に来れる？」

「行けるよ」

私がそう言うと、リョウ先輩は破顔一笑した。彼は、短い草が生えた地面に鞆を置き、私の横に並ぶ。二人して丘の上から遠くを見渡す形になった。

「あそこに、いくつかお墓が見えるでしょ？」私は一点を指差す。
「私のお母さんのお墓があの中の一つなんです。よくお父さんと行ったの」

「あ？ どこ？」

リョウ先輩は全然違う方向に目を向けていた。

「あっち」

リョウ先輩に近づき、明確にその場所を指し示す。……が。

「あそこか？」

未だに違う場所を見ているらしいので、リョウ先輩の肩に手を置き、彼とほぼ同じ目線から教える。

「あっちですって」

「あ、なんだ、そっちか……あ！ 中学生と思しき少女が着替えしてるのが見えた！ 得したなあ。ありがとう、穂波」

「……もういいや」

リョウ先輩の肩に置いた手を離し、私は盛大なため息を吐き出した。

「……で？ どうしてここに来たんですか？」

「……逢いたかったから」

私とは目も合わさず、照れ隠しするような口調で言った。そんなリョウ先輩が可愛いなんて思っちゃって、つい笑いそうになる。

「月曜日まで穂波に会えないなんて、我慢できそうになくて……」

「不倫相手に言うセリフみたいっすね……」

でも、こんな風に言ってもらえるっていうのは、正直嬉しい。本気かどうかかわからないけど、私を好きでいてくれる人がいる。愛してくれてる……のかなあ？

リヨウ先輩がどう思ってるのか、私はわからない。ただ、私は、リヨウ先輩が好き。前に一度、その気持ちを伝えた気がするけど、リヨウ先輩はもう忘れてるだろう。あのときの告白なんて、うやむやになっちゃったし。

「穂波ってさ」リヨウ先輩は私を見て言う。「陸上やってたんだろ？」

私は、街を見下ろしながら口を開く。

「そうだけど、リヨウ先輩と知り合って、図書準備室に連れて行かれて、麻乃先輩や千里先輩とも知り合ったし、春香とはかなり親しくなって……図書準備室のあの空気を味わったら、なんか、陸上なんて面倒だなんて思えてきたんです」

「それでよかったのか？ 俺のせいで部活やめたみたいになって、後悔してるんじゃない？」

「どうせ、陸上を面倒だって思ったんだから、やめてよかったんだと思いますよ。中学のときは、誰よりも速く走りたいと思って、毎晩最低でも五キロはランニングしてたけど、高校に入ったら中学時代ほど陸上に熱意を感じなくなったし」

私と同じ方を向いているリヨウ先輩の横顔を見て、続ける。

「それに、リヨウ先輩たちと一緒になら、楽しいかもって感じたからです。そして今も、私は好きですよ」

好き。図書準備室で過ごす時間が。麻乃先輩が。千里先輩が。春香が。

そして、リヨウ先輩が、大好き。

このささやかな想いは、いつまで経っても届かないかもしれない。
それでも構わない。私は……。

「てか、あの中学生、スタイルいいし可愛いな」

横を見れば、鞆に入っていたと思われる双眼鏡を取り出して覗きを再開してるバカ野郎がいた。殺意が湧いた。ものすごく殺したい。
でも、私は何もしなかった。

ふざけた面も含めて、この人のことが好きだから。

第15話 それはささやかな想い（後書き）

次は穂波編エピローグです。

第2章 エピローグ（前書き）

穂波編のエピローグです。

第2章 エピローグ

「穂波、会いたかったよお！」

教室に足を踏み入れた途端、鈴音に抱きつかれた。

「やっぱり、穂波は私のものだわ！」

鈴音は、容赦のない力で、私を自分の身体に引き寄せた。

「く、苦しいよ……」

鈴音の柔らかで豊満な胸が、私のさほど大きくもない胸に押しつけられる。

「穂波がいない私の一週間は、それはそれは寂しかったわ。毎日毎日ムラムラして、一日一回は一人で絶頂を迎えて……。でも、今日からは穂波がいるわけだし、早速今日の昼休みか放課後に——」

そこまで言いかけたところで、鈴音の頭に凄まじい勢いで鞆が当たった。鈴音は、頭を抱えて床に崩れ落ちる。教室がざわつき、怯えている生徒もいた。

「今日の昼休みか放課後に、何をするの？ 言ってみなさい。場合によっては、二度と話せないようにしてあげる。動けないようにもしてあげよっか」

仁王立ちした春香がいた。ふと、こちらに目を向けて、

「おはよう、穂波」

春香は、いつもと何ら変わらぬ調子で私に挨拶した。しかし私は、無惨にも攻撃を喰らったクラスメートを前に平常でいられるわけもなく、苦笑を返すだけだった。

鈴音はというと、頭を押さえつけながらゆっくりと立ち上がった。それを見た春香は、表情を完全に消して鈴音と対峙する。鈴音が口をつり上げて言う。

「ドSね、あんたも。だけど、残念ながら、S極とS極は、退け合う運命にあるのよ」

「それで結構」

「でも、違う性質を持っている私と穂波は、強く引き合うの」

「引き合わなくていい！」

「……そう言えば、あんたと穂波って、どんな関係？ まさか、一緒に寝たことがあるなんてことないわよね」

「そ、そりゃ、あるにはあるけど、それは――」

「え、あるの！？ 許さないわよ、川瀬春香！ で、どうだったの？ 穂波のカラダは柔らかかった。いや、そんなことはわかりきってるわ。穂波とキスした？ 唇の感触は？ 穂波の舌はどんな感じ

に絡んできた？」

「だから――」

「裸は見せ合った？」

「私の話聞けよ！」

春香は、もういいや、とため息混じりに言い、見るからに不機嫌な顔で自席に着く。

「バカ鈴音のせいで、朝からイライラするわ」頬杖をついて黒板の方を睨みながら春香が呟く。

「私は、朝からムラムラしてるわ」恍惚こうごとした目で私を見ながら鈴音が言う。

ただならぬ危険を感じ取った私は、逃げるように教室を出た。

「あ、佐伯さん！」

すると私を一馬の声が呼び止めた。

「おっ、一馬。久しぶり」

「おはよう。本当に久しぶり。先週の月曜日以来だっけ、会うの」

「そだね」

私は壁に寄りかかる。冬場の廊下の壁はかなり冷たい。

「大丈夫？」と一馬が尋ねる。

「うん、風邪なら治ったよ」

「いや、そっちじゃなくて……」

一馬は、長めの髪を掻きながら苦笑いした。

「ああ。お父さんが死んじゃって私が悲しんでるかって？」

「う、うん……」

「んなわけないって。そりゃあ、お父さんが死んで二、三日は悲しかったけど。でも、この私がいつまでもそれを引きずるわけないでしょ」

「だいいけど」

俯いて、一馬が言う。

中学のときからずっと一馬を信じていたから、一馬には全部を打ち明けていた。私一人で抱えるには重すぎたから。

お父さんが危篤に陥ってから、私は毎日のように一馬と一緒に帰った。話を聞いてもらうことで、不安を和らげたかった。いかんせん、二人で肩を並べて帰っているわけで、私と一馬が付き合い出したと言われても無理はなかった。

「あんまり、無理しないでいいよ。何かあったら相談して」

「心配してくれてありがと。そんな一馬だから、好きだなあ」

意地悪に言ってみると、予想通り、一馬の顔は見る見るうちに赤くなった。

放課後になると図書準備室のドアに手をかける。今や、それは私のルーチンワークであると言ってもいい。その扉の先には、私を待っていてくれる人たちがいる。

「こんちわーっ！」

自然と、かなり明るい声が出て、今までにないくらい純粹に笑えた。

「あ、穂波！」

「久々だねえ」

麻乃先輩と千里先輩がそれぞれ声をかけてくれた。春香はすでに定席でケータイいじりを始めていたためか、何も言わなかった。

リョウ先輩を見やると、何があったのか知らないが長机に突っ伏して、身動きひとつしない。呼吸しているかどうかとも怪しい。

「ど、どうしたんですか」

まさか死んでいるんじゃないか、などというありもしない考えを打ち消しながら誰にもなく尋ねると、春香が「あー、先輩なら」とケータイから顔を上げた。

「私とリョウ先輩しかこの部屋にいなかったとき、この人がいきなり発狂したみたいで、私に襲ってきたの。だから退治した」

事もなげにそう言った。

「なんか変態の対処法が身体に染みつっちゃって、つい……」と言つて、彼女はちゃっかり舌を出した。

「大丈夫なの！？ 本格的に死んでそうだけど！」

「揺すれば起きるから」

という春香の平坦な声を信じてリョウ先輩の身体を揺すってみると、彼は本当に動き出した。

「あ、穂波じゃんか！ 思った通り穂波の手の感触だったぜ」

「……………」

こんな人を、私は好きになった。

お母さんの存在を知らず、お父さんをつい数日前に亡くし、二人の親を失った私に、一条の光を注いでくれた。この人がいたから、希望を見出すことができた。この人がいなければ、私は泣いてばかりいたかもしれない。

中学時代の私は、走ること以外に興味はなかった。誰と誰が付き合っただの別れただのと、恋愛なんか夢中になる同級生を尻目に、毎日を陸上に費やしていた。何人かの男子にコクられて、それらをすべて断った。陸上だけに興味を抱いていて、男の人なんかどうでもよかった。眼中になかった。

でも今は、いつもふとしたときに、リョウ先輩のことを考えてしまう。

抱き合ったあのときの温もりを、私はいつまでも忘れはしない。

キスされたとき、胸が信じられないくらいバクバクと鳴った。

あんなに優しく温かい手のひらで私を撫でてくれて、正直嬉しかった。

「おかえり、穂波」

私の目を見て、リョウ先輩が言った。その笑顔は、私に伝染した。

「ただいま」

お父さん。聞こえる？

私、今、とっても好きな人がいるよ。

第2章 エピローグ（後書き）

この後、一、二話ほど番外編を挟む予定です。

番外編1 雪上の出来事（前書き）

春香視点です。春香と穂波の話になっております。

番外編1 雪上の出来事

三つの学期があるうちで一番長い二学期も、ようやくというべきか早くもというべきか終わりを告げ、冬休みに突入した。冬休みは夏休みよりも遥かに短い。それゆえに、一日一日が大事になる。

心置きなく自分の勉強ができる。誰にも邪魔されない。強制的に勉強させられることもない。私はそれらの意味で、長期休業が好きだ。

冬休み二日目にあたるクリスマスイブの朝は暗く、一段と寒かった。背中から毛布をかぶって机に向かい、冬休みの課題に取り組む私の部屋にはこたつがない。電気ストーブならあるけど、イマイチ暖かくない。かといって居間に行くと両親に勉強の妨害をされる。『春香の勉強してるときの顔、おもしろーい』と母に大笑いされて以来、居間で勉強はしていない。そんなに変な顔をしてるか、甚だ疑問に思う。それでも自分の顔を見るのが恥ずかしくて、確認しようとは思わない。

ベッドの上で仰向けになっているクマのぬいぐるみを見る。そのクマは、常に微笑んでいる。さぞ表情筋が張っていることだろう。

私は、鏡に映る私が好きではない。恥ずかしいのとは違う。どんなに嬉しいことがあった次の日の朝でも、どんなに楽しむことが控えている日の朝でも、鏡の中の私は不変な表情を保とうとする。

どこかで大人ぶっているんじゃないだろうか。自分の本当の心を無理に打ち消しているのではないだろうか。

「……………何考えてんだか」

そう呟き、シャーペンを握り直す。

私の部屋に、シャーペンの芯とノートとが擦れ合う音が響く。私が右手を休めるとたちまち静寂が部屋を包む。

天気予報によれば、今日は大雪が降るらしい。まさにホワイトクリスマスになりそうだ。

「……………雪、か」

大人ぶることは、いいことだとは限らない。

というわけで、クリスマスイブの午後、家の狭い庭には、高校生のくせして一人で雪だるま作りに精を出している女がいた。それが私である。

コートに手袋、毛糸の帽子にマフラーという防寒対策をした格好で雪を丸めている。こんな大雪の下でこんなことをしているなんて、端から見れば頭がおかしい人間に思われるだろう。しかし、勉強のし過ぎでおかしくなったわけでもなければ、多大なるストレスがこ

うさせているわけでもない。

「あれ、春香？」

音もなく舞い降りる雪の粒たち。その隙間から、穂波が立っているのが見えた。何もかぶっていないため、彼女の頭は本来の黒と雪の白が混在していた。

恐れていた事態が勃発した。

「こんなに雪降ってるのに何してるの？」

暖かそうな黒いズボンのポケットに手を突っ込みながら穂波が訊いてくる。

「え？ 何って、見たらわか……あ、いやっ。何もしてない！ 私はまだ、雪かきをしてただけで……」

「スコップも持たないで雪かき？ てか、その雪だるまは何？」

気づかれた。動揺した。

「いや、これは大したものじゃなくて……」

「もしかして春香が作ったの？ へえ、春香がそんなことするなんて、意外。可愛いね、春香」

寒いのに顔が熱い。まずい。このままじゃ、私のイメージが崩れてしまう。

「えっと、この大雪で家の前に雪がいっぱいあったから、楽しみながら雪をどかす方法はないかなーって考えて、雪だるまを……」

そこまで言って気づいた。逆効果だ、と。私が雪だるまを作っていたことを肯定した上、しかもそれを楽しんでやっていたみたいに言ってしまった。まあ、実際その通りなんだけれど。

「そっか」穂波はいたずらっぽい笑みを浮かべた。「春香って、案外、『女の子』なんだね。春香の新しい一面を見たような気がしたなあ」

「……………」

本格的にまずい。

穂波は、私に手の届くところまで歩み寄る。そしてズボンのポケットから手を出した。何をするのかと思ったら、マフラーを解かれた。そしてそれを雪だるまに巻きつけるのに使われた。

寂しくなった私の首元に、冷たい空気が流れ込む。

「そう言えば、穂波はなんでここに来たの？」

「え、私？」

穂波は、その場でしゃがみ込むと、手袋もしていない手で雪玉を作り始めた。むき出しの手は見るからに冷たそうだ。

「今日はイブでしょ？　だから、」

穂波は、言葉を切ったかと思うと、球体となったその雪を何の前触れもなく私の顔めがけて投げつけた。鼻の頭に直撃した。さほど痛くもなかったが、「つめたっ」と声が洩れた。

「油断し過ぎい」

ぴよんと跳ねるように後ろ向きに逃げる穂波。

「バツカじゃない!？」

「平和な世界に生きてると、安心しきっちゃうもんだね。それに、雪と言えばやっぱこれっしょ。悔しかったら投げ返せばあ？」

舌を出してそう言った穂波は、実に楽しそうに笑った。

私はそれを宣戦布告と受け取った。私もしゃがみ、雪玉を作ろうとする。が、その最中にまた当てられた。今度は口元に当たった。

「実にムカつくわ。穂波、ついに私を怒らせ——」

たわね、と続ける間もなく、今度は胸元に追加攻撃を喰らう有り様。

「それが銃弾なら、死んじゃってるところだったねえ」

「……………」

十六年生きてきた中で最も怒りを感じた瞬間だった。毛糸の帽子を取り、髪をまとめていた真っ白のシュシュも取り、それらをそこから辺に投げ捨てる。このシュシュは私が自分で作ったんだと自慢し

ようかなんて思ったが、今はそれどころじゃない。

「ボニーを解くなんて、本気だね、春香」

「本気に決まってるでしょう。もし私があんたをかったら、私が雪だるま作ってたなんて口外しないこと」

「ちょっと待とうよ春香！ 『私があんたをかったら』 ってどういう意味？」

「刈り殺す、ってことだよ」

「なんで満面の笑み！？ つうか雪合戦で刈り殺すってヤバいでしょ！ てか、無理でしょ！」

「人間にはね、不可能なんてないんだよ。人間は、不可能を可能にするために生まれてきたんだよ。雪をうまく使うことで、相手の首を落とすことだってできるんじゃないかなあ」

「弾ける笑顔やめて！」

「大丈夫。あと五分もすれば、佐伯穂波はあちらの世界に片道旅行に行けること間違いなしだから。そうすれば、私の顔も見ずに済むでしょう」

「かか、帰って、いいかな？」

「ダ・メ♪」

「ま、眩しい笑顔っすね！」

私は、雪だるまの上半分を持ち上げる。

「まさか、それを投げつけるなんて言わないよね……」

「これを投げつけるね」

「……そうかい。そっちがその気なら」

穂波は腰を落としてこちらをじっと見ている。いい顔。

穂波に見とれていたのがいけなかった。気づけば彼女は、雪だるまの下半分を持ち上げていた。

「ふふ。このときを待っていた！ こっちの方が大きい上、運動能力の差も含めれば結果は目に見えてわかるってわけだ！」

「し、しまった……」

「さあ、覚悟しな。無様な姿を見せるのはそっちだ！」

穂波は、一度私との間合いを十分に取った後、なかなかの速さでこちらへと走り始めた。その途上、ジャンプしたかと思うと、ハンドボール選手がシュートするときのようにその巨大なボール（雪だるまの下半分）を私に投げつけてきた。

私は対処がやや遅れたものの、自分のボール（雪だるまの上半分）を投げられたボールに向かって投げ、防御しようと試みた。

が、どちらの雪玉も互いに当たらなかった。だが、私は、重力の

影響で落ちてきた穂波と直撃し、背中から雪の上に倒れた。一瞬、頭の中が真っ白になった。

「いたたたたあ……」

穂波の声が聞こえる。

「……は、春香、大丈夫？」

より鮮明に、穂波の声が耳に入ってきた。続いて感じる、痛みと寒さと、重み。

穂波が私の上に覆い被さっていた。眼前にある、穂波の顔。唇を半開きにして、私を覗き込んでいる。

「よかった、生きてたあ」

今度は穂波が満面の笑顔を浮かべる。私は思わず、顔を背けた。雪の絨毯に、私の茶髪が流れていた。

「ごめんね、春香。私、調子に乗ってこんなことして……。ホント、ごめん」

いいから早く離れて。口に出したいのに、声が出ない。

「でも私、楽しかった。正直言うとな、一人で家にいるのが心細かったの。だから春香に会いたくて、ここに来たの。春香しかないって思ったの。来てよかったって思ってるよ」

ちょっと待って。何言っちゃってんのよ。そんなことを、しかも

この状況で普通言う？

「春香、ありがとう。大好きだよ」

穂波はそう言うと、私を抱きしめた。離れて離れて頼むから。えっ、何？ これって幻覚でしょ？ 私、まだ意識を失ったままなんでしょ？ そうであってください！

とは言っても、確かに、雪の冷たさや穂波の腕の感触、穂波の髪の毛の甘い香りを感じる。現実だ。

だしたら余計にまずい。まずいまずいまずい。こんなところを誰かに見られたら……。

「……………あ」

……手遅れでした。

どこかに出かけるのか、両親が二人そろって玄関から出てきていた。

笑い合っていた二人だったが、抱き合っている私と穂波を見ると、一瞬のうちに顔を引きつらせた。街中でカップルのキスシーンを目撃したときみたいに気まずそうに目を逸らされた。

「……………見なかったことにしようか」と父。

「……………そ、そうね。そう言えば、きよ、今日は卵が安いみたいよ、うん」と母。

そして二人はいなくなった。雪は、私と穂波の上にうっすらと降り積もっている。

決定。同性愛者だと勘違いされた。

それから三日ほど、私に対する両親の態度は明らかによそよそしかった。

番外編2 早朝の出来事（前書き）

リヨウと麻乃の話です。

番外編2 早朝の出来事

それは迷惑極まりない、早朝の電話から始まった。

待ちに待った冬休み。だから真面目に勉強しよう……などという気には、当然ながら、なれるはずがなかった。だって高校生だもん。遊びたいんだもん。

今日は十二月二十四日。クリスマスイブ。俺は、そんなキリストを讃^{たた}える記念日の前日だろうと知ったことではないとばかりに布団に潜り続けていた。例によって、昼まで眠ってしようと一人誓ったわけだ。寝る子は育つ、あるいは、果報は寝て待て、とよく言われるし、いつまで寝ていようがマイナス面なんてないだろう。

と思っただら、夏休みの再現とばかりに携帯電話が鳴り出した。

「うぜーな……」

まだ六時。時間を考えて電話してきていたありがたいものだ。俺と枕ちゃんとのキスの邪魔をするとは許し難い。麻乃をはじめとする美少女からならば許容できるが、吉永をはじめとする野郎からの電話だったらぶっ殺しに行っちゃる。

そう言えば夏休みのときは麻乃からの電話だったっけな、などと

考え、だとしたら今回も麻乃からのラブコールなんじゃないかという希望を抱く俺。

「誰からっかなーっ？」

我ながら気持ち悪い独り言を吐きながら、枕元の携帯電話に手を伸ばす。

やはり、麻乃からのラブコールだった！

「はいはい？　麻乃ちゃん？」

『あ、リョウくん？　今日はなんか究極的に気持ち悪いね』

小声で言われた。

「今日の麻乃の声も究極的に可愛いよ」

小声で言い返す。

『あっそ』

全然喜ばれなかった。

『でね、私、あなたの部屋の前にいるの』

「メリーさん！？　てか、不法侵入！？」

どうりでさっきから廊下がミシミシいってたわけだ。

『包丁も持ってるんだけど』

「殺人意欲あり!？」

『早く食べたいんだけど』

「何を!? 死体と化した俺を食べる気!？」

『なんせ今日は、クリスマスイブじゃん』

「イブだからって他人を血祭りにしていいのか! 死体を食しているのか!」

『で、何等分しよっか?』

「訊かないでください!」

『やっぱり二等分でいいよね、むふふふ』

「ギャー! 怖いですうー! なんてか知らないけどごめんなさい!」

『うるさいなあ』とため息混じりに言った麻乃の言葉を最後に通話が途切れ、「じゃ、入るよー」と俺の了承を得る前にドアが開き、麻乃が入室してきた。部屋の電気が灯される。すると、見えた。

——包丁を手に持った、ニコニコした麻乃が。

「やーめーてえーっ! ……………って、あれ?」

そこで俺はようやく気づいた。麻乃が包丁を握っていない方の手が、直方体の箱が持っていることに。

「それって……」

「あ、これ？ ケーキだよ。今日はイブだから、ケーキでも食べようかなーって思ってた」

「あー、そういうことか……」

早く食べたい、ってのはケーキを食べたいってこと。二等分は、俺の身体を半分にするんじゃなく、ケーキを二等分するっていうこと。包丁はそれをするために使うわけか。ふむふむ、なるほどなるほど……。

「って、ややこしいわっ！」

「朝からうるさいよ」

「誰のせいだ！」

「いいから、リョウくん、ケーキ早く食べようよー」

そう言った麻乃は、とても可愛くて。ミニスカにオーバーニースという俺の大好きな服装をした麻乃を、じっと見つめてしまう。

「いや、てか、朝からケーキって……嫌がらせ？」

「え？ どうして？」と小首を傾げる麻乃。可愛すぎる。

「ありがたいにはありがたいが、今はちょっと食べたくないって
うか……」

「ちょっと食べたくないなら、たくさんなら食べたいの？」

「めんどくせーな！　そういう意味じゃねえから！　食べたくない
の！」

「私のケーキは食べられないっていうの？」

たちまち、麻乃の表情が曇る。

「な、なんでそうなるかな……。わかったよ、食べるよ」

「本当に？」

「ああ」

俺が渋々うなずくと、麻乃はキラキラと瞳を輝かせ、白い歯を覗
かせて笑った。こうやって微笑まれると、なんかもうどうでもよ
くなくなる。

「……おいしい？」

「いや、まだ一口も食べてないんだが。つか、箱すら開けてねえ
んだが」

「あ、そうだったね」

めっちゃくちゃキュートに笑い、麻乃はケーキの箱を開け放つ。

そこには、典型的な円柱の形をしたおいしそうなケーキが……

なかった。

言葉を失う俺。世界がモノクロになった気がした。

箱の中に何もなかったわけじゃない。しかし、そこにあったものは円柱の形をしていただけだった。

俺はキレた。

「なぜにスポンジ部分しかないんだよ！」

「えーとね、さっき廊下で二等分して、そのうちの上半分だけ食べちゃったの」

てへ、みたいな感じで麻乃は笑った。

二等分って普通、横には切らなくね？ 縦に切るんじゃない？ 横に切ったら、下半分はクリームなんかほとんどなくね？ イチゴなんか言わずもがなじゃね？

「えっとお、我慢できなかったんだあ」

殺意が湧いた。

「ふざけんなよコラ。何してくれとんじゃボケ」

「うわ、リョウくんが不良化したっ」

「そうなくても仕方ねえわ！ ケーキの主役たるイチゴちゃんが不在って、こんなもんケーキじゃない！」

「ふっ、甘いね。土台たるスポンジくんがいなければ、イチゴちゃんもクリームさんもケーキの一部にはならないのだぜい」

殺意が湧いた。

「シバいたるか？ ワレムカつくねん」

「あ、あ、そうだ。ほらほら、この包丁、二等分したときについたクリームがあるよー。舐めたら？」

「そんな微量なクリームで満足するかよ！ だいたい、俺はイチゴが食べたいんだ！ 糖分が欲しいんだ！ 朝だけでも無性に！」

「じゃ、じゃあ、代わりに、私を食べればいいじゃん……」

イチゴのように顔を真っ赤にして、麻乃が言った。その瞬間、怒りは一気に収まって、それと引き換えに胸が高鳴り出した。番外編でまさかの展開！？

「……それ、本気か？」

「いや。もちろん冗談だよ」

「……………」

殺意が湧いた。

「おいそこのアマあ！」

「さ、さあ。このスポンジを召し上がれ」

「いらねえよ！」

「私が『あーん』してあげるから」

「よし、食べようじゃないか」

「うふ。……はい、あーん」

「……ちよつと待てや」

「ん？ 何？」

「なんでスポンジを包丁の上に置いて『あーん』してるのかな？
口ん中切っちゃうよね。血が出っちゃうよね」

「愛の証がゆえだね」

「相手を傷つけるのも愛なの！？」

俺がそんなツツコミを入れた途端。

麻乃の笑顔が、突如として消え失せた。何が原因なのか、俺はさっぱり見当もつかなかった。だから、麻乃が無言のまま涙を流したのを見て、激しく狼狽した。

「どうした？　なんで泣いてんの？」

そう尋ねるも、麻乃は俺に背中を向けてしまい、黙って首を横に振るだけで、話してくれない。

麻乃の肩に触れるが、払いのけられた。

麻乃の涙の訳を、俺は知るよしもない。けれど、俺が麻乃の心の傷に触れてしまったのは自明だった。それゆえに、即座に謝ることさえできない自分に腹が立った。にもかかわらず、声が出ない。麻乃を抱きしめることもできない。なんと情けない。『無言のまま見守った』なんていう合理化はしなくなかった。俺は、何もできない、無力なバカ野郎だ。

「……リョウくん。トイレ、借りていい？」

「トイレ？　うん、いいよ」

立ち上がった麻乃は、小さな声で、言った。

「なんかさあ、朝からケーキ食べたせいで、お腹壊しちゃったみたい。ごめんね、腹痛ごときで泣いちゃって」

舌をペロツと出して、赤い髪のカギがそう言いやがった。

俺は知らず知らずのうちに、包丁を握っていた。突発的に殺人を

犯してしまう人の気持ちが、少なからずわかった気がした。

「キヤーツ！ 来ないでーっ！ 殺人は犯罪でーすっ！ あ、でも
なんか、この状況が楽しい自分がいるような……」

結局、麻乃が新たにケーキを買ってくれたので、殺人事件は未然に防がれました。

番外編2 早朝の出来事（後書き）

次からは千里編になります。

第3章 **p r o l o g u e** (前書き)

千里編プロローグです。

第3章 prologue

休日になると、私は、行きつけのペットショップに立ち寄る。私はいつも、ある一頭の子犬の前で立ち止まる。

クリームの毛色をしたダックスフンド。どれだけ見ていようとも飽きることはない。その証拠に、今日私は、小一時間ほどこの場を動いていない。

本来は大きいはずなのに、今にも閉じてしまいそうなほど眠そうな目をしている。私に見られて恥ずかしいのか、なかなか目を合わせてくれない。少し迷惑そうに見えなくもない。

「可愛いなあ……」

思わずさらにショーケースに接近してしまう。それほどその子犬は愛らしかった。

「あ、パンツ見えてるよ」

「きゃっ！」

その声に即座に反応し、気をつけの体勢になる。予想通り。変態男性店員が立っていた。

「今日はピンクか。最近、なんだかピンク率高いね」

「声が大きすぎです」

「いいじゃん別に。どうせ、お客さんなんか誰もいないんだから」

「私がいるでしょう、私が」

「あー、そうだったね。まっ、他にはいないわけだ」

「まったくもうっ」

この店員は村田さんというアルバイトの人らしい。ちなみに年齢不詳。教えてくれないし、それ以前に尋ねたこともない。見た感じ大学生くらいかと推測する。

一時間近くも身動きひとつしない客はさすがに目立つようで、すっかり顔を覚えられ、どういうわけか名前まで知られていた。

「で、千里ちゃんはいつが欲しいの？」

村田さんは、私のお目当てのダックスフンドが入れられているシヨーケースを、ノックでもするかのように叩いた。

「可愛いなあ、っでは思ってますが、すでにワンちゃんなら飼ってますし。それに、ちょっとお値段の方が……」

「八万円。確かに高いわな」

「ええ……」

二人の人間に凝視され、恐さを隠しきれなくなったのか、その子犬は隅の方で丸まってしまった。私がショーケースの奥を覗き込むのに夢中になり出すと、村田さんは私の背後に回った。また私のパンツを見るつもりらしいので、私は身をひるがえ翻し、ペットシヨップを後にした。

「いろいろありがとうございましたー。次もスカートでご来店くださいませー」

そんな挨拶が耳に届いてきた。

それを無視し、私は、店先に繋いでおいた、今飼っているイヌを連れて歩き出す。こちらダックスフンドで、もうじき七才になる。短い脚を忙しく動かしているのを見ると、こっちまで疲れてくる。でも、微笑ましい。

「ジェファアソン、今日も寄り道して帰ろっか」

最近になって、愛犬の散歩では毎日のように寄り道する。だから、寄り道とは言えないのかもしれない。

「おう、千里」

ふと、背後から声がした。振り向くと、リヨウくんがいた。

「あ、お、おはよう、リヨウくん！」

「今、夕方な」

「どうして、こんなところに？」

「自宅の前にいちやダメか？ さっきまで買い出しに行つて、その帰り。今から我が家に入るところ」

リョウくん、一人暮らしなんだっけか……。

「そうですかー。……ふう」

俯くと、愛犬ジェファーンソンが、リョウくんの靴の匂いをクンクンと嗅いでいた。

リョウくんはその場でしゃがみ込む。

「お、ダックスフンドか。そういや、前にもイヌ飼つてるとか言つてたな。名前は？」

「ジェファーンソンです。メスです」

「あ、メスなんだ……。でもなんか、かけえ名前だな」

「そうですか？ よかったねえ、ジェファーンソン」

しかし私の愛犬は、私なんかには見向きもせず、リョウくんの顔をペロペロしたりクンクンしたりしていた。私もそんなことしたいのに……。うわあ。

「どうした千里。鼻息が無駄に荒いけど。顔もかなり赤いぞ？ 熱あるんじゃない？」

「な、なんでもないです！ じゃ、じゃあねリョウくん、またあさ

って！」

勢いだけでそう告げ、私は足早に立ち去った。

「え、あさって！？ 明日の始業式には行くなっただけか！？」

リョウくんが叫ぶ声も聞き取れないくらい、私の心臓の鼓動は大きく鳴り響いていた。

第16話 The words pass through me

冬休み前半に大量に降り積もった雪も、後半に続いた数日間の快晴のためか、三学期が始まるまでにはすっかり解けて消えてしまっていた。

冬休み中には、小学生だか幼稚園児だか知らぬガキどもがそこら辺でカマクラ作りや雪だるま作りに興じているのを何度も見たが、今のこの無雪状態ではそれもできやしないだろう。

今日は三学期の始業式で、その後は、冬休み明けテストなんつーダルい時間を過ごさねばならなかった。冬休みの課題を確認するにとすらしなかった俺は、そんなテストなんざあ知ったこっちゃなかったわけであり、答案用紙を枕代わりに眠った。そしてほぼ白紙のまま提出した。

新年になって初めて図書準備室に行くと、そこにはすでに俺を愛して止まない美少女四人がいた。

麻乃は、ストーブの真ん前にこちらに背を向けてしゃがんでいた。そうしていることで、彼女の赤く長い髪は床に触れている。相変わらず生脚を披露したいらしく、極めて短いスカートから白い脚を露出させている。正面から見たら間違いないくパンツ見えるな、あれ。

千里は、ドアに最も近い椅子に座って本を読んでいた。俺が入ってきたのに気づくと、「こ、こんにちは」と言ってくれる。麻乃と

は違って校則通りの制服の着こなしで、麻乃とは違って黒いストッキングを穿いている。ツインテールがよく似合っていて、本当に可愛くて、実に抱いてやりたい。眠そうな目なんかがめっさ可愛い。

穂波は、いつものように壁に寄りかかって立っていた。ぼーっと虚空を眺めている。……もしやとは思うが、座さない理由ってのは、固い椅子に座るとお尻の形が崩れるからなのかもしれない。さすが穂波だな。俺と過ごす夜を思っただけ綺麗なヒップラインをキープしてくれてるのか……。ちよつと感動。俺が涙ぐんでいると、穂波は、ショートカットの黒髪に触りながら大きく嘆息した。

春香ちゃんは、驚くべきことにケータイをいじってはいなかった。顔を上げて恋する乙女のように窓の外を眺めている。彼女にしては珍しく、俺を想っていると考えて相違ない。春香ちゃんの長い茶髪は白いゴムのなやつでポニーテールにされていて、最高に素晴らしいポニーテールであった。

俺は美少女たちの観察を一通り終え、自席に腰を落ち着かせる。すると、

「雪、解けちゃった……」

そんなことを、春香ちゃんがしみじみと呟いた。その表情は、雪遊びができなくなって残念がるガキのそれだった。

まさか、な。まさか春香ちゃんが雪だるま作りとかをするわけなからう。あの春香ちゃんだぞ。クールな春香ちゃんが雪だるまを熱心に作っているとところなど想像しがたい。レア度高すぎるだろ。

「春香ちゃんも、雪だるまとか作るの？」

否定されるのを承知で尋ねてみる。

「いえ、いい年して、そんなこと、するわけない、ですよ」

なんか無駄に息継ぎが多かった。

「やっぱそうだよー」

まあしかし、予想通り、春香ちゃんは大人だった。ただ、穂波が、
なんでも知らんがクスクスと鼻で笑っていた。何がおもしろかった
のだろうか。女の子って、よくわからない。

「千里、それ、何読んでんの？」

読書している千里に話しかけてみる。彼女は、その文庫本を持ち
上げ、表紙を見せてくれた。

「ふうん。千里って、そんなの読むんだ」

「悪いですか？」

「いや、全然」

てっきり俺は、評論とかの難しい本を読んでいるのかと思っていた。
だから、千里が題名からして恋愛小説とわかる本を読んでいる
ことは意外だった。

「おもしろいか、それ？」

「ええ、なかなか」

「どんな本？」

「恋愛小説です」

「そりゃあ、タイトルでわかるけど。内容は？」

「恋愛です」

返答が短い。読書の邪魔をされてやや不機嫌そうな顔をしているように見えなくもない。俺は、読書する千里の真面目な表情を脳裏に焼きつけた後、麻乃の方に身体を向けた。

麻乃は、床の上に体育座りしていた。ストーブの前にいて、そいつが吐き出す暖かい風をダイレクトに受けていた。

「おい、麻乃。喉痛くするぞ」

と忠告してやるものの、彼女は顔を膝に押しつけたままであり、反応してくれない。赤い髪が、ストーブの温風を受けてわずかに揺れ動いている。

「どうした、具合悪いのか」

またしても反応はない。

「大丈夫？」

と尋ね、またまた声が返ってこないの、麻乃の顔を下から覗き

込んでみる。すると、小さな小さな寝息が聞こえてきた。

「って、寝てんのかよ」

「疲れてるんですよ」と千里が優しい声で言った。「バイト始めたみたいだから」

「は、バイト？ 水商売でも始めたのか」

俺は、水商売に走った麻乃を想像する。『お酒、もっと飲むうー？ 飲みなよお、酔っちゃいなよお。私と一緒に気持ちよくなるうよお』などと笑って誘惑する麻乃なんて、可愛すぎる。そのままホテルに連れ込み、そのままの勢いで――

「喫茶店でのバイトらしいです」

「あ、そうなの」

なぜかちよつとがっかりだ。いや、でも待て。

俺は、その喫茶店をメイド喫茶と勝手に仮定し、メイド服に身を包んだ麻乃を想像する。いつもはツンツンしてる麻乃が、『お帰りなさいませ、ご主人様』と笑顔で言ってくれるなんて、客は昇天せんばかりの幸福ではないか！ そのまま路地裏に連れ込み、そのままの勢いで――

「あんたは何を妄想してるんですか」

穂波が、非常に冷めた目を俺に向けていた。俺は大層わざとらしい咳払いをする。そして俯いたら、なんと、麻乃の下着としか考え

られない、ピュアな白い布地が見えた。よっしゃあーっ！

「フッ。俺が、そんな変なことを考える人間に思うのか？」

「思わないわけなんです、今の変態じみた顔からして。……てか、いつまで麻乃先輩のパンツを凝視するつもり？」

「永遠に」

「あ、ダメだこの人」

俺は、時の流れのまにまに、いつまでもこんな安穩たる日常を送りたいと思う。それこそ永遠に継続されればいい。

普段なら一日一日を早々に費消してしまうのだが、この部屋でこうやってすることもなくダラダラしていると、時間が遅々と流れゆく気がする。そして俺は、そんな気がするこんな瞬間が、大好きで大好きで仕方がない。

「風邪、引いちゃいますよ」

千里は囁くようにそう言って、静かに立ち上がり、テーブルの上に置かれていた麻乃の黄色い毛布を手を取った。それを麻乃の背中に掛けてあげる千里の手が、とても小さくて、それでいて、とても優しく見えた。

結局、下校時間になるまで麻乃は起きなかった。千里が何度も何度も麻乃の肩を揺すって、やっとのことで麻乃は起きた。今までに見たことのないくらい、麻乃は苦しそうな顔をしていた。

「本当に大丈夫か、あいつ」

成り行きで千里と肩を並べて下校することになり、俺は、校門をくぐり抜けたあたりでそう呟いた。

「本人は大丈夫だって言っていましたけど……」

「千里さ、麻乃がバイトなんかしてる理由を知ってたりする？
麻乃が準備室でずっと寝てるなんてこと、今までなかっただろ。そんなに疲れるまでバイトしてるんだから、何か訳があるはずじゃないか？」

「さあ、わからないです」

「てか、バイトする必要あるのか？ 麻乃の家って、かなり裕福だ
と思うんだよな」

「私もそう考えます」

「だろ？ なのにバイトってことは、何か大きな理由があるはずなんだよ、きっと」

「……確かに」

「あーあ。麻乃があんな調子だと、俺まで気が狂うんだよなあ」

大きなため息が出る。その息が白い。制服のズボンのポケットに手をつ込みながら歩く。

いつもの俺ならば、千里が隣にいるわけだし、彼女に可愛いを連発しているはずだ。そのマフラー似合ってるね、とか、手袋も可愛いね、とか、千里は手袋よりも最高に可愛いね、なんていうことをほざいているに違いない。

だが、そのときの俺は、麻乃のことで頭がいっぱいだった。麻乃を案じ、麻乃のことばかりを呟き、本当に千里と向き合った会話なんてほとんどしなかった。

俺は、横にいた千里がまったく微笑んでいなかったのに気づけなかった。

翌朝、家を出ると、外は雪だった。夜中にも降っていたためなのだろう、道路のコンクリートを見えなくするくらいまで雪は積もっていた。

手に息を吹きかけてこすり合わせ、歩き出す。制服につく雪の粒を、ときどき手で払い落としながら歩く。白に包まれ、白に支配された町を歩く。

雪はすぐに解けるけど、雨とは違って、積もることにより、自分が降ったんだという証を残す。^{あかし}人だってそうだ。他人の記憶の中に自分の存在を植えつけたり、何らかの記録を残したりすることで、自分の生きた証を刻む。——俺の勝手な思想だ。

そんなことを考えながら脚を動かしていると、肩を誰かに叩かれた。誰か、なんて表記するまでもないな。毎朝俺の肩に触れてくるのは吉永だ。そう思った俺は、振り返らずに、

「おまえは毎日毎日どうして来るかなー」

そこまで言ったところで、視界の隅にスカートが入り込んできた。これはさすがに吉永ではないだろうと思いついた俺は、ぱつと振り返る。

「め、迷惑なんですか？」

千里がそこに立っていた。あろうことか、俺は千里にあんなセリフを吐いてしまったようだった。俺は立ち止まって頭を下げる。

「わ、悪い。てっきり、吉永かなって思ったんだ。ごめん。まさか千里だなんて思わなくて……」

「いえ、いいんです。だから、顔を上げてください」

そう言われ、ゆっくりと顔を上げる。

上げなきゃよかった。そう思った。

千里は無表情に近かったのだ。いつもの微笑は影を潜め、笑っていない顔を俺に向けている。そういう顔も可愛いぜ、なんてことを言おうなんて思えなかった。

発した言葉は取り消せない。言ったことをいくら後悔しても、相手に聞かれた以上、なかったことにはできない。

「先、行ってますね。それじゃ、放課後にいつもの場所で」

そう言い残し、千里は歩く速度を上げる。

あまりに感情のこもっていない台詞だった。

千里は、一度も振り向かなかった。彼女の背中が、あつという間に遠ざかっていき、見知らぬ生徒たちに紛れて見えなくなった。

自己嫌悪に陥りつつ教室に入ると、俺の席が占領されていた。麻乃が机に突っ伏していたのだ。

教室にいたのは片手で数えられる程度の生徒だけだった。彼らは静かにケータイをいじっていたり授業の予習をしていたりだったのだ、教室内は極めて物静かだった。ストーブが運転している音がやけに大きく聞こえた。

麻乃は、眠っているのか、俺が来たことに気づいていないらしく、秀麗なお顔を見せてくれなかった。

「おはよ、麻乃」

しかし、返事はない。

昨日から、麻乃とほとんど話していない。昨日はずっと、麻乃はストーブとお見合いしていた。体育座りしながら、まるで眠っているかのように言葉を発しなかった。

冗談抜きで大丈夫だろうか、こいつ。バイトしているとのことだったが、そのせいで疲労が溜まってんじゃないだろうか。

今日は、千里の無表情を見て。麻乃の活動停止状態を見て。

「ホント、最悪だな」

自分だけに聞こえるくらい小さく言っただつたのに、麻乃

は、出し抜けに顔を上げた。俺の呟きが聞こえたのかはわからないが、麻乃は俺を認めると、薄い笑みを浮かべた。

「大丈夫？ 元気なさそうだけど」

こう言ったのは、俺ではなく、麻乃だった。

「そっちこそ、やけに静かじゃねえか。そのままでいた方が男子受けするぞ」

「どうでもいい、そんなこと」

「だろうな」

麻乃は周りの目なんかを気にする奴じゃない。他人におもねるようなことはしない。目立つに違いない赤い髪を染めようとしらない。他人の視線を一切意に介さない。そんな生き方には少し憧れを抱く。

俺が鞆をストーブの上に置いた直後、

「私、ずっと考えてたの」

ぽつりと麻乃が言った。その顔は、女子高生が見せるものとは思えないくらい深刻な表情だった。

一向に俺の席を返還してくれそうにないので、俺は手近にあった野上の椅子を拝借することにする。

「考えてたって、今後の日本の在り方についてか？」

「思ったんだけど」俺の言葉を無視し、麻乃が穏やかに言う。「嫌いなものを好きになれないのは、それを好きになろうとしないからなんだよね。好きになろうと思えば、きっと好きになれるよね」

俺を見つめながらそんなことを言われてもどう反応していいのかわからず、頭を掻き、意味もなくストーブに視線を転ずる。設定温度二十度、室温十七度。

「……まあ、確かにな。好きこそものの上手なれ、とか言うし」

俺は、よくよく考えるとピントがずれている言葉を返した。

しかし麻乃は、再び俺の言葉をスルーし、再び俺の机を抱いて突っ伏した。

「てか、早くどけよ。そこ、俺の机なんだよ」

やはり俺の声は無視された。やがて、すやすやと寝息を立て始めやがった。好き勝手やってるな、こいつ。

でも、そんな麻乃に好意を抱く自分がいたのも確かだった。

放課後、俺は通算何度目になるか知れない動作をした。つまりは、図書準備室のドアを開けた。

そこには、二人の美少女がいた。一人は壁に寄りかかって立って

いて、一人はケータイをいじっていた。

「……あれ。穂波と春香ちゃんしかいないのか」と言いつつ、自席に座る。

「悪かったですねー、私たちしかいなくて」

壁を背に立つ穂波が天井を凝視しながら口を尖らせた。

何気なく部屋中を見渡す。部屋の中央に置かれた木製度十割の長机には、革製の黒い鞆が載っていた。イヌのぬいぐるみのキーホルダーがチャックのところにつけられていることから、千里の鞆だと推測できた。

「千里は？」

「片岡先輩なら」と部屋の隅に座る春香ちゃんがケータイを凝視ながら言った。「何分か前に誰だか知らない人に呼ばれてどこかに行きました」

肝心なところがまったくわからない。しかし春香ちゃんは、わかりやすい説明をする気はないらしく、ケータイを操作し始めた。ポタンを凄まじい速さで押す春香ちゃん。

……てか、明らかにゲームやってんだろ、この娘。

ちなみに、彼女のケータイを覗き込んだら、そこには有名ゲーム、『ぷよぷよ』の画面が映されていた。

ケータイゲームに熱中する若者を放置し、穂波に詳細を尋ねたと

ころ、彼女は腕を胸の前で組んで言った。

「さあ、わかりません。私、春香よりもここに来たの遅かったし」

「そうか」

それにしても穂波、貧乳だなあ……。背は高いのに、もったいな
いなあ……。

「アホみたいな顔でこっちをジロジロと見ないでください。つか、
どこ見てるんすか？」

「大丈夫、心配すんなって。貧乳は貧乳でかなり需要があるから。
少なくとも俺、好きだから、貧乳」

「あんたの頭は決して大丈夫じゃないですね！」

「そうかもしれない。美少女に囲まれると頭もおかしくなるわなあ」
俺がそう言うと、穂波と春香ちゃんが同時に咳払いした。

「で。麻乃先輩は、どうしたんですか？」

穂波が、長机の上辺りに目をやりながら俺に訊く。

「麻乃、今日は多分、来ないと思う」

麻乃がいつも座っている椅子を見つつ、俺は答えた。

今日一日、麻乃は、最前列の席であるにもかかわらず、授業中は

いつも以上に堂々と眠っていた。しかし教師たちは注意しなかった。麻乃が授業中に眠るのは日常茶飯だからと諦めていたのかもしれないし、それとも最前列だからこそ気づかなかったのかもしれない。

帰りのホームルームが終わっても、麻乃は机と密着したままだった。バイトの疲れか寒さにやられたのか知らないが、麻乃はいつも以上に異常だった。ただ、普段より格段におとなしい麻乃が可愛くて仕方なかった。でも、あの調子だと麻乃はこの部屋には来ないだろう。大した理由があるわけじゃないが、そんな気がする。

「そうですか、麻乃先輩、来ないんですか……。トランプやりたいのに」

確かに、三学期に入ってから一度もトランプをしていない。トランプを持ってくるのは大抵が麻乃だし、トランプをしようと提案するものほとんど麻乃だ。

大富豪やその他に付き合わされるのを、俺たちは嫌っていない。むしろ楽しい。毎日は飽きるが、たまになら実に楽しめる。

春香ちゃんだってそう感じてるはずだ。感情表現に乏しい春香ちゃんも、きつと。

ケータイをいじり続ける優等生を見ていたら、ひとつ質問が浮かんた。ごく単純な質問。

「春香ちゃん。千里を連れ去った相手の性別は？」

ケータイ大好き少女、川瀬春香が、ケータイから顔を上げた。俺を見、平坦な声を俺に投げかけた。

「男でしたよ」

——胸騒ぎがした。

そう言えば、今日の蟹座の運勢は占いによると十二位だったのを思い出した。

そして、占いつてのは、嫌になるくらいよく当たる。

第18話 S t a r e a t m e m o r e

久しぶりに入る図書室は、暖房が度が過ぎないくらいに利いていた。放課になったばかりだというのに読書や勉強をしている真面目くんや真面目ちゃんたちが見受けられ、静かだった。図書室とは、そうあるべき空間である。

先程の胸騒ぎを信じて図書準備室を出、片岡千里搜索事業を勝手に開始したものの、搜索対象のワンちゃん大好き美少女は見当たらなかった。

連れ去った男ってのは千里先輩のクラスメートで、クラスで何か仕事でもあって、そこにはその他のクラスメートたちもいて、今頃はみんな仲良く何か作業でもやってるんじゃないかな——そんなことを言ったのは穂波だった。

そうであればいい。てか、きっとそうなんじゃないかと俺も思い始めている。さっきの胸騒ぎなんてのは無意味なものだったんだ、と。いずれ千里はあのお顔に微笑を浮かべて戻ってくる、と。

千里のクラスは、確かC組だったはずだ。自然を装って覗きに行くか。

図書準備室に行くようになってからというもの、放課後の校内を一人でぶらついたことはあまりない。だから、放課後の風景ってのは新鮮だったりもした。あまり生徒とすれ違わないことから、当然と言えばそうなるが、用のない生徒の大概は帰ってしまったのだろうと思いついた。部活をやっている生徒は残っているだろうが。

二年D組の前を通り過ぎるついでに、中を覗いてみる。我が教室内に麻乃はいなかった。帰ったのかな。

歩き出し、ポケットからケータイを取り出す。新着メールが一件。麻乃からだった。ただ三文字で、『かえる』とのこと。端的すぎる。漢字変換すらしないってのが麻乃らしい。

そんなことを考えている間に、二年C組前の廊下に着いた。前後の横開きのドアはともに閉じられ、教室の電気はついていなかった。日は傾きかけている。中に人がいるならば普通は電気が必要だろうに。ということは誰もいないと考えていいだろう。ここに千里はいないんだ、きっと。

ケータイをポケットに入れ、頭を掻く。

でも、考えてしまう。

もし、千里がこの中にいるとしたら？　そして千里を連れ去った男もこの中にいるとしたら？　放課後の教室。薄暗いスペース。他に誰もいない室内。閉ざされた一室。男女二人きりの空間。やることと言えば二つとない！　脱ぎ捨てられた千里のブレザー、カーデイガン、ワイシャツ、スカート、タイツ、下着、下着、下着……。

そんなの見たくない……ってのは嘘だけでも、千里に手を出す野郎は断じて許せない！」

「待ってろよ千里！ 今助け出すからな！」

放課後の廊下にて一人叫び、ドアを勢いよく開け放つ。

千里がいた。そして、一人の男子生徒もいた。

「あれ？ リョウくんじゃないですか。どうかしました？ 深刻な顔をして」

千里は、おかしなものに対して向けるような目を俺に向けている。

「えっと……何してたんだ？」

千里は、教室の中央辺りの席に着いていた。ちゃんと制服を着用してはいる。一方、顔だけなら見覚えのある男子生徒は、千里の隣の席に座っていた。彼の表情は放心状態であり、千里は千里で相変わらずかは知らんがぼーっとした相好。そこから割り出されるひとつの結論。

「なにい、もう行為の後だと！？」

「違いますっ！」

が、即刻否定された。俺と千里のやり取りに、男子生徒が苦笑していた。

「え、違うの？」

「違いますから」と千里にしては珍しい涼やかな声。

「じゃあ何してたんだよ」

再度訊くと、千里は椅子から立ち上がり、俺のもとへ小走りで駆け寄ってきた。そのまま俺の手を取って廊下の窓際まで連れてくると、千里は可愛らしい小さな咳払いをした後、言った。

「えっと、ですね。今教室にいる彼は、二年C組のクラス委員長で、私は副委員長なのです。二人で話し合いをしていたんです。ロングホームルームについての話ですよ」

「それ、本当か？」

「はい」

「見られちゃヤバいことをしてたんじゃないよな？」

見る見るうちに千里の頬は赤くなり、「するわけないじゃないですか、そんなこと」と俯きながら囁くように言ったのが微かに聞こえた。

そんな千里に可愛さを感じていると、三年C組学級委員長であるらしい男子生徒が教室から出てきた。俺並みに端正な顔立ちの男だった。彼は俺を瞥見した後、笑顔を千里に向ける。なぜだか知らないが無理矢理な笑顔にも見えた。

「じゃあ俺、先に帰るね。さっきの予定で決まりってことでいいんだよね？」

「はい、いいですよ。今日はご苦労様でしたあ」

いつも図書準備室で見る千里の笑顔が、名前もよくわからないやつに向いている。……落ち着かねえ。

その男子生徒が去っていった後、千里は、どういうわけか俺を上目遣いしていた。チラッとこちらを見たかと思えば、俺と目が合うと視線を逸らす。

……………あ。

ようやく気がついた。千里の手は未だに俺の手中にあった。あまり意識していなかったが、先程からずっと手を握っていたのか。つてことは、例の男子生徒にも手を繋いでるところを見られていたのか。

「い、いつまでこうしているつもりですか？」

そして千里はなぜか照れているご様子。

「あ、ごめん……」と言いながら手を離れたところで違和感を抱く。
「……………てか、おまえから握ってきたんだろ」

俺が呟くも、千里は軽い足取りで教室に戻っていく。俺は、この手はずっと洗わずにおこうかなと思いつつ千里に続く。千里が黒板の前で立ち止まったので、俺は教室と廊下の境、つまりはドアのレール上で立ち止まる。

「すみません、迷惑かけてしまって」

黒板に白チョークで書かれた丸っこい字を黒板消しで消しながら、千里が言った。おそらくは、ホームルームの予定とやらを黒板に箇条書きとかで書き出しながら相談していたのだろう。

「いや、全然いいって。いいから、早く準備室に行こ。……あ、そう言えばさ、麻乃からメールもらった？ あいつ、今日来れな……」
「そうですか」

俺が話し終えるより早く、千里が感情を殺したような言葉を発した。黒板の字をすべて消し終えたにもかかわらず、千里は未だに右手を上下させ続けている。かなり力が入っているように見える。その手が一時止まり、

「最近のリョウくん、麻乃の話ばかりですね。そんなに麻乃が心配なら、会いにでも行けばいいでしょう？ ……期待した私が愚かでした」

丁寧語のくせに鋭い声で言うてから、千里は黒板消しを元あった所に置いた。その後も彼女は、俺の顔を見ることも教室から立ち去ることもしないで、黒板に身体を向き合わせたままでいた。朝のことをまだ怒っているのだろうか。てか、期待って何だよ。

俺は、俯きがちな千里の横顔を見る。それはいつも微笑んでいる彼女の表情とは思えないものだった。

俺を避けるように視線を合わさずに、千里は教室を出ていった。足早な足音はしだいに遠ざかり、やがて、消えた。俺はしばらく、突っ立っていた。

図書準備室の戸を開くと、まず真つ先に千里の背中が目に入った。怒って帰っちゃったんじゃないかと思っていたが、そうではなかったようだ。少し安堵する。

指定席に座る。別に足音を忍ばせて入室したわけでもないのに、千里はまるで俺が来たことに気づいていないかのようだった。いつもの椅子に腰掛け、顔を俯け、瞼を閉じている。寝ているわけではないようで、鼻をすすする音が時折響く。

まさか泣いてるんじゃないだろうかと案じ始め、やや挙動不審になっていたら、壁に寄りかかっていた穂波が俺を見て手招きしていた。

「千里先輩、さっきから何も喋ってないの。千里先輩に何かあった？」

穂波と共に廊下に出てまず最初に、小さめの声でそんなことを訊かれた。どう答えるべきかわからずに黙っていると、穂波は、廊下の壁に寄りかかって窓越しに外の景色を眺め始めた。壁に背を預けることがかなり好きみたいだ。

「つか、何かあったからあんななんでしょ？」

「千里は自分の教室にいたよ。クラス委員長とホームルームの相談してたっぽい。その委員長が千里を連れてったんだろうな。で、俺が行くと委員長様はすぐに帰った」

「ひょっとして、その委員長の男子と何か……」

「いや。委員長とは何もなかったと思う」

「え、じゃあ、どういうこと？ 千里先輩が沈んでんのはなんでよ？」

穂波は、見目よい顔に疑問の色を浮かべた。

委員長が帰った後、俺は、今日麻乃は図書準備室に来れないと言った。千里は、最近の俺が麻乃のことばかりを話していることに不満を洩らした。そして千里は俺の前から立ち去り、俺より早く図書準備室に戻ってきた。

それらのことをひと通り話し終えると、穂波は諦念したように嘆息した。

「つまり、千里先輩の前で麻乃先輩のことばかりを話題にしてたってこと？」

「言われてみりゃ……最近、そうだったわ」

「うわ、サイアク」

侮蔑的な目をされた。

「だって近頃、麻乃の様子が変だし」

「そういう問題じゃないっつーの」

「……最近、穂波ちゃんが僕に対して敬語をまったく使いません。言葉が乱暴になっていきます。愛想尽かされたんでしょうか。いや、それは絶対ないです。では、僕の家内はいたいどうしちゃったんでしょうか。やはり、愛、すなわち夜の営みが足りないのかもしれないです。うん、そうに違いない。改善しようと思います」

「……誰に喋ってんですか。ていうか全部聞こえちゃってますから」

………。あ、あれ？ 家内ってことなどにツツコミを入れてこない！ 認めた！？

しかし穂波は、アホチックだったに違いない俺の表情を咎めることはなかった。そして、胸の前で腕を組む……のかと思ったら俺の方をチラッと見、腕組みをやめる代わりに手を腰に当てて深い息をひとつついた。俺に貧乳がどうか言われたのがかなり効いているのかもしれない。

俺の目が自分の胸元に向けられているのを察したのか、穂波は壁に自らの踵を打ちつけて怒りを表し、「ふ、ふざけないでよね」と言った。どこことなく、その声が嬉しそうに聞こえた

穂波は、スカートのポケットに手をつ込み、外に目をやる。穂波が口をわずかに開いたのでつられてそちらを見ると、暗くなった

空から、いつの間にやら雪が降り始めていた。

「千里先輩が怒っちゃうのもわかるよ」

穂波の顔に視線を戻すと、彼女は俺を見返し、苦笑いしながら話した。

「自分と二人で話してるってのに、他の人の話ばかりされたら、そりゃ誰だってやな気持ちになるよ。自分に心を置かれていないような気がする。自分がいないように思われてる気がする。自分を見なくていいような気がする」

そこで一旦言葉を切ると、穂波は苦笑を打ち消して真顔になる。

「もっと、私を見て――」

ビビった。不意打ちだった。いきなり何をおっしゃるのかと思った。だが、穂波は、いたずらに成功したガキみたいに白い歯を見せて笑い出した。

「ふふっ、千里先輩ならそう思ってるんじゃないのかなって話ですよ。そんな風にされたらそう思っても変じゃないよ」

「そ、そうか」

「そっ。それに……」

穂波は、俺を見た。

「千里先輩って、自分の気持ちをあんまり表には出さないけど、ホ

ントはさ、一番……」

穂波は急に俯いて口を閉ざしてしまう。

「一番、何だ？」

先を促すものの、ショートカットの美少女は首を左右に振り、「ううん、何でもないよ」と言い、図書準備室の中へと入っていった。

雪は、ただ静かに舞い降りていた。知らないうちに結構積もっていた。そして雪は、積もるとかなり重くなる。

早いうちに帰った方がよさそうだ。——風が吹き始めて取り返しがつかなくなる前に。

第18話 **S t a r e a t m e m o r e** (後書き)

申し訳ないです、めっさ間空きました。なんと前回の更新からおよそ3ヶ月っ!! 実に長かったっ!! すみませんでしたっ!!

……といいますのも、僕はこれでも来年の1月にセンター試験を受ける身で、勉強もせねばならず、そのためまっ――

………なんか、明らかに言い訳にしか聞こえないですので、グダグダと書くのは控えておきます。

これからも更新がノロくなることが失礼ながらあるとは思いますが、こんな僕をどうかよろしくお願い致します。

第19話 You make me a smile

「じゃっ、私たち、お先しまーす」

俺が図書準備室のドアを開けると、それを待っていたように穂波がそう告げた。

「春香、帰ろ」

「うん」

部屋の隅で携帯電話とのお見合いを長らく続けていた春香ちゃんが、穂波の呼びかけに立ち上がった。ケータイをパタンと閉じ、鞆を提げて歩き出す。相変わらずケータイいじってばっかだったな。視力低下は避けられないだろう。

春香ちゃんは穂波より先に図書準備室を出た。しかし穂波はまだドアのそばに立っている。

「何だ？」と問うと、穂波は、頭のとっぺん辺りを掻きながら千里の背中を数秒間見つめ、それによって何かを確信したようで、突っ立ったままの俺の横に並んだ。

「……千里先輩、寝ちゃってない？」

言われてみて初めて気づいた。確かに千里は、先程からまったく

顔を上げていないし、それにさっきまでは聞こえていた彼女が鼻をすすする音も響いてこない。加えて、よく見ると上体がカクカクと揺れていた。こりゃ寝てるな。

「というわけで、また明日。どうぞごゆっくりー」

いたずらっぽい、というよりは悪意に満ちた笑顔と言葉を残し、穂波は俺を置いていった。……ごゆっくりー、と言われても。

「……………」

時間があれば千里の服を脱がせていろいろとやってみたかったところだが、残念ながらもうすぐ下校時間だ。ここはまず、千里を起こさなくては。

「おい、千里、起きろー」

と声を掛けるも、千里は反応しない。当然ながら起きない。

数日前もこんなことなかったっけか。てか昨日のことだったな。昨日眠っていたのは麻乃だったけど。

「もう下校時間だぞー。早く起きて帰しないと説教喰らうぞー」

……………。

やはり起きない。それどころか、気持ちよさそうな寝息が聞こえてきた。これと似たような場面にも覚えがある。つか、麻乃も千里もここを睡眠場所とも思ってるんじゃないだろうか。

「おねむならおうちに帰りましょうねー」

が、反応なし。なんだか無性に恥ずかしかった。

そんな思いを隠すためってわけではなかったが、千里の肩をトントンと叩いて彼女を起こすのを試みる。

「早く起きろって」

すると今度は効果があつたようで、千里の身体が動いた。そして数秒後、千里は顔を上げた。やっと起きたのだが、電気が眩しいのか、彼女はただでさえ細い目をさらに細めている。やべー、可愛い。

「あれ……」と寝起きとあって低めの声で呟きながら目をこするのが愛らしい。俺をチラッと見て、「……寝てたんですね、私」と眠そうな声。

「ああ」

俺が頷くと、千里は少し恥じらうように自分の髪をいじって、

「えっと……穂波と春香ちゃんは？」

「帰ったよ、先に」

今もいろいろ文句を言いたい気分だ。特に穂波に。

「そうですか」

と相槌を打った千里は、壁に掛けられた時計を見る。だが、その

時計は冬休み中に電池が切れてしまったようで、三学期に入ってから十時十分を示しているとしか見たことがない。そう言えば店で売られてる時計も十時十分あたりを差してるのが多いけどなんでもかなーとか思っていると、千里は、「うわっ、もうこんな時間！ 怒られちゃう！」と叫んで帰り支度を始めた。天然にも程がある。見るだけで面白いのでしばらく放っておくことにする。

「あれ、リョウくんは帰らないんですか？」

とベージュのコートを着込みながらせかせかと俺に尋ねたが、千里は俺の返答を待たずに図書準備室を出ていった。どうせ途中で自分のアホさ加減に気づいて戻ってくるだろう。手袋とマフラーと鞆が椅子の上に置きっぱなし。つくづくアホだ。

んで、およそ一分後、千里は戻ってきた。

「おかえり。早かったね」

とからかってみると、千里は顔を真っ赤にして俯いた。

「携帯電話を開いたら六時にすらなっていなかった上に、鞆とかを忘れていたのに気づいて……」

堪えきれず、吹き出してしまった。

「あははっ、最高だわ、千里」

「わ、笑わないでください」

「いやあ、さっきまでの千里の焦った顔とかを思い出すと、ガマン

できなくて」

と俺が大笑いしていると、千里はマフラーを首に巻きながら、「教えてくれたってよかったでしょう」と口を尖らせる。

「飽忘れるって、夏休み明けの小学生じゃないんだから」

「もう言わないでくださいってば。……は、恥ずかしいですから」

透き通るほど白いはずの千里の頬が未だにリンゴみたいに赤く染まっているのを見て、

「かーわいいっ」

そんなことを言ってしまう。普段から言ってることなので俺は平然としていたのだが、普段から言われてるはずの千里の様子が明らかにおかしかった。

「だだっ、だからもういわ……言わないでくださいって！ こ、困……るじゃ、ないですか」

これ以上恥じらわせることを言うと千里が壊れかねないので、しばらく口を閉ざす。

やがて落ち着いたのか、千里は咳払いをひとつすると、平常通りの素晴らしき笑顔を見せてくれた。

「私もそろそろ帰ります。鍵、お願いしますね」

やはりご丁寧にお辞儀つきだった。そこまでへりくだらなくても

いいのと思う。

「あ、俺もすぐ帰るから、ちょっと待ってて」

「あ、はい」

コートとか手袋はないので、マフラーを首に巻きつけ、鞆を肩に引っ掛けて帰り支度完了。ストーブを消し、窓の鍵がきちんとかかっていることを確認する。んで、千里と一緒に図書準備室を出てドアに施錠し、戸締まり完了。

「よしっと」

「手慣れていますね」

「ああ、おかげさまで」

千里が口元に手を当てて微笑む。その笑顔を見ることができたからなのかは自分でも定かではないが、俺は、千里の目を見て彼女の名前を口にしていた。それに対して千里が小首を傾げる。

「えっと、今日はいろいろとごめん」

「え……?」

突然謝られた千里がそのまま固まってしまったので、俺の方で言葉継ぐ。

「千里にも言われたけど、最近、千里のこと見てなかった。千里の前でも麻乃の話しかしてなかった。今朝だって、吉永だと思い込ん

でたとは言え、千里相手にひどいこと言っちゃまった。ホントに千里を見てなかった自分が情けないよ。えっと……だから、ごめん」

「いえ、いいんですよ」

千里は優しく微笑していた。

「いいんです。麻乃を心配するのは、優しいリョウくんなら当然なのに、そんなリョウくんに当たった私の方が悪いです。リョウくんに不快な思いをさせちゃいました。なので、こちらこそ、ごめんなさい」

先程そうしたように、千里は頭を下げた。彼女にだけそういうことをさせるのも悪いと思い、俺も頭を下げた。

「うふふっ」

先に頭を上げたのは千里だった。見ると、えくぼを作りながらおかしように笑っていた。

「二人で頭を下げ合っているなんて、何だか変な話ですよね」

「確かに」

俺も頬が緩む。今の千里の笑顔こそ俺が見たかった千里の表情で、それが千里の本来の表情なんだ。だから、俺は笑った。

「あ、俺、鍵返してくるから、ここでちょっと待ってて」

「はい、わかりました」

できれば『愛するリョウくんのためなら何年でも待ちますよ』とか言ってくれるとさらに嬉しいなあ、などというバカなことを考えつつ、俺は廊下を足取り軽く歩いた。

廊下の窓から見える外の世界は、ほとんどが白で埋め尽くされていた。雪が降っているのだ。それもひらひらどころではない。大雪と言うにふさわしいほど降っていた。これから外に出るんだと思うと少しだけ嫌になる。まあ、千里と帰れるんだから、そんな気持ちも打ち消せる。

「うー、さびいー」と呟き、両手をポケットに突っ込む。

ちなみに、図書準備室の鍵は事務室から借りてきている。わざわざそこまで行くのが苦痛に感じるほど図書準備室から遠くはなく……ほら、もう着いた。

「失礼しまーす」

事務室には、パソコンをいじったりコーヒーを飲んだりしている事務員さんが数名いた。「お、リョウくん。ご苦労様」とコーヒーを飲んでいた事務員さんが声をかけてきた。適当に雑談をした後に、
「鍵、返しときまーす」と告げる。

鍵を窓際の指定の場所に返し、その傍らにある大学ノートに、鍵の返却日時と名前を記す。鍵を借りるときには、日時と名前に加え、目的もこのノートに書かなければならない。面倒極まりないが、決まりなのでしゃーないわな。

「じゃ、失礼しやしたー」

我ながらダルそうに言って退室すると、すぐ近くに人の気配を感じた。下校時間も近いから、俺と同じく鍵を返しにきた部活をやっている生徒かと思ったら、

「そろそろ来る頃だと思ってた」

と成人男性のような低い声がした。

ってか、そこに立っていたのは成人男性若田部教諭だった。おそらく四十歳前後の彼は体育教師兼生活指導担当の独身長身教師だ。付け加えておくと、麻乃が最も嫌っている相手でもある。麻乃には、かつて彼に髪の色やスカートの丈について手厚く指導された過去がある。

「何か用ですか」

「ちょっと時間いいか。職員室に来てくれ。そこで話す」

早く済ませてほしい。こっちにはな、愛しの千里とたくさんの雪玉とたくさんの愛を作り上げながら帰る予定があるんだよ。

そうは思いながらも、何を言われるか、だいたい予想はついていた。

第20話 Want to join by a hand

職員室にはほとんど誰もいなかった。教師たちも帰る時間帯だからだろう。

「で、話ってのは何すか？」

若田部教諭が職員室の自身の席に座ったところで、俺は尋ねた。彼は俺を見ずに机の上に散らかったプリント類を整理しながら口を開いた。

「本当は何を言われるか、わかってるんじゃないのか？」

「さあ。何のことだかさっぱりです」

俺の軽い口調にもまったく表情を変えない。女子生徒の中には、そのクールな振る舞いに惹かれている隠れファンが多数存在するらしい。

沈黙の中、また一人、教師が職員室を後にする。若田部教諭はその教師に向けて挨拶をした後、椅子に深く腰掛けて腕を組んだ。

「前にも一度話しただろう」

「そうでしたっけ？」

俺は尚も下手な芝居を続ける。が、それについての指摘はまたしてもなし。

「ああ、間違いない。放課後に図書準備室を使うのをやめるように言っただけだ」

やっぱりその話か。確か前回もこの場で話された記憶があるな。

「図書室を利用している生徒たちから苦情があった。聞けば、おまえたちは放課後に図書準備室で雑談しているらしいな。そのせいでその隣の図書室にまで声が洩れ聞こえているそうさ。それにおまえたちは、鍵の貸し出しノートに、目的として『会議』だの『勉強会』だのと書いているようだが、そんなことをしているわけじゃないんだろう？」

「会議ってのは誰が俺と付き合ってたかということの話し合う会議で、勉強ってのは――」

「何をしようとして、生徒会にあの部屋の使用許可を得ていないおまえたちは使ってはならない。許可を得るにも正当な理由や目的がなければいけない」

おい、聞いてます？　が、彼は俺のアホ面には目もくれない。

「結論として、放課後に図書準備室を使うのはやめろ。本来あそこは司書の高村先生しか入ることは許されていない」

図書準備室を使えなくなるということは、麻乃たちと過ごす放課後が消滅することを意味する。んなことあ絶対許せないわけだ。

「でも、高村さんからは――」

「もし高村先生からの許可をいただいているとしても、駄目だ」

反論するも、完全に先が読まれていた。

「さっきも言ったように他人に迷惑がかかってる。三年生も受験間近だ。余計に迷惑だろう。だから、もう図書準備室には入るな。雑談なら学校の外で好きなだけやればいい」

もう下校時間だから早く帰れ、と若田部が平坦な声で言い、席を立ち、職員室を出ていった。

俺は結局、何も言えなかった。悔しかった。

若田部との対談を終えて千里のもとへ戻ると、彼女は口を半開きにして、魂が抜け落ちているみたいにぼーっと窓の外を眺めていた。俺が隣に来てもしづかない。……ホント、魂抜けてるんじゃないだろうな。

まあしかし、そんな千里を愛でたい気持ちもあったので、千里の背後に回って彼女の頬を軽く抓つかってみた。柔らかかった。

「きやああっ！」

予想以上の反応があった。幽霊でも見たみたいな悲鳴を上げ、千

里は跳ぶように俺から離れる。で、頬を抓ったのが俺だとわかった、千里は「なんだ、リヨウくんですか……」と実際に胸を撫で下ろしてほっとした顔つきをした。

「遅かったですけど、どうかしました？」

約束したよりもかなり遅い時間に帰ってきた夫を出迎える新婚の妻のような口調だった。心から俺を案じてくれているような顔がこれまたいい。

「別に何にもなかったよ。いいから、早く帰ろ」

「あ、はいっ」

俺が歩き出すと、遠慮がちに千里がついてきた。

若田部と話したことは言わないと決めた。誰に邪魔されようともあの部屋から身を退けるつもりはさらさらない。今まで四人の美少女とランプや、それこそ雑談とかをして過ごしたあの場所を離れるなんて、俺は何を言われても願ひ下げだ。だから、普段と変わらない明るさを保とう。そう思った。

外に出ると案の定降雪量がハンパなかった。おまけに風まで吹いてくるわけで、千里と一緒にじゃなかったらしくしくと泣きながら帰ってたかもしれないくらいの惨状だった。

「さ、寒いですね……」

防寒対策完全オツケーな千里が寒いのであれば、マフラーしかない俺が寒いのは当たり前であり、実際に手が凍えてしまいそうだった。

寒いから千里の手でも握ろうかなと考え、手袋に覆われた千里の小さな手に目を向けた。が、その視線に気づいたのか、千里は突然両手をそれぞれコートのポケットに突っ込んでしまった。……ひどくね？

いやしかし、ポケットの中でも手と手を繋ぐことは可能だと思い至り実行を試みようとするが、彼女は俺が息をやや荒げているのに気づいたのか、両手で髪についた雪を払い出した。……ひどくね？

「ひどいですね、雪」

雪よりもおまえの方がひどいですね。

「冷たいですね、雪」

雪よりもおまえの方が冷たいですね。

などと胸中で千里への静かなる怒りを募らせていると、千里がそれを感じ取ったのか知れないが、俺の手が、小さな手に包まれた。

驚きを隠せずに千里の横顔を見ると、千里は俺から目を逸らしていた。わざとらしく空を見上げて雪の粒をモロに顔に受けている。……いや、せめて俯けよ。

当の本人はそんなことを気にするようでもなく、何だかボソボソ言い始めた。

「言っておきますけど足下が凍っていて滑りそうだったから手を握ってしまっただけですからね。決してリョウくんの手が冷たそうだったからだとか手を繋ぎたいだとか思ってたわけではないのでそこを勘違いされるとこっちとしてもすこぶる困りますから変な解釈しないでもらいたいと思います私は」

よく息が続いたな、とその肺活量に感心したくなるほど長いセリフを言い終えた千里は、俺から手を離した。はあはあと息を乱しているのが何とも可愛らしい。

「いいですか。女の子にとって他の人が見ている中で転んでしまうというのは以前麻乃が言っていたように様々な理由からかなり恥ずかしいわけで……って、どうして笑ってるんですか！」

「何でもねーよ」

「何でもねーわけないでしょう！」

「何でもねーって」

そんな千里を見ていたら、嫌なことなんか忘却の彼方へと葬り去ることができるように思えた。図書準備室にいたときだってそうだった。俺も彼女たちもいつも笑って過ごせていた。嫌なことを意に介する必要のない場所だった。そこに涙はなかった。

いつか見た夢のように、図書準備室での時を失って互いの関係性が薄れることなんて、望むわけない。だから俺は、誰に何と言われ

ようと、図書準備室での美少女たちとの時間を抱きしめ続けていた。
い。

「理由もないのに笑うって何ですか！」

千里は未だに気にしているようで、足を止め、唇を窄めて俺を睨みつけた。その姿がむしろ可愛い。

「うるせーな、早く歩けって」

一度離れた手を、今度は俺から握りしめ、彼女の手を引く。

「え、あ、ちょっと……」

「どうした？」

「いえ、何でも……ない、です」

すると千里は急におとなしくなり、黙って俺の隣を歩き出した。雪は降り止むことはなく、それどころか先程よりもさらに強くなっている。俺は、空いている手をズボンのポケットに突っ込む。その途端、ズデツと音がした。続いて、「いだっ」と千里の声。千里がずっこけた音だったらしい。豪快に背中から転んでいた。ちなみに現在地は、何という巡り合わせか、交通量の多い通りの横断歩道、かつそのど真ん中。

左折しようとしている車の運転手のおっちゃんがお待ちだったので、千里の手を掴んで起き上がらせ、その車の方へ一礼した後、速やかに横断する。渡り終えて千里に目をやると、彼女は、心ここにあらずといったような顔で俺を見ていた。とりあえず繋いでいた手

を離し、尋ねる。

「大丈夫か？」

しかし千里はうなづくことすらしなかった。頭でも打ったんじゃないだろうか。

「にしても、横断歩道の真ん中で転ぶなんて、災難だよなあ」

横断歩道の真ん中で転ぶなんて、災難というより、千里らしいドジっぷりだよなあ。

その千里はというと、往来のど真ん中で転んでしまったことに恥じらいの念を残しているようでもなく、ぼけーっと俺を見ているだけ。ってか、俺を見ているかどうかとも疑わしい。

だから。

「……リョウくん」

そんな状態の千里に名前を呼ばれたとき、意表をつかれた思いがした。

「歩きながらでいいですから、私の話を聞いてくれませんか」

そう言う千里の声は、ひどく無感情だった。

第21話 The place that makes a heart p

これから語られるであろう千里の話は、決して喜ばしいものではないと、俺は根拠もなく確信していた。本日の十二星座占いで蟹座がビリだったからでも、降り止まぬ雪が不吉の前兆であるように思われたからでもなく、ただの直感で。

「私、リョウくんに隠していたことがあるんです」

「隠してたこと？」

「はい。え、ええと……。私が、クラス委員長さんとしていたのは、ホームルームの話なんかじゃなかったんです」

だが、そのように感じていながらも、手袋越しに千里の手を握っていた間に感じていた温もりが一瞬で消え去っていくような思いがした。

「全部話すから、聞いて」

千里は、まるで独白でもするかのように話し出す。

「そのクラス委員長さんは、実は生徒会長を兼任してました。そのためかはわかりませんが、図書準備室の放課後の利用をやめるように言われました。なるべく早く、って。も、もちろん私は了承なんてできなかったので、そのお願いには応じることはできそうに

ないという旨を伝えたんですが……」

若田部にされたのと似たような話だ。俺は、生徒会の顧問は若田部教諭だと思い出した。若田部の差し金か。三年C組クラス委員長にしろ若田部にしろ、なんで今更になって図書準備室からの撤退を要求するんだよ。

「……聞いてます？」

隣を歩く千里が俺を見ているのが視界の隅に入る。だが、俺は彼女に取り合わず、新たな問いを投げかける。

「千里は、どう思う？ どうしたい？」

千里はしばらく黙った。俺の質問の意味を理解しかねているのか、質問に対する答えを脳内で組み立てているのか、定かではない。

道路の真ん中に伸びている消雪パイプの影響でシャーベット状になった雪に足を取られ、よろめいてしまう。千里はそんな俺を笑うことをしない。ただゆっくりと歩いている。雪を踏む音ばかりが響く。横断歩道の赤信号を待っている間も、千里は何も喋らなかった。俯くだけだった。

ふと、彼女は立ち止まり、俺を見据えた。横断歩道の赤信号を待ったためでも、交差点を歩き過ぎる車を待ったためでもない、中途半端な場所だった。つられて俺も立ち止まる。街灯の下、千里は瞳を伏せて、

「……仕方ない、ですよ」

まさかそんなことを言われるとは思わなかった。

「正式に許可を得ていなかったわけでしたし、図書室を使う方たちにも迷惑がかかるようなことをしたこともあるし……。いつかはこうなるって、リョウくんだってわかってたでしょう？ ……別に、放課後に図書準備室に集まらなくなったとしても、麻乃や穂波や春香ちゃんと、二度と会えなくなるわけじゃない。会おうと思えばいつだって会えるし、」

「うるせーよ」

自分の吐き出した白い息が消えてしまってから、そんなことを言ったのを後悔した。でも、これだけはどうしても言いたかった。小さな目を見開いてやっと普通の人並みの大きさになった千里の瞳を見る。

「おまえはそれでいいのか。あの場所が使えなくなってもいいのかよ。どんなに嫌なことだって、あそこにいれば大概是忘れることができたし、できなくても、みんなで分かち合ってた。これといったことやった覚えはねーけど、だからこそ、俺は準備室で過ごした時間が楽しかった。俺にとって、図書準備室ってのは特別な場所なんだよ。おまえはそう思わないのか？ あの場所が使えなくなっても、いいのかよ？」

途中から千里は、俺から目を逸らしていた。図書準備室に対して、おそらく千里も俺と同じような思いを抱いているのだろう。

「いいわけないじゃないですか。私も、図書準備室で過ごす時間を大切に思っています」

「じゃあどうして」と言う俺の声と、「大切ですけど」と言う千里の声が被さる。俺の声よりも千里の声の方が大きかった。

「大切だけど、あそこにいると……苦しくなる」

意味がわからない。疑問の表情を浮かべた俺を見た千里は、若干の間を経て口を開けた。――開けただけで、しばらく声は発さずにいた。そして結局、再び閉じてしまう。挙げ句の果て、千里は俺を置いて歩き始める。

「待てよ」

俺もその後を追おうとするけれども、激しい雪に加えて風も強さを増していたために、前を向いて歩けない。早足で進んでいた千里に追いつき、彼女のコートのフードを掴んだ。が、そのせいで千里は後ろに転倒し、俺に背を預ける体勢になった。しかし千里は直ちに俺から離れる。

「やめて！ もう私は、リョウくんとは一緒にいたくないの！」

そう言われた瞬間、意識が遠のいて、手の力が嘘みたいに抜けた。千里の背中がひどく遠くにあるように感じた。

「……何だよそれ。全然、意味、わかんねえよ」

「リョウくんが嫌いっていうわけじゃ、もちろんないです。全然嫌いじゃない。……だけど。……だから。……私は、あなたとはいられないの」

千里がまた、歩き出す。ついさっきよりも歩調は遅かったが、俺

はそれを追わなかった。いや。追えなかった。

千里が雪の中に消えていった後も、俺はただ、突っ立つばかりで何もできずにいた。

翌朝、目が覚めたら頭は痛い、わ臉は重い、全身ダルいわで、果たして授業を何秒聞いているだろうと思われた。休もうかと思っただが、今日千里に会って話せなければ二度と会えなくなりそうな気がした。

千里はもう図書準備室には来ないかもしれない。あいつは生徒会長からの仰せに背くような真似をするやつじゃない……と思う。それに、千里のやつ、準備室に来ると苦しくなるとか言ってたし……。

図書準備室にいと苦しくなる。そして、俺とはいたくない。

昨日の千里の言葉を頭の中で攪拌かんぱんし続ける。言われたときにはその理由はわからなかったけれど、今なら多分、わかる。わかるがゆえに、余計わからなくなる。

家を出ると、昨日と同じ強さの雪が降っていた。つい数日前まではほとんど雪なんて見られなかったのに、道路脇の雪はもう太ももの辺りまで積もっている。夜中も降り続いていたに違いない。学校から帰ったら雪かきでもすつか、などと呟きつつ玄関に鍵をかけ、あくびをひとつして足を踏み出す。

雪は、降り止まない。おそらく、当分の間、降り続けるだろう。

教室には、麻乃はいなかった。昨日の朝のように俺の椅子に座してストーブに当たっていると予想していたが、今日は雪の影響なのか麻乃はまだ来ていない。

「よーっす」

その代わりに、来なくてもいい吉永がやってきた。

「雪、すごくね？」

相づちを打つに値しないので無視し、自分の椅子を引いたところ、吉永がそこに座りやがった。

「サンキュー。ここの席、めっちゃあったけー。俺の席と交換しない？」

「机と椅子そのものを交換するだけならいい」

「それじゃ意味ないだろうがよ。おまえさ、体感したことあるか、最前列の席のあの緊張感。隠れてケータイいじるなんてできないわ、居眠りどころかあくび一つさえもできないあの至近距離。別に美人でもない教師とお近づきになったって、まったく嬉しくないね。願い下げだ。」

それに比べ、千里ちゃんであれば至近距離は大歓迎！　むしろその距離をゼロにしたいぐらいだ！　あの小さな瞳、二重瞼、あのぼーっとしたような表情、意外と大きな胸、ツインテール、そして丁寧な言葉遣い！　すべてが好きでしょうがない！」

気持ち悪いほど喋りまくった吉永の声に、今まで自分の机に突っ伏していた野上が顔を上げた。無理もないな、隣の席でごちゃごちゃと騒音を上げられては。

当の吉永が別な友人のもとへ出向いていったので、吉永への怒りを感じつつ、

「悪い、起こしちゃったか？」

と野上に尋ねると、彼女は、「あ、リョウくん、おはよー」と挨拶した。かと思ったら、口を隠すことなく大きなあくびを俺に披露した。そして目をしばらくこすり、再び盛大なあくびをかまし、今度はしばらくぼけーっとする。野上はそのまま一時停止したみたいになり、長らくアホ面をこちらに向けていた。

なんか……可愛い。

「おーい、野上、大丈夫かー？」

野上の額を突つくと、野上、運転再開。何事もなかったかのようにならぬように、またびあくびをした。

「あー、眠い」

「……………」

つくづくよくわからないやつだ。

そんな野上にいささか癒やされていると、教室前方のドアが開き、麻乃が入ってきた。俺には目も向けず、最近の自席に座る。朝だから眠いのか、元気がないように見えた。

——そしてその日、麻乃は一度も俺に話しかけてくることなく帰ってしまった。麻乃と初めて話した日から、こんな日は、一度もなかった。

放課後の図書準備室には、やはり一年生二人しかいなかった。一人は壁に寄りかかって立っていて、もう一人はケータイを操作していた。そのケータイ少女が顔を上げ、ぺこりと俺に一礼した。それから再び、携帯電話に目を戻す。……それだけか。

で、壁少女はというと、俺を見てかすかに笑顔を帯びていた。

「あ、やっと来た。もー。誰も来ないと思ったんですからね」

「……悪い、遅くなって」

今の今まで千里を捜していたから遅れた。千里がいそうな場所を片っ端から捜したけれどいなかった。

二人が欠けた図書準備室は、寂しい。千里も麻乃も、もう二度と

ここには来ないのだろうか。

「あ、謝んなくていいって。えっと……リョウ先輩を待ってたわけじゃ、ないんだよ」

「……ずっとリョウ先輩の話ばかりしてたくせに」

「は、春香、テキトーなこと言わないでくれる!？」

何だろ。笑えない。いつものようにふざけられない。

「先輩。赤井先輩と片岡先輩は休みですか？」

「だと思う」

春香ちゃんの質問にも上の空で答えてしまう。

「……リョウ先輩? どうかしました?」

「大丈夫? やけに静かじゃない?」

二人が俺を心配そうな目で見る。

ちょうどそのとき、ドアをノックする音がした。

「失礼します」

その声の主は勝手にドアを開け、勝手に足を踏み入れてきた。

「ちょっとあんた、用もないのに入らないでくださいよ」

穂波が引き返させようとするも、手で制される。

そして、そいつは言った。

「この場所からの速やかなる立ち退きを願います」

そいつは、昨日の放課後に千里と一緒にいた男子生徒——生徒会長だった。

第22話 The color that you gave to me

いつからだっだろう、心を和ませてくれる場所だった図書準備室が、私を苦しくさせる場所になってしまったのは。

そこに身を置くのが苦痛になったわけではない。そこにいると、胸がチクチク痛むような感じを覚えるようになった。リョウくんが麻乃や穂波や春香ちゃんと話しているということに対して、言いようもない気持ちが私を支配するようになった。

そんな気持ちに陥るのが嫌で、授業が終わってすぐ、私は学校を後にした。まるでリョウくんとは会おう前のように。

歩行者用信号が点滅し、赤に変わる。立ち止まる。少し経つと、今まで止まっていた車が走り出した。空から舞い降りる真っ白な雪を浴びながら走っていく。路面の雪を踏みつけながら走っていく。

ここは、昨日リョウくんと来た交差点。でも、今日は隣にリョウくんはいない。

ううん。これでよかったんだ。これ以上、苦しみたくはないから。

「これで……よかったんだ」

……これで、よかったのだろうか。

学校の近くのアーケード街の中にある本屋さんに入ると、店内には学校帰りの学生を中心に多くの人がいた。立ち読みしている人、本の表紙を見て何か考えているような人、外の寒さから逃れるために来たと思われる人……。

ここは、私を落ち着かせてくれる場所だ。

手袋を外してコートのポケットに入れ、手近に置かれている単行本を手にする。今春ドラマ化と帯に書かれていた。何の気なしに開いてみる。当然ながら、たくさんの文字が私の視界を埋め尽くした。

私は、幼い頃から本を読むのが好きだった。

本には不思議な力がある。挿絵もない文字だけの羅列の中に世界があって、読み手はその世界へと引きずり込まれる。読めば読むほどその世界に入り込んでいくさまは、自分で新たな世界を切り開いていくような感覚を思わせる。その感覚が好きで、私は読書という行為を暇さえあれば求めていた。

私が図書委員になったのは、本と少しでも長く触れ合っていたかったからだ。図書当番に当たっている日は、静かな図書室で読書を満喫できるから楽しみだった。紙の匂い、手触り、文字の海を、私は愛していた。高校に入って初めの一年は、読書ばかりしていたといってもいい。

二年生に進級して、二年続けて図書委員に入ったら、リョウくんに会った。彼は嫌らしい笑みを浮かべて「キミ、めっちゃ可愛いね」と私に言った。私は彼の脳内構造に大いなる疑問を抱いた。そしてやがて、そんなリョウくんには半ば強引に誘われて、図書準備室に行くようになった。そこには三人の可愛い女の子がいて、その場所で、彼はこう叫んだ。

「明日から、放課後になったらみんなここに集合ね！」

かといって、わざわざ図書準備室に通う道理などなかった。以前のように本を愛し続けていてもよかった。なのにそこに足を運ぶようになったのは、リョウくんに惹かれたからに他ならない。今ならば、はつきりとそう思える。

今まで読んでいた本を元々あった場所に戻し、それからほとりとめもなく本を見て回ることにした。

一度読んだことがあるミステリー小説や、上・中・下巻から成るファンタジー小説、あまり怖くなかったホラー小説、などなど、他にも膨大な数の本で溢れている。図書室に置かれている本もあった。

「あ」

思わず声が洩れた。私が好きな恋愛小説の続編を見つけたからだ。一巻目をつい最近読み終わり、続きを読みたいと思っていたところだったので嬉しい。迷わずそれをレジへと持っていく。

「いらっしやいませ。お預かり致します。……カバーはおつけしますか？」

レジの店員さんにその本を渡すと、まずそう訊かれた。

「ええと、い、いらないです」

「はい。……えー、六百三十円になります」

店員さんがバーコードをピッとやった後、私の目を見て言った。

「あ、はい。ちょっと待ってください」

コートのポケットに手を入れる。が、財布はなかった。あ、そうかブレザーのポケットに入れていたっけと思い、コートのボタンを外してブレザーのポケットを弄る。^{まさぐ}その最中、「ポイントカードはお持ちでしょうか」という店員さんの声。

「え？ あ、いえ、お持ちでないです」

「そうですか」

未だに営業スマイルの店員さん。未だに財布を捜し求める私。ええと、確か、いつもは右ポケットに入れていたはずだけど……。

「……………」

まずい、ない！ スカートのポケットにも入ってない！ その場でしゃがんで鞆の中も捜すが、ない！ 財布すらお持ちではなかったの私！？ そう言えば今朝は寝坊して急いでいたから部屋に置き

忘れて来たのかもしれない!!

「え、ええと……」

「六百三十円です」とさりげなく催促される。どうしようどうしようどうしようどうしよう……。もう店員さんはバーコードをピツてやっちゃったし、今更お金がないですって言ってもダメだろうなあ。怒られるかなあ。店長さん呼ばれるかなあ。は、恥ずかしいよお。

と、そのときだった。

「これ使って」

と男性の声。目の前に、全国共通図書カード（千円分）が差し出されていた。それを挟んでいるのは、綺麗な長い指。私に声をかけてきたその人は、リョウくんだった。

かなり長時間に感じられたお会計を終え、本屋さんを出ると、ここ二、三日の間降り続いていた雪が止んでいた。

「おっ」

立ち止まって空を見上げるリョウくんの横顔を見つめていたら、突然目が合った。

「止んでるね」

そう言って笑いかけるリョウくんを見た途端、思わず目を逸らした。

「そうですね」と自分だけにしか聞こえないような声しか出ない。

そっとリョウくんの方を見る。彼は制服のズボンに両手を突っ込み、俯いていた。

「あの……先程は、ありがとうございました。本当に、ありがとうございます。もう何と言ったらいいのか……」

「気にしないでいいって」

顔を上げることなく、リョウくんが返した。それから彼は大きなため息をつき、車が行き交う往来を眺め始める。

「あのさ、やめにしたから、もう」

大した話題でもないかのようにリョウくんが言った。一瞬、何のことかわからなかった。

「図書準備室に集まるの、やめにしたから」

補足説明されたら、今度は頭の中が真っ白になった。

「今日、ていうかついさっき、準備室に生徒会長様がわざわざいらっしゃって、撤退の仰せを授かったんだ。で。これ以上の厄介事は御免だったから明け渡したってわけ。無血開城、みたいな？ まあ、穂波と春香ちゃんからはいろいろ文句言われたけどね。俺があまり

に恋しくて今頃泣いてんじゃないかなー」

明らかにふざけた言葉遣いなのに、リョウくんの声は、とても落ち着いていた。

「でも、別に図書準備室がすべてってわけじゃないだろ？ 昨日千里も言ったけど、図書準備室でなくたって会えるわけだろ？ 俺の家とか千里の家とかラブホとかでも会えるわけだ」

「……リョウくんは、それでいいんですか？ 昨日、図書準備室が特別な場所だと言ったのはリョウくんでしたよね？ そんな簡単に手放していいんですか？」

と尋ねる。リョウくんはすぐに「いいよ」と答えた。

「え？」

「だってさ、千里が準備室にいて苦しいって言ってるんだから、俺だってあそこにも楽しめるわけじゃないじゃん。正直言って、一人でも欠けたら、あの場所に行く意味なんてない。全員がいて初めてあの場所は光を放つんだ……なんつって。あ、なんか今の詩的じゃね？」

「……勝手」

「は？」

苦笑した顔がこちらを向く。私はその顔に目を向ける。

「初めから終わりまで、あなたはいつでも勝手でしたよね。私たち

の意志とは無関係に図書準備室に集まるように言ったかと思えば、私たちが自分を好いていると思ひ込んで、結局は、勝手にやめにして。しかも、私なんかのために。

麻乃も穂波も春香ちゃんも、みんな図書準備室が好きなんです。そこでの何もない時間が好きなんです。みんな、リョウくんが好きなんです。だから、私なんかのせいで他の三人を悲しませるなんてしてほしくないです。私のことなんて、気にしないでいいのに……」

気がつけば、涙が溢れてきていた。ひとたび流れ出すと、涙は次々と私の頬を伝う。それを右の手の甲で拭った後に見たりョウくんは、少し困った顔をしていた。

「まったく。私なんか私なんか。千里はさ、自分のことを二の次に考えすぎなんだよ。もっと、なんつーか、自己主張、みたいなのをするべきなんじゃね? 『リョウくんのこと、大好きです。愛してます。今夜、私と一緒に結ばれましょう。ちゃんとゴムつけてね♪』とかさ」

胸の鼓動が、ドクンとひとつ波打った。もう、こらえきれなかった。目の前にいるリョウくんを抱きつく。彼の胸に頭を押し当て、彼の背中に手を回す。

「お、おい、千里。一応人目があるわけだしさ、ここで結ばれるのはちょっと……」

もう、何も聞こえなかった。私の心臓の高鳴りだけが音を成していた。

「私、リョウくんのこと、大好きです」

雪のように積み重なった、しかし溶けることのないこの胸の想いを、今、やっと口にできた。

友達のいなかった私に、声をかけてくれた。何の面白味もなかったであろう私に、屈託のない笑顔を向けてくれた。モノクロだった私の世界に、色を与えてくれた。

何もかもが、今までの私の生活とはいいい意味でかけ離れていて。楽しかった。嬉しかった。

そして次第に、苦しくなった。……リョウくんを、好きになってしまったから。

「ありがとう」

リョウくんのその言葉は、心からの感謝に聞こえた。私の思い上がりがかもしれないけど、そう聞こえた。彼は、ズボンに入っていた手をようやく出して私の肩を掴み、私の身体を離れさせる。無性に寂しい心地がした。

「千里が俺のことをそんな風に思ってくれたってわかって、ホント嬉しい。けどさ……。やっぱ、場所、考えような」

そう言うと、リョウくんは周りを見渡す。やや遅れて私も同じように周囲を気にする。

このアーケード街には数多の店が並んでおり、普段から通行人は多い。ましてや今は、学生の下校する時間。それゆえに、人通りは結構な数だけあった。女子高生のグループや買い物に来たであろう主婦のグループやランドセルを背負った小学生などが、私たち

をチラチラ見ではクスクス笑っていた。

「あ、ごめんなさい！」

と謝ってから気づく。声が大きかった。たった今私たちの前を行き過ぎていった人もまた、クスクス笑う。瞬く間に私の顔は熱を帯びた。すると今度は、すぐ隣から忍び笑いが聞こえてくる。

見ると、彼は、笑っていた。おかしそくに笑っていたのではなかった。私を包み込むように優しく微笑んでいた。まるで初めて私と会ったときのように。

第23話 I'm glad (前書き)

途中から千里視点です。

第23話 I'm glad

昨日千里が転んだ交差点を尻目に、昨日と同じ道を、昨日と同じ相手と並んで歩く。

ほとんどが昨日と同じ状況であるにもかかわらず、何だか頭がぐちゃぐちゃしていた。加えて、今日の放課後、二人に言われた言葉が頭を離れない。

生徒会長からの撤退命令に従って図書準備室を出たとき、俺は、穂波からの強烈なドロップキックを喰らった。

「あんたバカですか？　ていうかバカなんでしょ？　勝手すぎもいいところです」

春香ちゃんにはいつもの冷たい目を向けられた上、

「もう顔も見たくありません」

と冷たすぎる声でそう言われた。

いったいどんな選択が正しかったのだろうか。もし正しい選択があるとして、俺はこれからどうするのが最適なのだろうか。

麻乃は、元気をなくしている。しかもその理由すらわからない。

千里は苦しいと言っていた。その理由はおそらく、俺が好きだから。といっても、全然喜べない。

麻乃と千里がいなければ図書準備室へ行く意味はない。そう思っ
て図書準備室を手放した。そうすると今度は穂波と春香ちゃんがお
気に召さず、跳び蹴りされたり蔑むような目で見られたりした。

何をすべきか考えても、さほど知能も高くない俺にはベストな手
段は考えつかない。

俺は今、これから先の人生を占う巷ちまたを眼前に控えているといっ
ても言い過ぎではないだろう。

でも、今の状況だと、正解への道が狭すぎる。それ以前に存在し
ているかどうかさえも疑わしい。どこに進んだらいい？

「……ここなら、いいですよね」

穏やかな声は、千里のものだった。はっと我に返る。そして気づ
けば、どこか知れない所に立っていた。

おそらく、田んぼ道。というのも、辺り一面が雪に覆われていて、
田んぼなのかどうかわかりかねたからだ。周りには車もなければ人
の姿すら見えない。すぐ脇を線路が走っているものの、電車の姿は
見えないし、音も聞こえない。

「いって、何が？」

と尋ねるも、千里は俺に背中を見せたまま答えない。

虚しいくらいに何もない風景。さっきまで身を置いていたアーケード街のささやかな賑わいが嘘のようだ。この街には俺と千里以外に誰もいないのではないかと思えるくらいの、沈黙。風も吹かず、人の声もない。ただ千里だけが動体として俺の目に映っていた。

ふいに足元の雪が鳴る。千里が俺を振り返った。その目は俺を捉えていた。その瞬間、記憶がよみがえったような気がした。何を想起したのか、自分でも明確にはわからない。ただ漠然とした感覚だけが起こった。

千里が息を吸い込む。そして言った。

「あなたが、好き」

千里が言うのを待っていたみたいに風が吹いた。地面に積もっていた雪の粒が再び宙を舞う。それらが顔にも吹きかかり、俺は、前を向き続けることができなくて俯いた。風が弱まったときにちらっと見た千里は、俺とは対照的に、目を細めながらもずっと前を向いていた。ツインテールを風になびかせながら、スカートを手で押さえつけながら、俺から目を逸らそうとしない。

「あなたが、好き」

と、また声がした。胸が、炎症を起こしたかのように熱く、痛む。

どう返事すればいいのだろう。千里のことは俺も好きだ。でも、だからといって、俺は今の関係を壊したくない。ずっとつかず離れずの関係でいたいんだ。

しばらく答えられずにいる俺に、千里が尋ねる。

「覚えていますか？ 初めて会ったときのこと」

いきなり何を言い出すんだろう。

「え、えっと、確か、図書室に一人でいたおまえを図書準備室に連れて行って……」

俺が言いかけると、千里はゆっくりと首を左右に振った。

「違いますよ。もっと前に、会っています」

まったく記憶にない。この俺が美少女との出逢いを忘れただと？
実に不覚だ。

「ちょうど去年の今頃でした。その日は雪がかなり降っていて、風も強くて、寒い日でした。それで、私は憂鬱だった。滑らないように足元にも注意しないといけなかった。加えて吹雪いてもいたから、前を向けませんでした。そんな中、靴紐が解けているのが目に入っ
て気を取られた覚えがあります、私は、見事に足を滑らせて、転ん
じやったんです。不運にも、転んだ先に結構な雪が積もっていて、
これまた見事に、私は雪に埋もれてしまいました。膝くらいまで積
もってたんですよ？」

俺は笑った。素晴らしいまでの不幸だ。

「そういうときって、友達と歩いてるときだったら、その人に笑っ
てもらえるでしょう？ そうしたら恥ずかしさなんて和らぐ。でも、
私は一人だったの。というか、友達なんていなかった。勉強とか読
書してばかりだったから、仲がいい相手なんていなかったんです。」

恥ずかしかった。知らない人にでもいいから、笑い飛ばされたかった。でも、そうはいかなくて、みんなして私を指差してコソコソ話したり、忍び笑いしたりするだけ。日本人なんてそんなものですよね。知らない人とは関与しない。……そういう考え方があるんだと思います」

千里は俺からやっと目を逸らし、「なんだか、話が脱線しましたね」と苦笑した。千里の目が離れたことで、俺の中の緊張の糸、みたいなのがほぐれた。俺は雪上に腰を下ろす。冷たかった。

「そんな情けない状態の私に手を差し伸べてくれたのは、一人の男の人でした。それがリョウくんだったんです。私を起き上がらせた後に、リョウくんは、優しく笑ってくれたの」

千里が頬を弛緩させる。

「嬉しかったです。初めて私に本当の笑顔を見せてくれた。ちよつと大袈裟かもしれないけど、そのときの私にとっては、光、でした。……私は今もずっと、忘れずにいます。リョウくんは、覚えていますか？」

再び問われた。千里は、まっすぐに俺を見つめている。俺は、頷いた。

「思い出した」

「そうですか。よかった」

喜ばしそうな笑顔が千里の顔に浮かぶ。

だけど、正確に言えば、俺が思い出したのは、千里を起き上がらせたときの記憶でも、俺自身が笑ったときの記憶でもなかった。

死んだような目だけを、思い出せた。あらゆる希望を失って、絶望に溢れた目。もう何も見ていないような目。何ひとつとして信じることができなくなったような目……。

それが本当にあの頃の千里の目だったのかどうか、はっきりとはわからないし、千里の言うように俺が優しく笑った後、千里の目は変化したのか、表情は変化したのか、それすらも思い出せない。

ただ、これだけは言える。千里はあの頃と比べて、変わった。目にしろ表情にしろ、明るくなった、と。

俺は立ち上がり、千里の目を見る。

「俺も」言って、一旦、口を閉ざす。吐き出した息が白い。「千里が好きだよ……。今の千里が好き」

千里は、口を小さく開き、目をわずかに見開いた。

「……………」

すると、千里の頬が、次第に朱に染まり、彼女は俯いてしまう。急に先程までの落ち着きを失い、足元の雪を踏みつけたり蹴ったりし始めた。しまいには俺に再び背中を向け、同じ動作を続行する。

自分から好きと言ったくせに、相手から好きと言い返されるとそれか。なんつーか……。

「めっちゃ可愛いよ千里！」

俺が叫ぶと、千里は動きを止めた。しばしの静寂の後に、千里はぼそつと言った。

「か、帰ります」

そして速い歩調で歩き始める。

「いや、待てって！」

しかし、一度俺をチラッと振り返ったきり、千里はもうこちらを顧み^{かえり}ることはなかった。

……どうやら、呆れられたらしい。何してんだろ、と呟き、俺はため息をひとつついた。

顔が熱かった。

『今の千里が好き』

そう言われたとき、心が躍った。リョウくんに、好きだと言われた。

私は一人、舞い上がっていた。いつも見ている景色さえもが明るく見えた。

もうすぐ家に着くというのに、私の頬の熱はなくならない。先程のリョウくんの声を脳内で何度も再生させるたびに、顔は熱を帯びてゆく。心はさらに高く弾む。

嬉しくて、嬉しくて。

私は、雪の積もった道の上を走った。時折足が滑って転びそうになるけれど、関係ない。

家の玄関を開くとすぐ、ジェフアーソンが駆け寄ってきた。尻尾を千切れんばかりに振りながら飛びかかってくる愛犬に、「ジェフアーソン、ただいま」と声をかける。指先で耳の裏側を撫でると、彼女は鼻を鳴らし、私は彼女に口元を舐められた。

「やめてよ」

私は、鞆をげた箱の上に置くと、彼女に首輪とリードをつける。

「あら、お帰り、千里」

母親が台所から顔を出した。見慣れたエプロン姿だった。

「ただいま」

「これから散歩に行くの？　もうちょっとでご飯だけど？」

「大丈夫。すぐ帰ってくるから」

「気をつけるのよ」

「わかってるって。じゃ、ジェファーンソン、行こっか」

私の声を理解したかのように、ジェファーンソンは玄関の外へと駆け出した。小さいのに力がある。私は、彼女に若干引っ張られながら、その小さな身体を追った。

早速家の前の草村をクンクンし始めたジェファーンソンに、話しかける。

「ジェファーンソン。今日ね、とっても嬉しいことがあったんだ」

第23話 I'm glad (後書き)

次は千里編エピローグになります。

第3章 e p i l o g u e

「いらっしゃ……あ、千里ちゃん」

ジェファアソンの散歩の途中、私は例のペットショップに立ち寄った。するとやはりいつものように村田さんが出迎えてくれた。しかし、今日はなんだか、彼の声が穏やかで、私は調子を狂わされた。

「どうかしました？」

そう訊くと、彼は少し悲しそうな顔をする。何かあったのだろうか。

「話があるんだ」

大変真剣な表情に、私はごくりと唾を飲み込む。これはかなり大事な話に違いない。

「千里ちゃん。俺、す、す……」

好き、というつもりなのかな？ 告白するつもりなのかな？

「スカートを穿くときにストッキング着用はご遠慮願いたい。まあ、制服姿ってのは、うん、すごく可愛くていいんだけどさ……。ただ、ストッキングってのはどうよ？ 俺は生脚の方が好き」

「……………」

私は言葉を失った。どうしてこうまで店員としてあるまじき発言をするのだろう。

「……あ、それともうひとつ、話があるんだ」

そう告げると、村田さんは、とあるひとつのショーケースの前まで歩んでいき、立ち止まった。それは、私がよく一時間近く中を覗き込むショーケースだった。

「千里ちゃんが気に入ってたダックスフントなんだけど……」

村田さんの傍まで行って中を覗く。いつもいるはずの可愛い子犬は、そこにはいなかった。空っぽだった。

「昨日、姉妹っぽい女の子二人が一緒に来て、買ってったんだ。お正月にお年玉いっぱいもらったらしくてね、合わせて八万円、出してくれたの」

「そうだったんですか……」

「ごめんね」

「いえいえ。村田さんが謝る必要はないですよ。というより、もらってくれる人が現れて、むしろよかったんじゃないかと思います。こんな狭い所から出ることができて、あのコも幸せでしょう」

とは言うものの、私を和ませてくれたワンちゃんがおらず、寂しさを隠せない。

村田さんは、そのショーケースをノックでもするようにコンコンと叩いた。

「俺、長い間この店でバイトしてるけど、ここにいたやつが、買われていなくなるのを見るたびに、不安になるんだ。あいつは環境変わってもなんとかやってけるだろうとか、あいつは心配だとか、いろいろ考えたりもするね。」

それに、辛い。仲間を失ったように感じる。やっぱり、今まで一緒にいた相手と会えなくなるのって、心の一部が切り取られたみたいで苦しいよ」

村田さんの目は、寂しそうにショーケースの中を見ている。

「まあ確かに、千里ちゃんの言うとおりかもしれないね」彼は嘆息して店内を見回す。「こいつらも、早く広い世界を見たいと思っているのかもしれない」

その日の夜、私は、なかなか寝つけなかった。布団に入り、明かりを消した部屋の天井を見つめても、眠気は訪れてこない。

例のワンちゃんがあのペットショップからいなくなってしまったことに対して、一切の感懷がないと言えば嘘になる。けれど、それ以上に、村田さんの声が耳に残っていた。

——今まで一緒にいた相手と会えなくなるのって、心の一部が切

り取られるみたいで苦しいよ。

その言葉が、ずっと私の耳に残っている。

そして、リョウくんの顔までもが浮かび上がってくる。

リョウくんは、どういう思いで図書準備室を手放したのだろう。私のためとはいえ、図書準備室での時間がなくなれば寂しくもなるだろうに。辛い思いをするのはわかっていただろうに。

彼だけじゃない。穂波だって春香ちゃんだって。それに――。

そのとき、枕元に置いていた携帯電話が鳴り出した。メロディーとともに発光する。暗闇に慣れてしまったために眩しく感じる光に目を細めながら、携帯電話を手取る。相手の名前を確認し、少し躊躇した末に通話ボタンを押し、電話に応ずる。

「はい、もしもし?」

しかし、しばらくの間、相手は無言だった。やや荒っぽい呼吸する音だけが聞こえてくる。

結局そのまま、相手は何も言わずに電話を切った。私は、無機質な機械音が鳴り続ける携帯電話を、いつまでも耳に当てていた。

第3章 e p i l o g u e (後書き)

これで千里編はとりあえず終了。次からは麻乃編になります。

第4章 プロローグ（前書き）

麻乃編プロローグです。

第4章 プロローグ

もう、壊れてしまいそうだった。

他愛もない日常が。幸せな日々が。心の拠り所が。——何もかもが、音もなく崩れてゆくような気がしていた。

学校から帰っても、家の中に人の気配はなかった。静寂だけが私を出迎えた。広々とした家に、私が靴を脱ぐ音だけが響く。

ただいま。

そう囁く瞬間が、一日で一番虚しい。

リビングに行くと、部屋の真ん中のテーブルに置き手紙が一枚あった。広告の裏に、殴り書きしたような乱雑な字で、見慣れた文字の並びが書かれている。

『今日も遅くなる。美樹より』

カーテンから差し込む薄明かりを頼りにそれを読んだ後、私はソファーに飛び込んだ。ソファーの革が、ひどく冷たかった。

私の両親はいない。といっても、死んだわけじゃない。去年の末くらいから、二人で行き先すら告げずにどこかへ行ってしまった。それから両親は一度もこの家に帰ってきていない。

両親はまるで新婚のように仲がいい。だが、私と姉貴に対しては、まるで赤の他人を見るような冷たい目を向けた。昔からそうだった。産まなければよかったと言いたげな目で、なんでここにいるのと言いたげな目で、私たちを見てきた。そんな風に見られるたびに、私は怯え、悲しんだ。

以前にも両親が二人で出かけることは頻繁にあって、二、三日家を空けることも珍しくなかった。でも、今回のように三週間以上も帰ってこないなんて、今まで一度もなかった。

——いいじゃん、別に。好きなように暮らせるわけだし。

姉貴はそう言って笑い飛ばしていたけど、私はそんな気には到底なれない。

以前雇っていた執事には、お金を払えないからという理由でやめてもらった。

収入がなくなった分は、姉貴がどうにか稼いでいる。どこかでバイトしているようだが、最近はそれだけでは足りなくなったと言っていた。

一方の私は、何もしていない。バイトをするには面倒な手続きが必要らしく、加えて、姉貴が自分だけで十分だとしきりに言うからだ。二人とも退学すればもっと生活は楽になるのに、姉貴はそれを

も拒む。

私は、何もできない。姉貴が苦しむ姿を眺める意外、何ひとつできない。

今のこの家に、幸せなんてありはしない。愛もない。希望なんか影も形もない。

今頃、リョウくんは何をしているだろう。千里は、穂波は、春香ちゃんは、何をしているだろうか。みんなと過ごした日々を顧みる。トランプをして賑やかに遊んでいたときもあったし、することもなく沈黙が続いたときもあった。けれども、何をしていようと、あの場所にいれば私の居場所があったし、あの場所にいればありのままの私をさらけ出すことができたように思う。

じゃあ、今の私は？

そんなことを考えてしまい、ため息を吐き出そうとする。が、出ない。そうする気力すらなかった。

図書準備室で過ごした日々が、遠かった。

気づいたときには、部屋はすでに闇に包まれていた。どうやらソファアの上で眠ってしまったようだった。自分の髪が数本、口の中に入っていた。上体を起こして髪を掻き上げる。制服から着替えずに寝てしまったためか、スカートにもブレザーにも皺がついていた。

立つと、足がふらついた。暗い部屋の中をふらふらと歩き、どうにか電気のスイッチをつける。

壁にかかった時計は、二時ちょうどを差していた。ついでに玄関へ行ってみるが、姉貴の靴はなく、私の靴だけが寂しそうに仲間の帰りを待っていた。

いつもなら姉貴はとくに帰ってきているはずの時間なのに。何かあったのだろうか。

不安になり、ブレザーのポケットからケータイを取り出したときだった。

雪の上を車が走る音がした。その音は次第に近づきながらも小さくなっていき、やがて、家の前辺りで止まった。車のドアが開いて誰かが降りたようで、声がする。耳を澄ませて聴いてみるが、何を話しているのか明確にはわからない。音量を抑えているせいだろうか。ただ、一人の声じゃないことはわかる。二人の声だ。片方は聞き覚えがある女のもの。おそらく、姉貴の声。もう片方は初めて聞く声で、男のものだった。

姉貴が誰かに送られてきたの？　しかもこんな時間に？

さらに募る不安。

そしてそれを倍加させたのは、続いて上がった男の声だった。

「ざけんな、話が違うだろ！　一週間つつー話だったじゃねーか！　金はそれからだっつただろうがよ！」

時間帯をわきまえない突然の大声に、私の肩はびくっと跳ね上がる。心臓が凄まじい速さで脈を打ち、お腹が私に痛みを訴えだす。

「わかってるけど、どうしても今すぐ欲しいの！ その代わり、これから一週間、あんたの好きなようにしていいからっ！ あんたの言うこと、何でも聞くからっ！ 何だってするからっ！ だから…お願い」

男とは対照的に、女の叫びは、悲痛な響きを内包していた。

私は、耳をふさぐ。

……もうやめて……聞きたくない……やめて……やめて……。

すべて……すべて、壊れてしまえばいい。そうだ。床に落ちて割れる皿のように、ひびが入る間もなく、全部、砕け散ってしまえばいい！

私は、その場にうずくまる。

憎い。

恐い。

辛い。

痛い。

苦しい。

寂しい。

悲しい。

……もう、
嫌だ。

第24話 ふざけないで

心の声は、誰にも聞こえない。どんなに嬉しいと思っても、どんなに辛いと感じていても、自分以外の者には一切聞くことのできない声がある。そのおかげで、誰しもが自分だけが持っている内なる世界に潜って思考することができる。また、それゆえに、悲しみ、苦しみ、悩むことだって数多くある。

俺は今、そんなことをつくづく思い知らされていた。

授業よ早く終われと願っているのに、時間が俺の心の叫びを聞き入れてくれないのだ。

「……私が黒板に書いた構造式からも自明であるように、ギ酸はカルボキシル基とアルデヒド基の両方を持っています！ ということは！ ということはですよ、カルボン酸かつアルデヒドなんですね。つまり、炭酸よりも酸性が強く、かつ、銀鏡反応や還元性を示すのです！ 二つの顔を持っている。……まるで人間のようで身近な存在に感じるではありませんか！ この素晴らしきギ酸を生成するためには、ホルムアルデヒドを酸化するか、あるいは――」

五時限目。微妙に美人な化学教師が実に幸せそうな顔で有機酸に関する熱弁を振るっている。だが、そんなに熱く語っていたところで、火気のないところに炎が灯るはずもなく、俺は黒板なんぞまったく見ていなかった。

自分の席とは正反対に位置する座席を眺めていた。教室の前方のドアに最も近い席が、空いている。

麻乃が学校を休んだ。

風邪を引いて熱でも出したからなのか、今日は金曜日だからサボって土日に合わせて三連休にしちやえと思ったからなのか、はたまた生理痛があまりにひどかったからなのか、俺は知らない。担任教師すら理由がわからないらしい。休むという連絡があったただけだという話だ。

だが麻乃は、遅刻こそすれ、学校を些細な理由で休むようなやつじゃない。何があったんだろうか。バイト関係じゃないといいけど……。

そのようなことを考えていたら、右頬に何かが直撃した。「いてっ」と小さな声が洩れる。

昼食後であることに加え、化学教師からの催眠呪文を受けたことによって重くなっている瞼を数秒間指で押さえた後、飛んできた方向——右隣の席——をチラッと見る。

野上の右手にはシャーペンが握られている。左腕で頬杖をついた野上は、シャーペンの先を開いたノートに押し当て、ポキッと芯を意図的に折ってはさらに芯を出し、それが折れるとまた黒鉛の細い棒を生産しやがり、またまた即折る。それが俺に百発百中。極めて迷惑である。ぶん殴ってやろうかと思ったが、授業中なので自粛した。

視線を野上の手元から彼女の顔へと転ずる。ぼーっとした表情が

俺を向いていた。

え？　なんでこっち向いてんの？　ていうか無意識下で攻撃を仕掛けてきてません、野上さん？　可愛い顔して何をされているのですか？　俺に何か恨みでもおありですか？

俺が表情に困惑の色を浮かべてみせるものの、野上は未だに狙撃の手を休めない。芯の無駄使い極まりない。

「……はいはい、その二人、見つめ合うなら授業中ではなく休み時間にしなさい。聞こえてますか、野上さん、涼くん」

とうとう教師に注意される始末。クラスの至る所から笑いが起くる。俺と野上は恥じらいながら目を逸らす。

「もしやもしや、おまえら二人、付き合ってるんかい!？」

「そーだったのねえええーっ!」

「知らなんだあ」

「いつから付き合ってたんでちゅか!？」

「お似合いですわよだぜ!」

変な言葉遣いをしているアホな連中を黙らせるため、「うるせー。授業中だ」と言うと、教室は徐々に元の静けさを取り戻した。俺は深いため息をつき、頭を掻く。授業のあと半分は寝て過ごすかー、と思って机に突っ伏す。

その数秒後、右の方からひそひそ話が聞こえてきた。

「ひょっとして両想いの、希ちゃん？^{のぞみ} 相手がリョウくんだけに、両想い？」

あまりに突飛な発言だったので顔を上げると、野上の前の席に座る女子生徒が、振り返って野上に話しかけていたのだった。

野上はというと、俺と目が合うと、どういいうわけか、真っ白なはずの顔を真っ赤にして俯いてしまった。

……何だこれ。

で、休み時間。

俺はまたしても野上に見つめられていた。これにはさすがに耐えかねて、「何だ？」と尋ねたところ、

「いや……だって、さっき、先生が、見つめ合うなら休み時間になさって言ったから、先生の言うことは聞かなきゃいけないから、それで……」

頬を紅潮させながらもじもと話す野上は信じられないくらいに可愛かったのだが、俺はその小学生みたいな考えに頭が痛くなった。

「……………あ、そうっすか」

「うん、そうっすよー……」

眠いのか元々なのか、今にも閉じてしまいそうな細い目がなんだかエロっぽい。小さく開かれた口がその感じを助長している。

「あの……野上？」

「うん？」

「次の時間は体育なんだけど……」

「知ってるよー」

「あ、いや……だからね、なんていうか、じっと着替えてるところを見られるってのは恥ずかしいかなー、なんて」

「気にしないでー」

「……………」

というわけで、不服ながらも野上に価値あるお着替えシーンをジロジロと見られた俺。周りからすれば何とも奇妙な光景だったに相違ない。俺にとってもかなりレアな体験だった。……べ、別にそれが嬉しかったわけじゃないんだからねっ。そそ、そんな趣味は、ぜんぜんないんだからねっ。

さて。着替えを済ませた俺は、体育館用のシューズを片手に、体育館目指して廊下を小走りで進……………

「……って、なんでついてきてるの!？」

野上が未だにストーカーのごとく俺にまとわりついていた! しかも俺を凝視してる!

「なんでって、先生の仰せに従ってるんだよー」

さも当然のようにジャージ姿の野上は言った。

「……まあいいや」

どうせ休み時間が終われば解放されるだろうと思い切り、それからは廊下を歩きつつ話でもすることにした。

リョウくんって誕生日いつだっけー、とか、休みの日には何してるのー、とか、大変日常的な質問に対応しているうちに、体育館に着いた。

二人そろって上履きからシューズに履き替えていたとき、ふいに鋭い殺気みたいなものを感じた。

恐る恐る前を向くと、ショートカットの少女がジャージの長ズボンのお尻のポケットに片手をつっ込んで立っていた。眉間に皺を刻んで俺を睨んでいる。

「よ、よう、穂波。今、体育の授業終わったところ? 春香ちゃんは

先に戻っちゃったの？」

昨日のことを怒っているのを承知の上で、俺はどうにか爽やかな笑顔を作る。しかし穂波は、俺と野上をそれぞれ順番に見ると、ぷいと顔を背けてしまう。

「……サイテー」

「は？」

「……誰よこの女……ったく、違う女作りやがって……ふざけんなつての……私がいるつてのに浮気するなんて……」

横を向きながらぼそぼそと何やら呟いている。

「何？ 何か言った？」

ぶすつとした横顔に訊くと、穂波はまた俺を睨みつけ、

「バカはさっさと失せろって言ったの！」

体育館に響き渡るくらいの叫びを残し、体育館から出ていった。

野上やクラスの連中が気の毒そうな目を俺に向けていた。

今日の体育の授業はフットサルだった。他のチームが短い試合をしているのを見ると、吉永がニヤニヤしながら俺の隣に座った。

「おまえ、野上と付き合いだしたのか？」

近くに座っている他の男子生徒が聞き耳を立て始めた気配がする。
なので、わざと少し大きな声を出して否定した。

「違うって」

「ホントか？」

「ああ」

「なーんだ」

『なーんだ』

周りの男子が吉永の後に続いて声を揃えてたのが心底ウザかった。

俺は視線を遠くへ移す。

体育館を半分に仕切るネットの向こう側半分では、女子がバスケの試合をしている。何気なく野上を搜したところ、彼女はコートにいた。

野上はまるで人格が変わったみたいに真剣な眼差しをしていた。
やがて帰宅部とは思えない動きでももの見事に相手のボールを奪うと、ディフェンスを巧みにかわしながらそのまま一人でトリブルしていき、綺麗なレイアップシュートを決めた。

「希ちゃんカッコイイ！」

「バスケ部のカオリちゃんからボール奪うなんてすごーい！」

女子たちに声をかけられると、野上は普段通りにニコニコと笑った。弾けるような、笑顔。俺は、野上の笑ったところって結構好きだ。癒されるだけじゃなくて、何というか、野上に似合っている表情だと思う。

「うわ、うますぎだろ」と隣で吉永が驚嘆している。

俺も初めは度肝を抜かれた。性格から考えて、野上が運動神経に富んでいるとは思っていなかったからだ。しかし何度見ても、そのギャップには驚く。いやはや、世界にはいろんな人がいるんだなあ。

一人でうんうんとうなずいていたら、「あれ、どうしたんだあいっ」と吉永が向こうを眺めて呟いた。

見ると、さっきまで満面の笑みを浮かべていたはずの野上が、一転して寂しそうな面持ちでコートに突っ立っていた。ゲームが続いているにもかかわらず、石のように身動きひとつしない。

またぼけーっとしてるのか？

異変に気づいた女子が、ドリブルしながら野上の背中を突つくと、野上は我に返ったように動き出した。けれど、そのかんばせに、笑顔は一切なかった。

授業が終わり、フットサルで得点を上げて大層上機嫌な吉永と並んで体育館を後にしようとしたところ、ジャージの袖を誰かに掴まれた。

振り向くと、張りつめた表情をしている野上と目が合った。氣を利かせたつもりなのか、吉永が楽しそうにヘラヘラ笑いながら去っていった。

周りには、他の生徒も教師もいなくなっていた。静まり返った体育館に、俺と野上だけが存在している。

「どうした？ 休み時間だからまた見つめ合う気なのか？ あれはさっきの休み時間で――」

「ふざけないで」

俺の言葉を遮った野上の声に、目を見開く。いつものまったりとした声とは違って、鋭い。

驚きのあまりにどう返せばいいのかわからずにいると、

「赤井さんは、どうしたの？」

と、そっと囁くように訊かれた。その小さな声に、身体を大きく揺さぶられたような気がして、一瞬、平衡感覚を失った。

「先生が休みの理由を知らないってどういうこと？ リョウくんならその理由を知ってるんじゃない？」

「いや。俺もわかんねえんだ」

「じゃあどうして、リョウくんは平気でいられるの？」

「平気なわけない。俺だってずっと麻乃のこと考えてたんだ」

「考えてただけなんじゃない？ 赤井さん、三学期になってから明らかに様子が変わったよね？ リョウくんだって気づいてたはずでしょ？ 赤井さんに電話した？ メールした？ 赤井さんの家に行ってみた？」

声量は小さいままなのに、矢継ぎ早に放たれたそれらの問いは、俺の頭の中に大音量で響き渡る。

「……………」

何も言えない俺。

俺は、麻乃に電話もしていないし、自分からはメールもしていない。麻乃の家にも行っていない。それどころか、昨日なんて話しかけてすらいない。野上の言った通り、俺はただ、麻乃のことを考えていただけだった。その程度で麻乃を心配している気でいた。

「考えても実際に何もしなかったら、そんなの見て見ぬふりしてるのと変わらないよ」

……頭が痛い。……腹が痛い。……耳が痛い。

「それじゃあ最低だよ、本当に」

野上は、悲しげな顔つきで俺を瞥見すると、体育館を出ていった。
俺が一人取り残される。

——サイテー。

——最低だよ。

二人に言われた言葉が、俺の頭と胸をきつく締めつけていた。

第25話 どうして

放課後を迎えて、クラスの大抵の生徒がいなくなっても、俺は席から立ち上がることができずにいた。

確かに、最近の麻乃の様子はおかしかった。バイトによって体調を崩してしまっているんじゃないかとも考えた。だけど、俺が何かしたところで麻乃は元気になるのか。他人のことに執拗に首を突っ込むのは好ましくないのではないか。そんな考えばかりが浮かび、俺を迷わせていた。

……いや、違う。心の奥では、迷ってなどいなかった。迷うことさえ、していなかった。

率直に言ってしまうと、俺は、様々な理由にかこつけて、麻乃のために行動を起こすことを胸中では拒んでいたのだ。下手なことをして麻乃を傷つけるのは嫌だ。そのせいで自分までもが傷つくのが一番嫌だ……。

穂波や野上の言う通り、俺は、最低な人間だ。他人のことなんて二の次で。結局は、逃げることしか頭になくて。

もういい、帰ろう。最低でいい。どうせ、最低なんだ、俺は。

マフラーを巻いて、机の中に入っていた教科書やノートを鞆の中に押し込み、立ち上がる。鞆を肩に引っかけると、それは異常に重

く感じた。

廊下に出ると、ちょうど隣の教室から千里が出てくるところだった。コートを着て鞆を提げているから、もう帰るつもりでいるのだろう。何か考え事をしているような顔をしてこちらに歩いてくる。ストッキングを穿いておらず、細い生脚がスカートから伸びている。

しかも今日の千里はツインテールじゃない。腰まで伸びた黒髪を弱々しく揺らし、俯きながら歩く千里の足取りはひどく重そうでおぼつかない。

どうしたんだろう。

「千里」

呼びかけるが、千里は虚ろな目をして歩いたまま、反応しない。髪がボサボサなのがさらに心配を誘う。

「千里」

もう一回名前を呼ぶ。すると、わずかに肩を震わせて、こちらを向いた。立ち止まって会釈する。

「あ……おはようございます、リョウくん」

挨拶が時間的におかしい上に、声が暗い。

「何かあった？」

思わず訊くと、千里は瞳を伏せ、ぎこちなく笑う。

「ちょっと、寝不足で……」

「ゆうべ、勉強してたの？」

しかし千里は、首を左右に振った。マフラーに顎をうずめて悲しそうな面相になる。しばらく一人で迷った顔を継続した後、おずおずと話し出す。

「いえ、違います。昨日……正確には日付が今日に変わってからですけど、麻乃から電話があったんです」

麻乃の名前を聞いた瞬間、全身が強ばるのを自覚した。

千里の話によると、麻乃からの着信が入ったのは午前三時頃。だが、自分から電話をかけてきたにもかかわらず、相手は何も喋らなかったらしい。それでも、受話器の向こうにいたのは間違いなく麻乃だったと千里は言う。

「相手の息が荒かったんです。喘いであるような声が洩れて聞こえてきたの。……それが、麻乃の声だった」

千里は電話を切られた後、麻乃に幾度も電話をかけたが、電源が切られていて一度も繋がらなかったらしい。

「麻乃のことが気になって、その後は一睡もできませんでした」

そこまで麻乃を案じている千里が、遠い場所にいる人間のように感じた。

「あの、これから麻乃の家に行くつもりなんですけど、リョウくんも行きませんか？」

嫌だ。行きたくない。

そんなふうには即答しなかった。なのに俺は、最低な人間でいいと思っていたくせに、千里に嫌われたくないからという理由で、「行く」と答えていた。

千里とは何の会話もしなかった。おとといのように手を繋いだり、昨日のように抱きついたりすることもしないうちに、麻乃の家に着いた。

この辺りでは飛び抜けて高級そうな家。一階にはテラスがあり、白い椅子が四脚置かれている。天気の良い日には読書とかができるのだろうが、今は雪が木の床や椅子の上に積もっている。庭にも雪が被さっていて、ほとんど芝生が見えない。雪かきはしていないのかと不安になる。

千里は、何の躊躇もなく玄関へと歩いていく。俺は逃げ出したい衝動をどうにか抑えながら、千里の後に続いた。麻乃がいつも通りに元気であればいい。寝坊して遅刻確定して面倒だったから休んだとか言ってくれたらいい。

いささかの迷いも見せずにチャイムを鳴らした千里の顔には、しかし、辛苦しんくの表情が浮かんでいた。

それから十秒ほど待っても、何の物音もしなかった。千里が再びチャイムを鳴らす、やはり応答はない。俺と千里は顔を見合わせる。

「風邪でも引いて寝てるのかな……」

「そうかもな」

千里は、うーん、と唸って、何やら考え込んでいる様子。

「美樹先輩はまだ帰ってないんですかね……」

俺は、切れ長な目をした、麻乃にちょっと似た顔の美少女を思い浮かべる。

言われてみればそうだ。俺が教室で悶々としていたのは情けなくも三十分。学校からこの家までは十分もかからない。その間に美樹先輩が帰宅していてもいいはずなのに。まだ学校に残っているのだろうか。

俺が思量していると、千里がいつの間にか玄関を開けて中に入っていた。

「あ、これ、麻乃の靴です」

千里の指差す先を見ると、靴が一足、ぽつんと置かれていた。見覚えがあるその靴は、麻乃の靴に違いなかった。

「こんにちはあーっ！ 麻乃、いますかあーっ！」

可愛らしい声が、不気味なくらいに静まり返った家の中に響く。
だが、結果は変わらず、何の反応もない。

「最終手段ですね」

今度は一変して凜とした口調で宣言すると、千里はおもむろに靴を脱ぎ捨て、勝手にフローリングに足を踏み入れた。そして、ずんずんと奥へ進んでいく。長い黒髪が揺れるのを呆然と眺めていた俺は、ようやく我に返り、仕方なく千里に倣ってお邪魔することにした。

二階へ通ずる階段を前に立ち止まっている千里に追いつくと、

「麻乃の部屋は、確か、階段を上ってすぐ右でしたよね？」

と首を傾けながら質問。

「そうだったか？ 右じゃなくて左じゃなかったっけ？ 右は美樹先輩の部屋だった気がする」

「と、とにかく、行きましょう」

結構急な階段を一段抜かしで上っていく千里のスカートから覗く、真っ白な太ももに目を奪われているうちに、十数段ほどあった階段を上り終えた。

正面に並ぶふたつのドアのうち、千里が開けたのは左のドアだった。

「うわっ」

「ひどいですね、これ……」

その部屋に入った途端、俺は眼前に広がる光景が現実のものだと思えなかった。千里も呆然としてしまっている。

部屋の中は、これ以上ないくらい荒れていた。部屋の隅にあるタンスの引き出しはすべて開け放たれ、セーターやパーカーやワンピース、下着やショーツやジーパン、果ては水着など、ほとんどすべての服がタンスから出されていた。中央に置かれた丸テーブルの上には、雑誌や電卓、ハンガーなどが無惨なまでに散らばっている。ベッドの上にもたくさんの物が載っていて、それが寝具だということすら信じられない。

まるで空き巣にでも押し入られたかのような惨憺さんたんたる光景を前に、ただただ立ち尽くす俺の横で、千里がブレザーのポケットからハンカチを取り出し、鼻と口を覆った。避難訓練時の児童のようだ。

「うう……」

千里は不快そうな顔をしている。

「どうした？」

「この部屋、タバコ臭くないですか？」

「いや、別に」

答えると、千里はハンカチを鼻から離してクンクンし始める。お

まえば犬かと突っ込みたくなった。

「え、臭くないんですか？ おかしいですね……強烈なんですけど……」と首をひねり、またハンカチを鼻に押し当てる。

俺は、別に鼻が詰まっているわけでもなければ、嗅覚が極端に鈍いわけでもない。かといって、千里が演技しているとも考えにくい。ってことは、千里は実際、人並み以上に鼻が利くのだろうか。それこそ、犬のように。

「ふう……」

とため息をひとつ、吐き出す。見たところ、この部屋に麻乃はいないようだ。千里の記憶通り、麻乃の部屋はこの隣なのか。とすると、この部屋って……。

いつまでも部屋を眺めている俺に、「隣の部屋に行きましょう」と千里が促したときだった。

「……何やってるの？」

氷のように冷たい声が、耳に突き刺さった。背中になだらぬ寒気を感じる。

振り向くと、下着の上からカーディガンを羽織っただけの麻乃が、開けっ放しだった内開きのドアに手をついて立っていた。

ボタンを閉めていないカーディガンの前側から白い下着が覗いているのを気にもせず、麻乃は、顔のほつんどを覆い隠す赤い髪の間から、俺たちを睨んでいた。それは、明らかな敵意を感じさせる目

だった。

「麻乃、大丈夫？ 麻乃が学校休んだって聞いて……。風邪引いたんですか？ 熱はないですか？ そんな格好じゃ、身体に悪いですよ？」

震える声で、千里が麻乃に話しかける。しかし、麻乃は答えない。唇をきつく結び、鋭い眼差しで睨むをやめない。唾棄すべきものを見るような形相をしている今の麻乃に、普段の面影はない。

「帰って」

冷たく、言い放つ。一方の千里は、今にも泣き出しそうな顔を隠すように苦笑いする。

「で、でも、せっかく来たんだし、何か話を——」

「誰も来てなんて頼んでない。しかも、人の家に勝手に入るし、部屋にまで入るし……。ホントに迷惑。早く帰って」

その言葉に、千里は肩も震わせた。小さな目の端に、涙が浮かぶ。

「でも……」

「うるさい。いいから早く帰って。……帰ってよ」

「えっと、その……」

「……さっさと帰れって言ってるでしょ？ 聞こえないの？ ……早く帰れっ！」

声が裏返ろうが掠れようが、そんなことを意に介さないような叫びが部屋に響いて、俺は、俯き、目を背けた。

肩を強ばらせている千里の腕を掴み、麻乃と目を合わせることなく、その部屋を出た。

ドアが閉められる音がして、こっそり振り返ると、麻乃の姿は消えていた。部屋の中から、何を喋っているのか理解できない叫声と、ドアや壁を蹴ったり叩いたりする音が聞こえ、耳を塞ぎたくなる。

「どうして……？」

千里が、閉じられたドアに向かって、おえつ嗚咽混じりに呟く。しかし、麻乃は答えない。

部屋の中から響く、壊れたような叫び声と鈍い物音が、絶望に溢れていて、聞くに堪えなくて、千里の腕を半ば強引に引っ張りながら、麻乃の家を出た。

門のところで、千里と別れた。最後の最後まで、千里は「どうしても」と繰り返し呟いていて、俺は苦しくなった。何度もしゃくり上げながら去っていく背中を、ただ見送ることしかできない。

来なければよかった。千里の誘いを断っていれば、あんなに狂った麻乃を見ずに済んだのに。

千里と帰る方向は途中まで同じだったのに、俺は、遠回りして家に帰った。そんな自分が情けない。無力で、逃げてばかりで、臆病で、卑怯で、最低だと感じた。

第26話 違う

翌週、月曜日の朝。部屋のカーテンを開いて振り仰いだ空は、灰色で埋め尽くされていた。青空が顔を出す場所なんて微塵みじんもないくらいに分厚い雲。そこから今にも雪が零れ落ちてきそうに感じられますます陰鬱な気分になる。

昨日とおととい、俺は二日とも、家にこもっていた。かといって勉強はいささかもやらなかったし、ゲームすらもやらなかった。そんな気分ではなかったからだ。

麻乃のきつい眼差しや、冷たい声を見たり聞いたりしたのは金曜日のはずなのに、あのときの記憶がついさっきあったことのように鮮烈に蘇る。俺がどんなにアホなことを言ったときも、あんな恐い顔をしたことなどなかったのに。いったい麻乃に何があったのだろうか。何度となく抱いた疑問に対する答えは、未だに出ない。

暗い気分のまま家を出た。学校へ向かう途中も、歩きながら金曜日のことを思い出してしまっ、そのたびに腹がずしんと重くなった。いつものように、吉永がどこからか湧いて出てきて俺に絡んできたが、俺があまりに沈んだ表情をしていたためか、怪訝な面をしながら遠ざかっていった。

そんな調子を維持して教室にたどり着いた。麻乃は来ていなかった。多分、麻乃は今日、休みだと思う。

自分の席に腰を下ろしたちょうどそのとき、誰かに見られているような気配を感じた。そりゃあ誰かしら俺に視線を送ってくることもあるだろうと思って無視をしようとしたのだが、気配は止まず、しだいに気になってきた。

机に突っ伏そうとしたがそれを中止し、顔を上げ、気配のする方——出入り口となっている後方のドアを見る。

薄く開いたドアの隙間から、猫みtainな目が覗いていた。すぐに誰の目だかわかった。見返すと、直ちにその目は引っ込んでしまった。とりあえずそちらを見続ける。待つこと数秒後。まんまと再び現れた。そいつは俺を捉えようと、わざとらしく視線を上下左右に逸らたり、ドアから目を離して廊下を見渡したりした。しかし結局、目は垣間見を再開する。やはり異常にキョロキョロしている。時折何度も俺をチラ見している。

俺はようやく席を立ち、ドアの方へと歩み寄っていく。すると、その目は飛び退くようにドアを離れた。

廊下に出ると、普段誰も見ないような壁新聞を注視している女生徒を発見。かなり不自然だ。

「どうした、穂波？」

声をかけると、猫みtainな目をしたそいつは、かくれんぼで見つかったガキみたいな表情になった。

「え、わわっ、私？　な、なに、え、何か用？　ていうか……ていうかりョウ先輩、もう来てたんだ。さすが先輩、偉いね……あははー」

穂波は実にぎこちなく笑った。

「まあな。で、そっちこそ何か用か？ さっき覗き見してただろ？」

穂波は、校内で発行されている壁新聞に目を向けたまま、うなずいた。

「う、うん、そう。よく、わかったね……」

「……………」

しばらく待っても用件を言ってくれないので、仕方なくもう一回こちらから訊いてあげることにした。

「どうして？」

「一応、断つとくけど、リョウ先輩に会いたくなったわけじゃなくて……そう、会いたかったわけじゃないから」

と蚊の鳴くような声で前置きすると、穂波は俺の方に身体を向けて俯いた。

「あのっ、昨日……じゃなくて、金曜日は、あんなこと言っちゃって、ごめん……なさい。私、リョウ先輩が自分の知らない女の人といるのを見たら、なんか落ち着かなくなって、それで……」

わざわざそんなことを言いに来たのか。

「いいよ、別に」

あまりに低く、暗く、ぶっきらぼうな声だと、言ってしまったのか
ら感じた。おそらく、顔もぶすつとしていることだろう。穂波には、
俺が怒つてるとでも思われてるかもしれない。よく見ると、黒い瞳
に、透明な涙が浮かんでいた。これ以上穂波を傷つけたら、それは
穂波の頬を伝うだろう。そしてそれは、きつと、俺をも傷つける。

それでも穂波は、白い歯を見せ、精一杯というような苦笑いを浮
かべた。

「私、嫉妬みたいなこととしてた自分を認めらんなくて、ついあんな
こと言っちゃっただけなのっ。……リョウ先輩は、全然最低なんか
じゃないからね。先輩がいなかったら、私はずつと、暗闇の中にい
たかもしれないかったんだよ？　だから、先輩には……感謝してる」

最低だと言われたり、最低なんかじゃないと言われたりで、頭の
中が少し混乱していた。

そんな俺をよそに、穂波は、「じゃあ、私、教室に戻りますんで」
と告げ、苦笑しながら俺に手を振り、小走りで去っていった。

穂波がいなくなった廊下の真ん中で、だんだんとうら寂しい気分
に浸っていく。俺は、本当に最低なんかじゃないのだろうか。周り
の連中の傷を見てみぬフリをしている俺は……。

思案の途中、上履きの軽やかな歩行音が耳に入ってきた。一定の
リズムで床を踏む音が、背後から近づいてくる。振り向こうとした
刹那、突然抱きつかれた。背中に手を回され、相手の頭が胸元に押
しつけられる。周りの生徒たちが立ち止まって、ぎょつとしたよう
にこちらを見る。

「リョウくん、おはよっ！」

その相手は麻乃だった。普段なら、こんなことをされたら嬉しさのあまりに叫びながら校内中を走り回るだろう。しかし今は、わけもなく、悪寒おかんがした。

「どうしたの？ 元気ないね。暗い顔してるよ？」

顔を上げ、俺を上目遣いする目の前の赤い髪の少女は、果たして麻乃なのだろうか。金曜日に会った麻乃とはまるで別人だ。この休日で元気を取り戻したのならいい。

けど……。

「……リョウくん？ 大丈夫？」

「あ……いや。何でもない。おはよう、麻乃」

いつもより数段低いトーンで返すが、麻乃は俺の異変に気づいていないようで、ニコニコしながら俺から離れた。先程感じた変な寒気は、少しずつ収まっていくような気がした。

廊下の窓の向こう側では、雪の粒が次から次へと落ち始めていた。

「なあなあ。赤井のやつ、なんかいいことあったのか？」

昼休み。俺が自席で自作の弁当を頬張っていると、吉永が極めて気持ち悪い笑みを湛^{たた}えて寄ってきた。コロッケパンの入った袋と紙パックのジュースを持っているところからすると、俺と昼飯を食う気でいるらしい。勝手にそこら辺の椅子を拝借し、俺の正面に座った。

結局、麻乃は朝からずっとあの調子だった。真面目に授業を受けているようだったし、休み時間には自分から他の生徒たちに話しかけては、可愛い笑顔を振りまいていた。その麻乃は、今まで会話したことがなかったような女子生徒と談笑している。

「あんなに笑ってる赤井、初めて見た。ったく。最初っからああいう感じだったら俺だって考えてみなくもないのによー。不覚にも可愛いと思っちゃった。あいつがあんなに機嫌がいいと調子が狂うつーかなんつーか……。あ、だから今日は雪降ってんのか。なるほどなるほど」

と一人勝手に納得する吉永。

確かに、今日の麻乃が上機嫌だと思うのは当然だ。俺だって麻乃のあんな顔を見たことはほとんどない。麻乃に笑顔でいてほしくなうと言えどもちろん嘘になる。

だけど、やっぱり――、

「……違う」

それは、俺の声ではなかった。隣の席から聞こえてきた低い声に、俺と吉永は思わずそちらを見る。

野上が、吉永を睨みつけていた。彼女の机の上には銀色のカンペンがあるばかりで、弁当は広げられていない。いつもは昼休みになるとちゃっちゃと弁当とかを食べ始めているのに。

「な、何がだよ？」

吉永が若干ビビった声音で尋ねる。

「なんで誰も気づかないの？」

先日の体育館での俺とのやりとりを彷彿ほうふつとさせる、小さくも鋭い声。

「だから、何に？」

若干苛立ったように吉永が問うと、野上はふいに慌てて、そわそわし始めた。

「何って……えーと、その……。そ、そう！ 私も吉永くんと同じくコロッケパン持参だということにだよー！」

野上は、瞬く間に満面の笑みを作り出した。

「え、マジ？」

「うんっ！ やっぱコロッケパンって最高だよねー。パンといったらコロッケパン、みたいなー？ 私、コンビニに入ったらまず最初にコロッケパンのもとへ一直線なんだー。あ、一直線って言っても、入口から入ってちよつとまっすぐ行って、角っこをカクンと曲

がって、もーちーつとまっすぐ歩くんだけだねー」

にこっと笑ってそう言い、机の脇にかかっていたコンビニ袋をそくさとあさりだす。が、中をあさるだけで、何も取り出そうとしない。結局、袋の中から戻ってきた野上の手は、何も持っていないかった。しかし野上は、笑いを絶やさなかった。

「これって一直線じゃなくて、二直線って言うべき？」

「お、なるほど！ 二段階の直線だから二直線ってか！」

「そーっ！ さすが学級委員長！ 物わかりがいいねー！」

「ははっ。もっと褒めろもっと崇^{あが}めろ」

吉永はきつと気づいていないだろう。野上のコンビニ袋の中に、おそらくコロツケパンは入っていないことに。野上の笑みは、作りものだということに。

野上はきつと気づいているだろう。麻乃は、笑顔という仮面を被ることで悲しみや苦しみを覆い隠しているのだということに。

知った気でいる俺だが、麻乃が無理して笑っているという確信はない。ただ単に、麻乃は本当に元氣なのかもしれない。でも、それは違うと思う。明確な根拠なんてないけど、そう思う。

前方の出入り口のドアが開かれたのはそのときだった。教室の喧騒に紛れ、ドアがレールを滑る音が俺の鼓膜を震わせた。何のことはない音だったが、俺は、音源の方へ目を転じた。だが、すでにドアは閉じられていた。興味を失い、気を取り直して弁当食いますか

と箸を持ち直そうとしたところ、いつの間にか麻乃がいなくなっていることに気がついた。さっきのは麻乃が教室から出ていった音だったのかと思い至った。もうすぐ昼休みが終わるというのに、どこに行ったのだろうか。

——そして、麻乃は、午後の授業に一度も姿を現すことはなかった。

第26話 違う（後書き）

今回の震災で被災された方々に、今更ですがお見舞い申し上げます。

あの日から早くも二ヶ月が経とうとしています。

あんな悲惨な出来事の記憶でさえ、やがては無情にも色褪せてしまう。でも、あの日流した涙は、いつまでも忘れてはいけないものなんだと思います。

涙は人を弱く見せるけれど、涙はいつかその人を強くしてくれるものでもあるんだと、僕は心から信じています。

第27話 好きにしたらいい

帰りのホームルームが終わるや否や、俺は教室を飛び出した。

初めは、麻乃は保健室で休んでいるのかと思っていた。でも、それは担任教師の言葉で間違いだと気付いた。麻乃の行方を、担任すら知らないという。担任が保健室を当たってみたものの、麻乃は来ていなかったと養護教諭に教えられたらしい。

俺はまず最初に図書準備室へと走った。だが、鍵が掛かっていた。舌打ちした後、別な場所を探す。図書室にも屋上にも体育館にも音楽室にも理科室にも、その他の全教室にも、麻乃はいなかった。恥を承知の上で、通りすがりの女子生徒にすべての女子トイレの中を見てもらったが、見つからなかった。あの女子生徒は多分二年生だ。今後俺に変な噂が立つことは必至だろう。でも今は、そんなことを考えている場合ではないような気がした。

おそらく麻乃は、無断早退したわけではないと思われる。先程教室を出てくる前に、麻乃の机の脇に鞆が掛けられていたのを見たからだ。机の上には小さなリスのぬいぐるみがついた筆箱が置かれたままだった。とは言っても、学校内にいるということを証明する、確実な根拠にはならないけれど。

「おや、リヨウくんじゃないか」

突然、背後で声が響いた。突然ではなかったかもしれないが、そのときの俺は十分にそう感じた。

振り向くと、いつも図書準備室の鍵を貸してくれる事務員さんが缶コーヒー片手に立っていた。

「何してるんだい？」

ズズズ、とコーヒーをすすりながら問いかける。

「あ、ちょうどよかった」失礼極まりないが、面倒事は避けたいので、事務員さんの質問を無視する。確かめたいことがあった。「鍵、誰か借りていたりしませんでしたか？」

「鍵って、図書準備室の？」

そう尋ねると、再び缶を傾ける。わかりきったことを訊いてくるのはいいが、今は正直じれったい。

「はい」

そんな俺の気持ちに気付くこともなく、事務員さんはゆったりとした口調で言った。

「それならだいぶ前に、髪の毛の赤い子が借りていったよ。……えーと、確か、昼休みだったなー、うん」

俺は、お礼もせずに廊下を駆け出した。

朝から麻乃の様子は変だった。きっとあれは本当の麻乃じゃない。傷や涙を隠し、無理矢理に作り上げた姿に違いない。たった今、俺が走っている理由は、少しでも早く、麻乃に手を差し伸べてあげたいから。助けてあげたいから。そんなことが俺にできるかわからないけど、行動しない限りは何一つとして変わらない。

廊下を堂々と走り、見慣れたドアの前にたどり着いた。白い引き戸の向こう側からは一切音が聞こえてこない。

事務員さんの話からすると、図書準備室の鍵は麻乃が借りている。そして、先程、準備室の鍵は閉まっていた。ということは、誰かが内側から鍵を掛けていたと考えるのが妥当だろう。おそらく、麻乃は中にいる。

外では雪がひっそりと降っている。真っ白な雪の粒は、風のせいか、まっすぐではなく斜めに落ちていた。

ドアをノックする。しかし、中からの反応はない。

「麻乃、いるか？　いたら返事してくれ。んで、鍵開けて」

ドアに向かって言う。けれど、やはり返事はない。

「いるんだろ？　俺だ、リョウだ。返事しないでいいから鍵を開けてくれないか？」

……………。

無反応、か。

とりあえず、しばらく待つてみることにした。ドアに背を預けながら、周期的に指先でドアを叩き続ける。

トン、トン、トン……。

刻一刻と、時は過ぎてゆく。いつしか指先は、秒針が刻むような周期でドアを叩いていた。これでもし中に麻乃がいなかったりなんかしたら、かなりの時間を無駄にしたことになる。いたとしても、すでに結構な時間を費やした。

そろそろ真面目に説得でもするかと決心して立ち上がるのとはほぼ同じタイミングで、準備室の中から上履きの音がした。それはこちらに近づいてくる。麻乃だろうか。

いつまでも俺がいなくならないから、痺れを切らしたのだろう。

指に単純作業を強いら続けた甲斐があった。

ドアから離れて待つ。

程なくして、ドアは極めてゆっくりと開かれた。

「……………」

出てきたのは、やはり、麻乃だった。麻乃で違いなかった。

「よお、麻乃。捜したぞ。心配したんだからな」

「……………」

「……麻乃？」

そいつは、心を失ったような表情をしていた。

そしてそいつは、生きているとは思えない、つまりは、死んだような目をしていた。

これと同じような目を、見たことがある。

千里も以前、これに近い目をしていた。

あの頃の千里の目と、目の前の麻乃の目が重なる。

それは、信じるものを失った目。見るものを失った目。希望を失った目。

悪い意味で、吸い込まれてしまいそうだった。

「麻乃、どうした？　大丈夫か？」

麻乃の肩をに手を置いて、揺する。それでも麻乃は、抵抗しなかった。朝とは打って変わった様子だった。決して大丈夫には見えない。

「麻乃、とりあえず中に入ろう」

冷たい手を引いて、準備室に入る。

やけに寒い、と入ってすぐに感じた。廊下よりも幾分冷えを感じる。

それもそのはずで、ストーブが起動していない上、あろうことか窓が開け放たれていた。言うまでもなく、冷え冷えとした空気が入り込んでくる。

「こんなところに昼休みからこもってたのか？」

麻乃はうなずきもしなかった。虚ろな目をしたまま、虚空を眺めている。

俺は急いで窓を閉め、ストーブの電源を入れた。自分のブレザーを脱ぎ、麻乃に羽織らせる。

「もう少し経てばあったかくなるからな」

俺の声が聞こえているのかすら定かではなかった。

ああ、俺は今まで、麻乃の何を見てきたのだろう。ひょっとしたら俺は、麻乃の一切を見てこなかったのかもしれない。そうだ、表面だけを知ったつもりでいて、奥深くを知ることから逃げていた。

いつだって俺はそうだった。千里に、俺といるのが苦しいと告げられたとき、図書準備室で過ごすのをやめようと決断したのは、自分までもが苦しくなるのが嫌だったから。今日だって、麻乃と話せる機会なら十分にあった。それでも話しかけなかったのは、麻乃のことを詳しく知ってしまうのが恐かったから。自分が傷つくのが嫌だったから。

そう思っではいるくせに、俺は自分を変えられない。結局は背中を向けるだけ。それしか知らないかのように逃げ続けて、闇を前に

すると光が恋しくて引き返す。光の中では、闇の中なんて見えるはずがない。闇の中に立てば、暗い場所も少しは見えるし、明るい場所なんていくらでも見える。けど、闇を恐れた俺は、バカみたいに光の中に居座っていた。

本当だ、俺は最低だ。バカだ。自嘲したくなる。自分の腹を思い切り殴りたくなる。

身体のはらは、どんなに深いものであっても、いつか必ず塞がる。痛みを耐え続けていれば、傷口があったことすら忘れられる日がくる。春を迎え、雪が解けていくように。

けれども、心の傷はそうはいかない。いくら痛みを耐えても、目に見えない傷口は、記憶がある限り、小さくなることはあっても消えることはない。衣服にこびりついてとれなくなったシミのように。

麻乃はおそらく、何らかの心の傷を抱いている。そしてその傷は、深く、容易には消えないだろう。

「……私……」

風と聞き間違えるほどの小さな音は、確かに麻乃の声だった。普段のような明るさはまったくなかったものの、声が聞けただけでもよかった。

「バイトなんて……してない」

「……そうだったのか」

冬休み明けから、麻乃の様子はおかしかった。いや、今思えば、冬休み中にも不可解な反応を見せたときがあったような気もする。麻乃の様子が変だったのは、バイトの疲れのせいではなかったということか。

麻乃は、弱々しく平坦な声で語った。

「バイトしてるのは、姉貴。両親が、いろいろあって今は家にいないの。生活していくのに要るお金もない。だから姉貴がバイトしてる。毎日、夜遅くまで。やるべきじゃないことまでやってると思う。二人とも学校を退学すればもっと楽になるのに、姉貴はそれを認めないの。私もそうだけど、姉貴は特に親が嫌いだから、親がいないからって普通の生活を諦めるのが嫌なんだと思う。でも、私、姉貴を楽にさせてあげたい」

ストーブはまだ動き出さない。外で強い風が吹いたのか、窓がカタカタと鳴った。寒くて、ここから出たいと思ってしまう。

「だから」麻乃は、息を吸い込むと、ようやく俺の目を見た。「せめて、私だけでも、学校辞めようと思うんだ」

その告白を聞いた途端、急激に頭の中の熱が失われていく感じがした。

「そうか」

そんな素っ気ない声が、知らぬ間に出ていた。

俺は、こんなに冷たい人間だったろうか。

……止めるべきか？

そうだ。止めればいい。学校辞めるなんて考えるのをまず止めろ、なんてことを叫び、思いつくままに言葉を並べ、麻乃を説得すればいい。そして半ば強引に、俺にとってのハッピーエンドへと導く。それが今までの俺のやり方だったはずだ。

だけど今回は、他人が容易に引き留めていい場面じゃない。他人が余計な口出しをしていい場面じゃない。もし俺が無理に麻乃を説

得して学校を続けさせたところで、麻乃が言ったように美樹先輩が苦勞するだけだ。麻乃は美樹先輩のそんな姿を見るのが我慢ならなくなつたから、学校をやめると言い出したんだ。その邪魔をするのは自分勝手過ぎる。

「好きにしたらいい」

もう、麻乃を説得する理由などなかった。だからそう言った。
いや、違う。

もう、麻乃を説得するのは無理だと思った。だからそう言った。
いや、これも違う。

もう、麻乃を説得するのは面倒だった。だからそう言った。
少し違う。

もう、どうでもよかった。だからそう言った。

そうだ。それが本音だ。

今まで麻乃のことでいろいろ悩んだり、自己嫌悪に陥^{おちい}ったり、走り回ったりしてきた。でも、麻乃の抱える家庭の事情を聞いたとき、俺が麻乃のためにやってきたことはすべて無駄なものだったのだと思つた。俺の手に負えることじゃないと。これ以上そんな行動をしても、もはや徒勞に終わるだけだと。一度そう思ってしまうと、それまで自分に言い聞かせてきた言葉でさえ、どうでもよくなつた。
好きにしたらいい。

それは、表向きは麻乃の意思を尊重しているようではあるが、最悪な発言だった。千里や穂波、そして春香ちゃんにこれを聞かれていたら怒られそうな、無責任な言葉。

そして実際、聞かれていた。

ノックもなしに勢いよくドアが開かれた。振り返ると、春香ちゃんが立っていた。凍えるような目で俺を見ていた。

「春香ちゃん……久しぶりだね」

俺の挨拶にも、彼女は一切反応を見せなかった。俺から目を離すことなく、口を開く。

「あなたの顔はもう見たくはなかったのですが、図書室へ行こうとしたら偶然にも聞き覚えのある憎たらしい声が耳に入ってきてしまったので」

静かな声には、しかし、明らかに俺への怒りが含まれていた。

「……二度と顔を見ることのないようにしてもいいですか」

そう言うと、春香ちゃんは自分の後頭部に手を伸ばし、ポニーテールをほどいた。

それが何を意味するか、俺はすぐに理解した。

第28話 仕方ねえ

それはあまりに一瞬のことだった。

正確に言うならば、冷たい目で俺を睨みながら髪を解いた春香ちゃんが、大きく息を吸い込んで、おそらくは俺を蹴るために脚を上げるまでが一瞬だった。

というのも、

「何をしてるんですか」

廊下から響いたその声が、春香ちゃんのその先の行動を制止したからだ。それは男の声だった。

春香ちゃんは、振り上げていた右足を下ろし、俺から目を離すと、声がした方を振り返った。それを確認した俺は、身の危険がとりあえずは遠ざかったことを察し、少なからずほっとした。

が、それも一瞬のことだった。

その声の主が生徒会長だったからだ。

麻乃は、俺の横に立ったまま動かず、春香ちゃんは生徒会長の方を向いたまま動かない。ひよっとして春香ちゃんは、生徒会長を睨みつけてるんじゃないだろうか。そんな気がしてならない。

会長は、そんな春香ちゃんに臆することなく、うつすらと微笑を浮かべながら、まっすぐに春香ちゃんを見ているようだ。

やがて穏やかにこう言った。

「まさかあなたたち、この間の勧告を忘れてるんじゃないでしょうね」

春香ちゃんが応答してくれるだろうと期待していたものの、いつまで経っても彼女は黙っていた。

「三学期が始まってすぐ、この場所から立ち退くよう言ったはずですが、もちろん覚えてますよね」

生徒会長がご立腹なので、代わりに俺が答えようと口を開きかけたとき、会長は苛立いらだったようなため息をつき、気怠そうに俺と春香ちゃんを順に指差した。「……まあ、あなたたち二人は別にいいんですよ」とついさっきまでとはまるで違う低い声で言うと、彼はこっちに向かって歩み寄ってくる。よく見れば、彼は麻乃を睨んでいた。

「知り合いから聞いたんだけど」彼は、麻乃の目の前まで来ると、赤い前髪を鷲掴みした。彼の態度は、明らかに豹変ひょうへんしていた。これが生徒会長であるという事実が信じられなかった。「おまえ、昼休みに勝手にここの鍵借りてきたんだって？」

思う存分会長をぶん殴ってやりたかった。けれど、俺は木のようにつ突つ立ち、何の抵抗も反応もしない麻乃を傍観しているだけだった。俺はただ、もし会長を殴ったとして、その後に自分に対して課される処分のことを案じてしまっていた。情けないことに、声も出ない。春香ちゃんは、会長に鋭い眼光を向けている。今にも何かアクションを起こしそうな感じを受ける。

「なんか言えよ、アホが。何なら土下座したっていいんだぜ？ 『ごめんなさい、もうしません。私がバカでした』って言いながら、雪の上で明日の朝まで土下座したら、許してやっかどうか考えてやってもいいけど？ おい、どうする？」

それでも麻乃は答えない。目を伏せ、黙りこくっている。

「あれ？　もしかして、バカすぎて語彙力ごいりよくがなくて、何も言い返せないのかなあ？」

未だに黙る麻乃に見切りをつけたのか、会長は舌打ちした。そして、麻乃の髪から手を放さずに、俺たちの方を見た。今俺の目前にいる彼に、さっきまでの穏やかさはまったくなかった。

「言っときますけど、俺、チャラチャラしたやつらが大っ嫌いでね、自分らがまるで世界の中心にいるみたいな気であるのがムカついてムカついて仕方なくて。他人の迷惑を顧みずに好き勝手やって、そのくせ周りに何か言われるとバカみたいに興奮して反抗しやがる。虫酸むしずが走るったらねーんだよ。で、あんたらがその代表。周りの迷惑になってることに気づかずに騒ぎ続ける。そいつらを見て怒りを覚えるなっていう方が無理がある」

否定はできない。他の誰かと一緒にいると、楽しさのあまり周囲への配慮を忘れてしまうことがあるのは確かだし、この部屋で過ごしているときの俺たちは、まさにその状態に陥っていた。一方で、そんな連中に対して悪い印象を受ける人がいるのも事実だ。

「そんなの、仲のいいやつといれば誰だってそうなるときもあるだろう、程度はともかく」

俺がようやく声を発すると、会長は麻乃の髪を乱暴に放した。その勢いで、麻乃がバランスを失う。そのまま床に倒れそうになるところを俺が受け止めようとするものの、麻乃に触れる直前に会長の足に振り払われた。麻乃の身体が床の上に仰向けで倒れる。鈍い音が響いた。

「うっ」

「麻乃！」

呻き声を上げた麻乃に、俺は駆け寄った。春香ちゃんは驚きと怒りが混じったような表情をしていた。

一方の会長は、謝る素振りなど一切見せず、彼女を冷ややかに見下ろした。

「百歩譲ってそうだとしても、俺は、この女が大嫌いなんだよ。特にこの髪がね。こんな赤い髪、生徒会長たるこのボクが黙って見てるわけないっしょ？」

床に広がった麻乃の長い髪を、何の躊躇ちゅうちゆもなく踏みつける。何度も何度も、足を上下させる。麻乃は動く気力すらないのか、顔をしかめながらも、それに抗おうとはしない。

「数え切れないくらい注意した。若田部先生にだって何度か注意されてたはずだ。けどこいつは従わなかった。スカートが短いだけならともかく、赤い髪を毎日さらされると、見るたびに鳥肌が立つんだよ」

やがて麻乃の髪を踏むものにも飽きたのか、会長はその場にしゃがみ、麻乃の顔を不敵に笑って見つめる。麻乃は、怯えたような表情になり、目を背けた。その動作も弱々しかった。

会長は、麻乃の脇腹を足で突いた。それを何度も繰り返す。そのたびに麻乃は短い声を漏らす。

俺は、立ち上がり、拳を握りしめていた。

「おまえさ、なんで生きてんの？ 目障りなんですけど。生きてて恥ずかしいくない？ 恥ずかしいよな？ もちろんそうだろ？ だっ

たら話は簡単だ。……死ねばいい。まあでも、屋上から飛び降りる
つつーのも平凡でつまんねーから、もっと派手な死に方がいい。そ
うだな、例えば――」

「黙れ」

やっと声が出た。

「……ああ？」

言葉を遮られた会長が、しゃがんだまま俺を見上げる。

「さっきから黙って聞いてりゃ、好き勝手言いやがって。うるせー
んだよ」

「何だと？ ふざけんなよ、てめえ」

立ち上がった会長が俺の襟首を掴もうとしたであろうところで、
別な声が割り込んできた。

「私も同感です。いつ言おうか迷っていたんですが、私は、さっき
からあなたが実に騒々しいので大変腹が立ってるんですよ。彼の言
った通り、さっさと黙ってくださいませんか、生徒会長」

声は、俺の背後――ドア付近から聞こえてきた。そしてそれは、
言うまでもなく春香ちゃんの声だった。

当然ながら会長は激怒した。

「何だと？ もう一回言ってみろ」

「聞こえなかったんですか？ 大層耳が遠いんですね。先程から生徒会長様がごちゃごちゃと耳障りな声で喋っているのが我慢できないくらい喧やかましいからいい加減黙れって言ったんです。今度は聞こえましたか？」

春香ちゃんは腕を組んで平然と言うと、壁に背を預けた。その表情には余裕すら見て取れた。

加えて彼女は、場違いにも俺を見て小さく笑った。

多分だが、春香ちゃんは俺が会長に何か言うのをずっと待っているんじゃないかと思う。俺を試していた、というべきか……。

「ふざけんなよ、てめえ」

「……どうやら、語彙とほに乏しいのは赤井先輩ではなく、あなたの方みたいですネ、会長さん。よくもまあそんな語彙力で生徒会長になりましたこと。以前は副会長だったそうですが、どちらも信じられませんね。私より年上であることさえ信じがたいです。もっと国語のお勉強をなさってはいかがですか？」

火に油を注ぎまくっている春香ちゃん。

会長は盛大な舌打ちをひとつすると、春香ちゃんに近づいていく。それでも彼女は顔色一つ変えないで、会長を見返していた。

「おい。おまえ、確か一年の川瀬春香だったな。どうなるか、わかっただろうな」

「私を殴ろうと考えているのでしたら、やめた方が身のためですよ」
でしょうね。確かにやめた方が賢明だ。いろんな意味で。
春香ちゃんの言わんとすることが会長には伝わったろうか。

「今更怖くなったのか？ あんだけ減らず口叩いたくせに」

案の定、伝わっていなかったらしい。

このままではかつて見た光景の再現にかなりそうにない。何より、このまま突っ立ってたらいつまで経っても俺は最悪なままだしな。

だから俺は、言った。

「女の子相手に何してんだよ、おまえは。さらには別な女の子を殴ろうとするたあ、ひどい会長様だな。つか、俺らが黙れつつったの忘れたのか？ 語彙力だけじゃなく記憶力も乏しいらしいな」

言い終わるや否や、会長がこちらを向いた。無論、睨んでくる。会長はもう何も言っていない。相当怒ってる。人を意図的にこんなにも怒らせたのは初めてだった。

……まったく。仕方ねえ。

そんなことを心の中で呟いて、俺は会長を睨み返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0012j/>

図書室へ行こう2

2012年1月5日19時45分発行